

も困る譯けなれども濁酒焼酎は我口に適せず家釀を飲むは殺風景なり我志願は上品の清酒を鯨飲せんと欲するものなれども意の如くならず寧ろ之を竹槍席旗に訴へて我志を伸べんと云ふ者あるも先づ今日の社會にては賛成を得ざるべからん是亦我輩が特に酒稅說を主張する由縁なり

或人の說に酒稅は酒屋の稅に非ずして酒を飲む人の稅なりとの道理は一應道理なるが如くなるも兎に角に直接に税金を納る者は酒屋なるが故に目下の資力に堪へ難し云々と尙苦情を鳴らす者なきに非ずと雖ども此說は物の數を計へずして唯漠然の際に否を云ふものなれば我輩は寧ろ之に答辨せずして更に一步を進め酒稅の却て酒屋の爲めに便利を呈する部分を擧げて爰に之を示さんとす即ち其次第は酒屋も一種の營業人なり凡そ營業人として其賣買に貴き物を取扱ふと賤しき物を取扱ふと孰れが利なるやと尋ねたらば必ず貴き物の方と答ふることならん金は銀より貴く、銀は呉服より貴く、呉服と太物と、太物と荒物と何れも物の貴賤の差にして其貴き物とは形の小にして賣買の價の高きものを云ふなり左れば今この旨を擴めて酒を論ぜんに無稅の酒なれば百石にして價千五百圓なるものが之に稅を課したるが故に二千餘圓のものゝ爲り裏より論ずれば酒の形を縮小して賣買の價は貴き品物に變じたりと云ふ可し太物の呉服に變じたるが如く、呉服の金銀に變じたるが如し、扱この貴き酒を賣買するに當り時價の變化に逢ふとせん、既に二千餘圓の價格を占めたる物の高下は單に千五百圓の物に就ての差違よりも大なる可きや明かなり物價の昂低大なればとて利を得るの大なるを必ず可らずと雖ども少量を以て大金を運動せしむるは營業の品格を進めたるものと云はざるを得ず況や無稅の酒も有稅の酒も之を造るの勞力は同様にして之を容るゝの器物も異ならず運搬の費の如きは品價の貴き割合に従て廉なるを覺ふ可きに於てをや實際の利益もなきに非ざるなり

第三

右の理由にして酒に稅を課せらるゝも酒屋に於ては其利害に關係あらざれば毫も不平を訴ふ可きに非ずと雖ども唯酒屋の爲に謀て或は難澁す可きは官の筋より釀造検査の活潑ならざると隠造摘發の精密ならざると此二箇條なり抑も酒の釀造は全く化學の定則に由て成るものなれば釀造中其器物の開閉を慎しみ其取扱に注意するは最も大切なことにして時候の寒温を窺ひ一分時の遲速あるも大損害を致すことあるが故に其醱酵の進退を視察して手を下だすの趣は醫師が病症の機變に應じて藥を投ずるものに異ならず其類敏を要すること以て知る可し然るに検査官が此事情を解せずして苟も怠ることあれば釀造の機は天然に無難なるも人爲に妨げられて酒屋の營業に言ふ可らざるの損亡を蒙らしむるもの少なからず或は官吏の怠慢に出るものもあらんと雖ども派出吏員の少なきと其身分の重からざるとに由て自然に生ずるの弊害と云ふ可し又稅の重きに從て隠造を企る者多きも人間世界に免かる可らざるの常態なれば嚴重に之を防がざる可らず然るに政府の法を犯さんと企る程の者は必ず大膽にして然かも才智ある人物なれば検査官の來るあるも一見分明なる帳簿を示し難問に答辯すること甚だ快活にして毫も疑ふ可きの痕を現はさざるが故に往々其陰惡を掩ふに足る者多く之に反して質朴正直の酒家翁は先づ官員の名を聞て恐縮の心を生じ偶ま詰問せらるゝことあらば訥辯口吃して言ふ能はず、帳簿疎漏にして分明ならず、器物狼藉にして秩序を失ふ等吏員の目を以て之を一見すれば是ぞ怪しき者ならんとて益詰り責れば益狼狽して遂に些少の手落の爲に罪に陥る者なきに非ず之を要するに正者禍を蒙りて不正者は罪を免かるゝものと云ふ可し以上は今日に於ても往々人の窃に聞見する所の流弊なれば今後若し酒稅の次第に増加することあらば其弊も一層の甚しきを加ふ可きや疑を容れず故に政府は特別に此に注意して酒造検査に就

ては大に吏員を増して其身分を重くし其俸給を豊にして其心事を高尙ならしめ常に酒造の地方を巡回して検査の時を誤らざるのみならず時として酒屋より之を促がすこともあれば醫師の急病に走るが如く風雨の夜中をも犯して出張する程の覺悟あらしめ又其隱造の注意に就ては即時其場所に臨で吟味す可きは無論、尙其上にも平生其地方の評判風聞を探偵して秘密に各酒屋の人物を詳にし其心得を以て検査にも加減ある可きことなり

或は隱造の摘發には同業相互に密告せしむるの方便を用ふ可しとの説あれども政府の法律に對して人民の相互に密告するは法に於て妨なしと雖ども其事たるや頗る陰險にして社會の德義を損すること實に容易ならず苟も一度此陰險を犯す者あれば怨恨結で解く可らず古來世界中に其例多きのみならず現に今日我國に於ても商賣上に又政治上に其事なきに非ず何某は印紙貼用の犯則に就て隣家の主人を告訴したりと云ひ何某は何れの宴會に於て友人の失言を聞き翌日之を密告して國事犯の罪に陥れたりと云ふが如きは當局の本人に於て畢生の怨を結ぶのみならず傍より之を見聞するも悚然に堪へず德義の一方より論ずるときは凡そ人生の賤劣不徳は他人の隱事私行を摘發するより甚しきはなし社會の秩序も之が爲に紊亂する程のものにして最も慎しむ可きことなれば酒類の隱造に關しても其摘發は専ら官の手に任じて人民の密告なからしめんことを勉めざる可らず苟も官とあれば其官員は唯官の職掌に由て吟味するの資格を保持するが故に何様に嚴重なるも又時としては假令ひ秘密の計略を用ひることあるも毫も德義に於て損することなし今日官吏の資格を以て人を罪するも明日は其資格を脱し最前の罪人に向て昨日の不幸を弔するも可なり蓋し前節に吏員を多くして俸給を豊にす可しと云ひしは實際其事の繁多にして等閑に附す可らざるものあればなり隱造摘發の如き之を罪するは唯法律の重き所以を知らしむるが爲のみに非ず酒造同業中に税を通る者あれば之を遁れたる者は必ず酒

の價を低くして速に賣却す可きこと當然の情態にして所謂品物を賣り崩すものなるが故に他の同業者は之と低價を競ふを得ず強ひて競はんとすれば必ず元金をも全うするを得ずして遂に失敗にも至る可し一人の奸は其禍を一地方に及ぼして地方全體の酒屋に不幸を蒙らしむるのみならず政府の收税にも自から影響することなきを得ず故に酒造の検査は法律の保護に非ずして寧ろ經濟上の必要と爲し政府は之が爲に費用を愛しむことある可らず例へば二千萬圓の酒税を收むるが爲に其五分乃至一割を費し一二百萬圓を收税費と爲して正味の收入は一千八九百萬圓と爲るも法律を實施して奸惡を許さざるは政府の體面を全うして兼て良民の幸福と云はざるを得ざるなり

第四

或人の説に酒税を重くすれば酒價を高くす、酒價高ければ酒を飲む者を減す、全國の酒造其石數を減するときは税率に増すも物品に減するが故に收税の額面に就て見るときは殆ど得失なかる可しと云ふ者あれども是れは唯増税發令の其年に無識なる酒屋が世態人情を知らずして狼狽する者あるが爲に一時減石の變相を呈するまでの事にして自然に其舊に復するは甚だ明白なる事實なれば到底増税の爲に酒を飲む者の數を減却す可きに非ず例へば我政府にて酒に税を課するの法は明治八年十月より實施して其時には酒造營業の者は酒類賣捌代價十分の一を醸造税として年々上納可致との布告なりしものが明治十一年九月二十八日第二十八號の布告を以て石數に應じて納税と改まり清酒は一石に付一圓、濁酒は三十錢、白酒味淋は二圓づゝ、焼酎は一圓五十錢、銘酒は三圓の税を課したり次で明治十三年九月二十七日第四十號の布告には酒類を分て三類と爲し第一類醸造酒、第二類蒸溜酒、第三類再製酒として一類は一石に付二圓、二類は三圓、三類は四圓と定められ又次で明治十五年十二月二十七日第六十一號の布告を以て右第一類二圓なる

ものを四圓と爲し第二類の三圓を五圓、第三類の四圓を六圓と爲したり即ち今日の税則なり又一方より全國酒造の石數と其年度に従て増減の情況を見るに統計年鑑に記す所左の表の如し(但し年鑑には明治十二年より十三年までを記しあれども以下二ヶ年は其筋の調査に據るものなり)

年次	清酒	濁酒	燒酎	白酒	味淋	銘酒	合計
明治五年	二、九三三、三七八石	一一三、二一九石	一、八三三石	一、五七五石	二、〇〇七石	一、五七三石	三、一〇一、五三三石
同 六 年	三、二六七、五三九	八二、八六〇	一、四五六	一、五九七	三、四八三	二、二三五	三、四〇一、八〇〇
同 七 年	三、六一一、七四四	六八、九〇六	三、三六三	一、八九四	三、一五八	二、五四一	三、七〇〇、一九六
自同 八年一月	三、二一八、八七六	五四、二一九	三、五〇五	一、八八三	二、六八九	二、二五八	三、三九一、五五六
自同 八年九月	三、〇〇三、九八八		二、八三四	一、二九九	二、六三三	二、一五七	三、〇二一、七一九
自同 九年十月	二、四九一、七九四		二、〇三六	一、二二二	二、六七三	一、六九九	二、五五六、七七四
自同 十年九月	二、八三二、四二六	一、六、七六七	二、七二六	一、一三三	二、三三三	二、四三三	二、九三二、二六六
自同 十一年十月	三、八五一、七八一	三三、八二九	四、八〇八	一、一七六	二、六六八	二、九三七	三、九六五、二一九
自同 十二年九月	五、〇一五、三三七	六五、四四七	八三、七三二	一、四九九	三、八、五八一	三、六二六	五、二〇八、一〇二
自同 十三年十月	四、四九六、四〇八	三四、二〇三	七四、九六八	一、五四九	二、八、三三三	四、五三六	四、六三九、八八四
自同 十四年九月	四、八四六、八三三	三七、八一九	六二、八二〇	一、七九五	三、四、五〇〇	一、五八九	四、九七四、三三三

此表に就て注目すべきは清酒の多くして濁酒以下雑酒の少なきことなり明治五年より同十五年に至るまで十一ヶ年の間毎年清酒と雑酒との比例を算するに十一ヶ年造石の惣額四千八十一萬九千二百二十八石の内清酒三千九百五十二萬八千九百二十三石、雑酒百二十九萬二千五百五石にして雑酒の高は清酒百分の三強に當る即ち清酒百石を醸す者なれば雑酒は僅に三石餘を造るのみ固に計ふ可き數に非ず是即ち我輩が雑酒を顧みずして専ら清酒に注目し濁酒燒酎の如き下流の用料たるものは極めて其税を薄くして廣く民心を傷ふことなきを祈る由縁なり又其石高増減の狀を見るに明治八年までは三百何十萬石の大數なりしものが同年の布告に賣捌代價十分一を上納す可しと定まりてより翌年俄に減じて二百五十萬石と爲りしは課税の影響ならんと雖ども其次年に至れば則ち殆ど舊に復して二百九十萬石と爲りたるは其影響の久しきに持續せざることにて知る可し即ち酒造家が税と聞て一時減石するも實際世間の需要は減少せざるが故に忽ち舊に復するものなり又明治十一年税法を改正して其翌年は造石の高減す可き筈なるに十一年度の三百九十萬石は増して五百二十萬石の數となりたるは此年より政府にて頗る精密の調査を遂げて管理法も稍や整頓したる故ならんと云ふ然るに明治十三年酒を三類に分て税を收るの法を布告してより同年度五百二十萬石のものが翌年頓に減じて四百六十萬石と爲りたるは増税の影響にして次で其翌年即ち十四年度は復た増して四百九十萬石の數と爲りて殆ど舊に近き數に昇りたる其趣は明治八年増税の事情に異ならず左れば明治十五年又増税の布告に逢ふて本年冬の造石高は如何なる可きや前知す可らずと雖ども假令ひ一時は減却するも爾後は次第に舊に復す可きのみ抑も飲酒は人の慾の最も劇しきものにして酒色とさへ文字を對して用る程のものにて酒慾は殆ど色慾に等しと云ふも可なり僅に其物に税を課して僅に價を増せばとて此人慾の劇しきを制す可けんや今の酒價を一倍にするも全國飲酒の量は決して減少すること

ある可らず唯斯の如くしては下流の人民が高價の酒を飲み酒の爲に産を破る者ある可きやも計られず假令其程度に至らざるも俗間の苦情喧しからんことを恐るゝが故に前節にも述べたる如く濁酒と焼酎とを税外に置き家用料の石數を寛にして自由ならしめんと欲するのみ我輩は専ら清酒に依頼するものにして其清酒の造石高は増税の爲めに減少するなきを期するものなり

第五

又或人の説に飲酒は人生天賦の慾にして其價の騰貴を以て之を禁ず可きに非ずと雖ども濁酒焼酎の税を薄くして家用料の酒を無税にするときは國中次第に濁酒焼酎の醸造を増して清酒は次第に減少す可し濁酒焼酎口に適せざるも家用料とあれば毎戸清酒を醸すも妨あるなし今日既に已に自家製のもの多し今後若し次第に酒税の増加するあらば毎戸自から清酒を造て自から之を飲み政府は遂に收税の目的を誤るに至る可しと云ふ者あれども我輩は此説にも感服するを得ず抑も人間社會の物品に貴しと云ひ賤しと云ふは必ずしも其物の實用のみに就て輕重したる意味にあらず實用のみを云へば綿布と絹布と左まで相違あるに非ず眞鍮も銀も金も實用に異同なしと雖ども世上一般綿布を輕んじて絹布を重んずるのみならず實用には最も關係なき其柄柄模様にまで心を惱まして金を費し眞鍮管の烟管は銀よりも賤しと云ひ銀の烟管は金に及ばざること遠しとして之を怪しむ者なし蓋し其然る由縁は何ぞや貴き物は世間皆これを貴び其價高くして之を得るに難きが故なり多く金を出して得難き物を得るは其人の資力を表するの目印にして文語の潤飾を除て俗に之を云へば富有の看板たるに過ぎず或は絹布の衣裳又は金銀の烟管の代りに金圓を弄して人に示すも可なりと雖ども去迎は殺風景なるが故に其形を衣と爲し又烟管と爲して外面を裝ふのみ即ち古今世界の人情なり此人情

果して普通にして人事の實際に違ふことなくば酒を用るの一事に於ても亦同様ならざるを得ず酒の實用を云へば唯飲で酔を取るのみに在る者なれば濁酒にても焼酎にても苦しからず或は家釀の巧なるは市場の沽酒に優るものもある可しと雖ども濁酒焼酎は既に下流の名を成して之を中人以上の用に供す可らず家釀美なるも富豪縉紳の盛會に手造りの酒を進るとは甚だ殺風景にして其味の美惡に拘はらず必ず灘伊丹又は知多郡の製造に限ると云ふことならん加之酒の價の次第に騰貴するに従て次第に其品位を高くし今日四斗樽もて運送して大家の厨下に据へ置き煤拂の祝ひにも鏡を抜て放飲すること水を呑むが如くなるものも漸く其器物の姿を改めて其用法を大切に一杯の酒を振舞ふも馳走の部類に屬するの狀態と爲る可し斯の如く酒の位の上進するに準じて之を用る人の豪氣も亦上進し某家の主人は一席の宴會に幾斗の伊丹を空ふして其價蓋し百圓に近し愉快なる哉近來の盛會などゝ俗世界に評判すれば隣家の主人も亦これを學で幾十幾百の金圓を費し酒を以て豪を争ふこと今日料理の献立を以て宴席の盛否を評するものと一様なるに至る可きも亦人情なり天下の人心若し實用の道理談に凝結して衣服の絹たり綿たり身の寒温に差違なし、烟管の金たり眞鍮たり烟草の風味會て異ならず、家に巨萬の富あるも我れは綿服を服して眞鍮の烟管を携へんと云ふ者果して世間の多數ならば酒を用るの際にも亦經濟論の道理に依頼して盛宴に酒税を免かるゝの工夫もある可しと雖ども文明爭豪の世に斷じて其事なきは我輩の得て保證する所なり我輩常に謂らく日本の酒價は何れまで騰貴して適當ならんと問ふ者あらば之に答ること難しと雖ども結局の處は盛宴と稱する會席の費用を酒と料理と兩様に分ち其價正に等分にして料理の價百圓なれば酒の價も百圓なるを以て至當なる可しと信す然るに今日の宴會を見るに名も酒宴にして實も亦酒を樂み酔ふて愉快と稱して歡を極めながら其酒の費を聞けば唯會費の一小部分たるに過ぎず我輩の宿案に比すれば大

なる差違なりと雖ども數年を出でずして其差違を見ざるの日ある可きこと敢て疑を容れざるなり

又一説に内國にて酒税を重くしたらば外國の地に之を醸造して外來の輸入品と爲し以て税を免かるゝの工夫ある可しとて過慮する者あれども苟も獨立國の人民として斯る卑怯なる言を吐くとは落膽の至ならずや今の一切の輸入品に就ても税の輕重は我國權に屬するものにして到底我手に其權柄を執らざる可らず亦これを執るの時節も遠きに非らざ可しと信する其最中に内外の奸商輩が古來外國に絶無の日本酒を擬造して之を外國品に装ひ以て我内國の税を遁るれんとするが如きあるも黙して之を許す者あらんや即ち商人等も非常の工夫を運らすものなれば我政府も亦非常の法を設けて之を防ぐ可し一片の條約書は天造に非らず臨時の變に應じて臨時に之を左右すること甚だ容易なり此邊に就ては我輩は毫も苦慮する所なきものなり況や酒税は唯其醸造の本に就て收るのみならず一度び税を課したるものも都邑に入るときは又重ねて入市税を取るの工夫もあり又小賣の毎戸に課するの法もあり假令商人輩が僅に關税を遁るゝの一策を案するも之に應ずるには幾多の方略あり恐るゝに足らざるなり

第六

以上開陳したる所に從へば今後我政府歳入の一大部分は全國の酒に任して妨あることなし酒屋商人を媒介に用て國中盛に酒を飲む種族の人より國財を徵收することなれども此徵收に付ても自から制限なる可らず元來國税の名義は何様にも又其課する所の物品は何ものにも苟も人民の手を離れて政府に入るものあるは民に減じて官に増し私用を取て公用に供するものにして其影響を及ぼす所は直接の當局者のみならず間接には全國一般に損益す可きや明なり例へば酒税は酒屋より取るも之を拂ふものは酒を飲む人なり、酒を飲む人が酒を買ふが爲に大に其家の歳出を要す

るときは又其歳入の路を求めて其賣買品の價を高くする歟、多分の俸給を求る歟、又は貸金の利子を上げる歟、何れの路にするも之を他に求ることなれば納税者の誰れ彼れを問はず間接の處より數を計るときは國税は國民の全體より出で、國庫に入るものなれば之を徵收するには其國民の資産に於て果して人々の私用に奉じて尙公用に供するの餘力ある可きやを吟味すること大切なり即ち集税の制限とは民力全般の厚薄に在て存す可きものと知る可し

右の趣意に從て目下我日本國民の資力如何を察するに封建の時代國中三百處に小政府を設立し各藩主以下無數の士族が其領民に取て衣食し又藩の公用に供したるものは實に驚く可きの數ならん今記録の徵す可きものなくして之を明言し難しと雖ども舊時人民の負擔したるものは今日に比して倍よりも重かりしとの事は經濟家の普く許す所なり實物の數は姑く問はざるも藩主藩士等が身分の威光を以て徒に民事を妨げたる其妨害の如きは人民殖産のため實に恐る可きものたりしこと近時少年輩の知らざる所なり明治十四年發兌時事小言第五編に云く

(前略)廢藩置縣以來農家の貢税は大に減じて次で又地租改正の寬典に逢ひ又これに加るに川場宿驛等の課役をも免除せられ御用道中の煩はしき者もなく(中略)又世態の變遷に際して産を失ふたる者も尠なからず士族は常祿を剝がれて産を失ひ、寺院は扶持を廢せられて産を失ひ、宿驛の本陣は大名の通行なきが爲に産を失ひ、川場の入足は橋梁を架せられたるが爲に産を失ひ、大坂の金穴も諸藩の藏元を止められ、江戸淺草の豪商も藏宿の株に離れ、郵便行はれて飛脚屋の業を失ひ、汽船航海して廻船問屋の戸を閉し、人力車は駕籠屋の膽を破り、活字版は版木師の職を奪ひ、廢刀の令は刀屋を苦しめ、散髪の流行は元結屋に影響を及ぼす等大より小に至るまで枚擧に追あらず何れも皆舊來の産業を失ふて方向に迷ふ者なれども日本全國殖産の盛衰如何を標準に定めて此舊業

の廢れたるものを舊に復す可きや否と尋ねたらんには苟も具眼の人にして否と答へざる者はなる可し其否と云ふは何ぞや舊業は悉皆封建の時代に行はれたる業にして文明の眼を以て之を見れば悉皆無益に非らざれば則ち迂濶にして今日進歩の用に適せず其人は坐食の遊民社會の厄介に非らざれば則ち無益迂濶の事に勞力を消費する者にして此業を廢し此人を棄るも殖産の一點に就て毫も損する所あらざればなり、嘗に損する所なきのみならず舊業を剝奪されたる者は自ら亦新業を求めざるを得ず而して其新業は必ず今日適當の業にして假令一業の成るあるも殖産の一部分たらざるはなし舊業を失ふて殖産に損するなく、新業に就けば則ち益するものと云ふべし例へば昔時弓矢を作る者が其業を失ひ今日杖を作て輸出することあらん弓矢の業を廢するも今の日本人に不自由を覺る者なくして杖を輸出すれば其代として目下需要の品を得べし況や生來無爲坐食したる士族の輩にして業に就くが如きは曾て日本の殖産に無用なりし手を動かして有益に用るものなれば一手を役すれば恰も新に日本國に一手を増すに異ならず、理論を俟たず物の實數に由て損益を見ること易し固より新舊交代の際に失業者の困窮も亦少なからず其個々の人に就て見れば誠に憐む可し今後尙更に舊業を失ふ者もあらんと雖ども一國殖産の全面より論ずるときは大に其區域を廣くして假令ひ進むあるも退くなきは明に證す可し又其業を興すに就き或は之を興して失敗する者もあらん或は虚を唱へて一個の私を營み之が爲に衆人の難澁を醸す者もあらんと雖ども此れは是れ人事の一利一弊免かる可らざるの數にして深く恐るゝに足らず結局其全體の成跡を見て得失を評すること緊要なるのみ世論往々此旨を謬り唯漠然たる財政困難の文字を題に表して目下窮迫の士族輩又は都下小民等の難澁するを見聞して其難澁の有様を以て所謂財政の困難を證せんとする者なきに非ず一處の驟雨に逢ふて全國の晴雨を卜する

に異ならず共に語るに足らざる者なり以上記する所のもの果して違ふことなくば方今我日本國民の財政は決して困難ならず殖産の道も次第に其區域を廣くして前途の望に乏しからざるなり

又明治十一年發兌通俗國權論第六章に云く

(前略)論者或は謂らく職業の目を以て見れば昔日の士族は固より遊民なれども今日は又兵隊巡查あり是亦一種の遊民にして其人員も少なからず其費用も甚多くして正に職業に就く可き人民の中より其幾分を引除く者なりとの説あれども論者は唯今日の外面を見て昔日の内情を詳にせざる者なり兵の用は國を護るより外ならず昔日の士族は即ち此護國兵にして其數四十萬今の兵士より多きこと凡十倍なり又今の東京の巡查凡七千名甚だ多きに似たれども昔を思へば毫も驚くに足らず徳川の時代に江戸町々の夜番火の番は姑く之を除き大名旗本屋敷の門番辻番所の番人にて今日の巡查の數よりも多からん三百の大名に平均三箇所の屋敷あれば其數凡九百これに上等旗本の屋敷を加へて大數千に下らず此千屋敷に毎日開閉する門番所の數凡千五百ならん一所の門に交代する番人を平均四名とすれば既に六千の數あり又この屋敷外にある辻番所の數も儘に知り難しと雖ども寄合辻番を差引して假に一千とすれば其番人四千より少なからず合して一萬の數あり今の巡查より多きこと三千なり此外幕府本城諸見附の番士番人下座見なり小者なり仲間なり其數殆ど計へ難し何れも皆警衛の爲にして其職分は巡查に異ならず尙これよりも無益に人を費すことの多くして天下に普通なりしものは貴族縉紳の從者供勢を以て最とす大名の行列は特別のものとして姑く聞き幕府の旗本御家人諸藩士の公務に勤仕する人にて少しく身分ある者なれば出入に從者を召連るゝは無無論親戚朋友の往來にも獨歩することなし而して其從者の職分を尋れば必ずしも重大の物を負擔す

るに非ず所謂若輩草履取なる者にして唯主人の行く處に従ひ其處を去るを待て復た從て家に歸るのみ之を供待と云ふ必竟人の働を用るに非ずして人の形を飾に用るものと云ふも可なり晉に幕臣藩士のみならず富商豪農僧侶神官何れも從者あるの風俗なれば凡當時日本國中に於て主人に隨行し又供待する者の數を計へなば日に幾十萬の人員にして之を兵隊に編成したらば幾百大隊を得べし今の陸軍巡査の如きは論ずるに足らざるなり

廢藩の一舉以て大名の行列を廢し武家屋敷の門番辻番人は巡査と交代し日本國中無用の從者を飾に用る者なし然ば則ち今日の兵隊巡査は之を一處に集めて其外面を見れば衆多なるが如くなれども全國の職業に關して游民たるの憂は畢竟憂るに足らざるの憂のみ國民既に職業を勉るの心を生じて其人員も亦非常に増加したり富國の目的明なりと云ふ可し凡人として私の利を思はざる者なし今後我人民の次第に事に慣るゝに従て次第に其利を永年に平均するを知り次第に私利の大なるものを求るに至らば特に富國の論を喋々せずして富國の實は言はざるの際に成る可きなり

右二部の書中に記す所果して事實ならば方今我國民の資力は決して困窮したるものに非ず今正に殖産進歩の最中なれば次第に其力を増すに従て次第に税を重くするも之に堪ること容易なる可し或は方今商況の不景氣農商共に困難を訴るの有様は世人の洽く聞見する所なれども是れは商賣上一進一退の常にして文明諸國に免かる可らざるの機變なれば深く怪しむに足らず財政當局者の注意を加へ時を誤らずして方略を運らすときは假令ひ其禍を未然に防ぐを得ざるも之を既に救ふの術はある可し結局一時の不景氣の如きは本論に關係なきものと視て可なり

第七

我輩が過般以來國財論の表題を掲げて既に幾編を重ね國財徵收の要用を示して其方法を講究し差向の處は酒税に依頼するを以て至便の策なりと論定したり既に國財の出處を定めて路を得るときは其著手の緩急は固より當局者の任する所にして我輩の關す可きに非ずと雖ども或は國財の要用は目下に迫りて收税の期は之を急にす可らざるの事情もあらんかと掛念なきに非ざれば若しも然るときは一時の方便として内外に國債を募るの議を賛成す可し國債とて只管其名を聞て恐るゝにも及はず償却の目的ある國債なれば決して國害を爲す可きものに非ざるなり例へば爰に今の歳出入を以て常用に差支なきものとして新に二千萬圓丈の歳入を増すの目的あるときは新に一億五千乃至二億圓の國債を起すも償却に苦しむの理ある可らず唯この上の掛念は理財者の智愚如何に在るのみなれども是亦際限もなき掛念と云ふ可きものなり如何となれば今理財者の人物を評して此人は愚にして掛念なり其人は奸にして恐る可し云々とて之に財權を附與するを拒み徒に日月を消する其間に文明の事は日本國の頭上を通過して世界落後の田舎國たる可ければなり

人或は國債の増加するを恐れ殊に其外債の如きは最も禁句にして甚しきは外債と賣國と文字の意味殆ど相通用するが如き有様なれども唯是れ物の數を計へずして其名のみを聞き、心に思慮せずして耳に驚く者と云ふ可きのみ例へば世の論者が國債を恐るゝ辭柄に埃及の衰勢を説き我日本國をして埃及の覆轍を踏ましむ可らずとて一筋に心配するが如きは例を引くに酷なるものと云はざるを得ず日本の國力如何に小弱なるも人民の智愚、殖産の盛否を比較して我れは埃及に等しと云ふは難きことならん或は一種の奇人が漫に自國を輕蔑するを以て樂みとするも之を輕蔑す可き實證なきに苦しむことならん單に數を以て云はん歟、埃及の人口は一千六七百萬もあらんと云ふものあれども是れは阿非

利加の内部野蠻の地方までを算したる數にして本部埃及人と稱す可きものは此數の三分一に足らず即ち千八百七十八年の統計に據れば本部の人口は五百五十一萬七千餘なりと云ふ此五百五十萬の國民にて負擔する所の内外國債の高を總計すれば五億七千萬圓よりも多くして國民一名の負擔は百圓よりも重し、之に引換へ我日本にては華士族へ世祿の代りに與へたる公債證書をも強ひて國債の數に算入し流通の紙幣をも國債と視做し内外の負債を合して三億三千六百萬圓に上らず即ち人口に分頭すれば十圓以下なり兩國財政の苦樂固より比較す可きの數に非ざるを見る可し然りと雖ども我輩は埃及に比して我國債の少なればとて敢て之を樂しむ者に非ず寧ろ多少の負債を増すも國勢の隆盛ならんことを願ふ所なれば國財の議論に就ては我輩は埃及を鑑みることなくして伊太里を學ばんと欲する者なり苟も自國を輕蔑するを樂しむが如き奇人に非ざるより以上は必ず我輩と所見を同ふすることならんと信するなり

又彼の理財者の人物を想像臆測したらば愚と思はるゝ者もあらん奸と見ゆる者もあらんと雖ども假に之を愚なりとするも其愚者が百年の壽命を保つ可きにも非ず新陳交代の際には智者の出ることもあらん或は愚ならずして奸ならん歟其奸物が幾百萬圓の金を私す可きにも非ず良しや極端を妄想して百萬圓を私するものとせん、百萬圓金の得失は以て日本國を輕重するに足らず奸智にても惡才にても愚俗の評するに任じ唯其人能く國の大計に眼を著して永遠の謀を爲し之を二世に遺すことあれば我輩は甘んじて此人に百萬圓を奉ぜんと欲するものなり況や前言は唯我輩が假に設けたる言にして其實は世界萬國を概して我日本の士人は最も金錢に潔白なる者と云はざるを得ず畢竟封建武士の子孫にして或は之を評して利を知らざる者と云ふも可なり試に西洋文明國の政治家等をして我士人の内實を知らしめたらば之を自身に比して其清潔を賞嘆するのみならず或は却て其愚直小膽を慙笑す可き程のものなれば先づ以て百萬圓

を失ふの憂もある可らざるなり結局我輩の所見は財政の權が誰れの手に在るも又政府の體裁が何様に變化するも唯其權力を強大にして之を政府に附與せんことを祈るものなり政府の當局者は一時逆旅の人にして國の財政は百年の大計なり百年の大計は財政を大にするに在り故に何人にも此に著眼する者なれば他の小事細目は之を問ふを屑とせざるなり(明治十六年六月二十日より七月二日に互る)

國財餘論

第一

方今我日本の民力に於て國財を集るは難事に非ず既に之を集るの路を得て一時これを急にするの不都合もあらば内外の國債を起して急要に應ず可しとの旨は前月以來數日の社説に掲げたる國財論を見て讀者も大概を了解せられたることならん依て今爰には國財餘論と題して前論に續き其集めたる財を利用するの要所を論ぜんとす元來我輩が國財論を草したるは専ら兵備擴張の爲に要用なる其財を集るの趣旨なれども國財を用る所は唯兵備の一點のみに限る可きに非ず苟も國の安寧を助けて國民の開進に益するの事項なれば國財は愛しむに足らざるなり最前の國財論を記す其前にも民心調和の大切なるを述べたり抑も國安保護の第一要は民心の調和に在るや明なり調和即ち國安とも云ふ可きなれば若しも國財を利用して間接にも民心を和するの方便と爲らば顧慮する所なく之を用るこそ智者の策と云ふ可きなり方今民心不調和の様子を見るに國內の有志者なるものが各政治上に就て思ふ所を吐露し之を論じ之を駁する其間には言行共に過激に及び或は政府に抗する者あり或は論者相互に攻撃する者あり又或は政府の意を迎へて民間の論者を

排せんとする者あれば民間にては早く之を揣知して故さらに之に激する者あり其趣は千種萬様なれども結局國の爲に國事を憂て政治を改良せんと云ふものより外ならず所謂政談なるものは是れにして之を談する者を政談家と稱す然るに其政談家を平均して其家産の貧富と職業の有無とを視察するに家富み産豊にして恒の職業に忙はしき者は甚だ多からざるが如し恒の職業もなく家も亦富まずして政談に奔走するは恰も政談を以て職業と爲す者の如しと雖ども世に政談と名る營業渡世の路ある可きに非ざれば或は新聞紙に従事し或は演說會を企て其所得を以て政談奔走の資に供せんとするも新聞紙なるものは從來官私何れかの保護に依頼する歟又は富て文思ある者が自から金を捐て、始めて成立するものなれば單に新聞發兌を以て金を得んとするは固より望む可き所に非ず加之近來に至て條例も次第に嚴なるに従て新聞の營業は決して金を得るの路に非ず又彼の演說の如き假令ひ些少の聽聞錢を收るも僅に當日の會費を辨す可きのみにして新聞演說は以て政談奔走の資に足らざるや明なり然り而して尙も此政談に奔走して止まざるは何ぞや壯年輩が世に名を知らるゝの捷徑は政談の右に出る者あらざればなり例へば爰に沈思深識の學者が幽窓の下に精神を凝らし或は書を著述し或は物理を發明するも世間に之を顧る者なく政府に於ても殆ど知らざるものゝ如し之に反して僅に幾冊の譯書を読み數編の新聞紙を見て演說壇上に上り滔々辯論すれば聽衆の喝采を得るのみならず或は其議論過激に及で官の間ふ所にもなれば益評判を高くして名を賣る爲には却て妙なるが如し元來名を知らるゝとは事柄の良否に論なく唯其人の所在を知られて之が爲に世に運動する所のものあれば則ち目的を達したるものなれば或は政府より何某の舉動を訝しとて之に探偵者を附して其探偵費を費せば其費は即ち何某の爲に費したるものにして云はゞ當人の價は其費用丈けの位あるものゝ如し之を彼の沈黙學者が終身世に知られずして聲もなく臭もなく其死生すら尙且人に忘れ

らるゝ者に比すれば固に同年の論に非ず殊に壯年血氣の氣象に堪へざる所なれば苟も天下の男兒にして政談に走らざる者ある可らず或は然らざる者は因循無氣力と評せらるゝも答るに辭なきものゝ如し即ち是れ今日の時勢にして世論の喋々囂々たる由縁なり政談家中或は眞に國事を憂て眞に政治の改良を祈る者もある可しと雖ども滔々たる壯年世界第一著の目的は唯名を知らるゝに在るのみ喋々囂々即ち目的を達したるものなれば其事も甚だ易く之を學ぶ者も亦甚だ多くして今日の此の有様に放却したらば其數は日に増加して殆ど底止する所を知る可らざるなり

或は老練著實と稱する人物が壯年輩に説き政談は壯年の事に非ず政談よりも實地の學問然る可しと論すも其人物は現に政事に志して之に關する人なれば説論の功能甚だ薄し如何となれば壯年輩は素と政壇を以て無上の地位と思ふ處に其壇上の人が政事よりも學問に志させと命ずるは夫子自から好で他人には嫌へと云ふに異ならず父老自から酒を飲み茶を喫して子弟に説論するには酒茶は壯年に毒なり水を飲み滋養物を喰ふ可しと云ふに異ならず其説論する所果して事物の理に適するも之に服せしむるは甚だ難し故に酒茶を子弟に禁ぜんとならば子弟社會自然に酒茶を思はざるの氣風を起し全く酒茶を近づげざる人の議論を行はしめ或は酒茶の代りとして他に子弟の好物を授け自然に其好物に慣れて酒茶の味を不知識の際に忘れしむるの方便を求ること緊要なる可し人に好物を與ふるは自から好物を用るの區域を廣くするの術なり今の政治社會に於て正面より直に壯年輩を逐はずして別に好地位を作り自から其歸する所に歸せしめなば政府に於ては政を爲すに綽々として餘地あるを覺ふ可きなり此れを是れ勉めずして官民正しく相對し屹然動かざるが如きは強は則ち強なるに似たれども其屹然たるや頗る力を要することにして後日に至り其力の成蹟如何を計算したらば一步も進まずして唯よく屹然たり、文明の開進繁多なる世の中に幾歲月を空うしたりとの共計を得べ

きのみ

第二

今の政治社會に於て正面より直に人を逐はずして別に好地位を作り自から其歸する所に歸せしめ以て政府爲政の餘地を裕にするの得策たるは前節に之を開陳したり畢竟彼の有志者なる者は多少の才力を抱て無事に苦しむの人物にして恰も自身の才を以て自身を窘むるの地に陥りたる姿なれば唯これに授るに事を以てすれば其事は必ずしも政治に關せざるも以て其心を和するに足る可し譬へば力士の筋骨逞しき者を一室に閉居せしめて運動を自由ならしめざる時は筋力勃々として自から禁ずる能はず唯願ふ所は其力を用るに在るのみ此時に當ては力士の本色に従て角力の戯を爲さしむるに及ばず唯場所廣き處に出して重き物を授け獨り力量の働を逞ふせしむるも以て満足す可きが如し力士は自から自身の力量に窘めらるゝものなれば其力を洩らす所さへあれば身體の平均を爲す可し今の政治社會の有志者は精神の閑却に苦しむものなれば必ずしも之に政事を授るのみに限らず政事にも又武事にも唯其才力を用るの地位を得せしむれば以て満足す可きのみ人の心の働と身の働とは常に同一様の定則に従ふものなればなり左れば此有志者に授るに事を以てすると決して其方法を如何す可きやと尋れば之に答ること甚だ易し政府が一度び大膽政略と決するからには民間に人物あれば其人の履歷に拘はらず、其出身の何れよりするを聞かず、其朋友の何人たるを問はず、其黨派の何れに屬するを咎めず苟も政治の事務に適す可き者は之を政府の官吏と爲す可し或は官途の區域にも限りありて多く人を容る可らざる歟若しも然るときは我輩の宿説に従て大に文事を獎勵し學術の領分中に容るゝこと甚だ易し此一段に至れば我輩は學問の種類を問はず西洋文明の學術は無論我輩の平生より好まざる皇學にても又漢學

にても其部類の人の力のあらん限りは勉強せしめて可なり或は學者を保護して文明の學術に畢生を委ねしめ以て我日本の學問を世界中に對して獨立せしむること甚だ緊要なり或は皇學漢學流をして和漢の故事を詮索せしめて文明の材料に用るも亦甚だ緊要なり、或は日本の大辭書を編輯するも甚だ要用にして幾十百の學者を幾十年間も役せざる可らず、或は西洋の往古より今日に至るまで法律政治の沿革を調べて一大著書を編纂するも頗る大事業なり、此種の事を計れば枚擧に遑あらず何れも皆獨立國に缺く可らざる事項にして人物を要し又隨て資本を要することなれども其資本は愛しむに足らざるのみならず其資本とて國の大計より見れば驚く可き巨額に非ず如何となれば此考案に従て大に國財を費して大に人物を用るとするも其人員は全國中に幾千萬もある可らず假に今の政府の官員を一倍するの覺悟を以て在野有爲の人物を用ひたらば如何、今の政府にて官員に與る月給は一年四百萬圓の内外なる可し之に一倍して他に四百萬圓を費すも何事かある可きや毫も恐るゝに足らざるの數なり又右の如く多く官途に人を容れ廣く學問を保護するに兼て同時に國中に事業を起し鐵道の敷設海陸の測量探索等國民一個の資力に及ばざる事業は直に政府の手に引受けて之を決行し或は事の稍や輕少にして今の文明に必要なもの例へば造船航海の如き、諸製造又は開墾の如きは人民の私に任じ一般の法を設けて之を保護するも可なり之を要するに日本國中政治の外にも文明の事に急なるもの甚だ多き時節なれば苟も才力ある人物は之を使用して倦ましむることなきを旨とするのみ人心倦まずして調和するとき政治の一方に思を凝らすこともなし政府の當局者は恰も此際に乗じて政事を行ふの餘地を得ること易し蓋し爲政治家の方略は此邊に在て存するものと知る可し在昔清朝の康熙帝が大に中國の文學を獎勵して多く學士を聘し編輯の書も甚だ多くして彼の康熙字典の如き支那開闢以來の大辭書を作らしめたるが如き又第一世「ナポレオン」帝が諸國の法

學士を集めて佛蘭西の法律書を編纂せしめたるが如きも當時支那に辭書の入用もありしことならん佛蘭西にては舊法律の缺典もありしが故ならんと雖ども又一方には其學士輩を無事に宥めては政略上に煩の筋もあらんことを慮りて其謀を爲したることと信ず即ち此二帝の如きは國財を費して百世の國益を起し兼て一時爲政の餘地を買ふたるものにして其財は實用を爲して人心は之が爲に靜なり英雄の政略妙なりと云ふ可し中國の議論喧しと雖ども康熙帝は愛親覺羅氏の政權を維持せんが爲にとて官權の著書新聞紙を保護して中國論に抵抗したるを聞かず佛蘭西共和黨の物論、騷然たるも「ナポレオン」帝は些少の錢を周旋して帝政黨を組織せしめ窃に其新聞演説を悦びたるの事跡を見ず蓋し二帝大膽の政略は其潤きこと海の如く其剛きこと鐵の如く風聲鶴唳を聞くに忙はしくして爲政の日月を空うするが如きは爲ざる所なり（明治十六年七月三日及び四日）

産業貿易

日本亦富國たるを得べし

第一

人間百般の事業悉皆富に依頼せざるものなし國富まされば兵備強大ならず學藝興らず人間の腕力腦力と雖ども富の羈轡を免かるゝこと能はざるなり俚俗に所謂金の世の中なる諺は實に人道の大本なりと稱すべし歐米諸國の富實なる隨て其文明の高等なる常に我輩をして羨望に堪えざらしむる所にして之に反し日本の貧困にして文明の十分ならざる

は常に又我輩をして悲憤に堪えざらしむる所なり容膝の茅屋纒かに雨露を凌ぎ蔬食を飯し水を飲み脰を曲げて之を枕とするを以て古來我日本多數の本色と爲し間ま或は富豪大家と稱せらるゝ者なきにあらずと雖ども多くは皆十萬五十萬或は百萬圓以下の小財産にして其數而かも甚だ多からず偶ま一年千圓内外の歳入を有する家あれば傲然上等社會の資格を以て自から許し人も亦之を羨むを以て常とせり之を歐米の文明社會に求むれば商家の一小筆生の年給に及ばざること甚だ遠し筆生にして富豪の上等紳士たり實に兒戯に等しき社會なりと云はざるを得ず百萬の財決して大なるものと云ふ可らず而して此小財産たりとも一人の獨力を以て生涯に興し得るものなれば或は吾人をして感歎せしむるに足るものあらんと雖ども如何せん祖先傳來幾世の遺産を合し而かも尙百萬圓の身代を有する者絶て無くして稀に有るが如きは吾人をして唯國の貧困を歎ぜしむるの外なかるべし百萬圓の身代にして既に斯の如し今更に一階を進め千萬圓の財産を有する者を索るに日本八十餘州一人の之に應ずる者あることなし況や此財産を一人の生涯中に得たる者を索るに於てをや到底日本人の運命は千萬圓の上に出づ可らざる約束なりと云て不可なからんか幸にして此約束に従はざりしは三菱會社の岩崎彌太郎氏なり氏の財産は果して幾許なるか固より我輩の知る所にあらずと雖ども蓋し既に全國中の群を抜きたるや疑なかるべし殊に氏は祖先累代の遺産を得て其富を成したるにあらず全く一人の力を以て此大財産の主人たるに至りたるものなれば窮鬼社會とも評せらるべき日本人のために其冤を雪ぐの度も更に一層の深きを覺るが如し然れども岩崎氏の例外は論ずるに足らず滔々たる日本の貧困社會桃源の小洞中に閉居して自から清貧を樂み年來れども未だ新たなる覺えずとて揚々自得の其際に世界の文明は我を待たず八方に富強の社會を捏造し來り我輩の眠方さに覺むるときは何時か漢魏を飛過して早く既に晉の天地に在るなり

歐米諸國の富實を例せんに英國の如き上等社會と稱するは「一萬以上」と唱へ一年の歳入一萬磅即ち銀貨五萬圓以上を有する富豪に限ることにして其數決して少なからず恐らくは全國中萬を以て計るの人員なるべし英人「ハービー」氏著紙幣論中に有益なる一表あり千八百六十三年（文久三亥年）より千八百七十六年（明治九年）迄十四年間に英國にて死亡して銀貨百二十五萬圓以上の財産を遺したる人名并に其金額を記したるものなるが此十四年間の人員百二十八名遺産の總額銀貨四億零一百二十萬圓之を其人員に配分するに一人の遺産額平均三百十三萬餘圓にして十四年間に百二十八名の死亡なれば一年に十名内外の平均なり如何に富實の英國なればとて其人口は遙かに日本の下に在りながら三百萬圓以上の財産を有する者が毎年十人づゝ死去するとは法外千萬なる事實にして我日本人の如き貧困社會の耳には虚構の談とより外は聞えざるなり去て米國の社會を見るに其富又實に英國を凌駕するの感あり時事新報の讀者は記憶せらるゝならん在紐育府醫學博士シーモンズ氏が過日福澤論吉君に寄せたる書中に米國人の富裕なる實に驚くに堪えたり今を距る十五年前までは十萬弗の身代を有する者は珍らしき富豪にあらざりしに今日は百萬弗の身代を視ること尙ほ十五年前に十萬弗の身代を視たるに異ならず百萬以上千萬内外の身代を計れば全國を通じて無慮一千以上たるべし現に當紐育府には一億五千萬弗の財産を有する者あり（ヴハンダーヴィルト氏歟）云々と記せり我日本政府の歳入は六千萬圓なり之を得んとするには資本元金六七億を要すべし前記紐育府の金滿豪三五名の財産を集合せんに其利金を以て永代日本政府の費用を供給して餘あるべし實に奇妙極まる世の中と云ふべし此莫大なる富あり故に海陸の兵備を盛大にして世界に跋扈することも自由なり鐵道を敷き船舶を造り往來自在更に又其富を増殖することも自由なり農工商業兵馬學藝の事に論なく人事一として意の如くならざるはなし實に文明國の名に負かざるものと云ふべき所なり

なり歐米諸國に比して我日本の貧窶なるは明白の事實なりと雖ども此事實は何等の原因ありて然るものなるや到底日本人の運命は歐米人の富を享有するに堪えざるものなるや否は我輩更に之を次號に論すべし

第二

我輩が前章に縷述する如く歐米諸文明國に比して我日本の貧窶なるは明々白々の事實たり然るに歐米人民は何故に斯の如く富裕なることを得て日本人民は何故に富裕なることを得ざるかに就ては我輩が大に讀者諸君の考察を煩はす所なり

西洋人の説に人間の文明は不自由艱難の中に生長す地球の熱帯并に溫帶地方の如き天與の恩惠優渥なる土地に住する者は衣食住の容易なるがために恩に狎れて勞作を怠り小康に安じて勉強心を失ふの餘、知らず識らず懶惰優柔の人物と爲り以て其生涯を終るを常とす然るに寒國風雪の中に生存する人は之に反し天與の恩賜厚からざるがために終年衣食住に辛勞して寸時も油斷することなし即ち天候の嚴肅なると地球の瘠薄なるとに刺激せられて奮然勞作に服して辭することを知らず其結果は耐忍不撓の精神を養成し加るに智力の穎敏なるを馴致して遂に世界文明の源泉たるに至るを得と云へることあり然れども我輩は未だ此説を信ぜず蓋し西洋人は當代の文明開化なるもの偶其源を自家居住の寒國瘠土に發したるを見て卒然其説を爲し寒國瘠土は文明開化の母なりと速了したるや疑ひなしと雖ども果して此説をして萬國普通の定則なりとせば人事の成敗は障礙の多少に關す障礙は多々益人事に便なりと云はざるを得ざるべし世間豈に斯の如き道理あらんや故に我輩は信ず天候地味の好良なる我日本の如きは其兩ながら惡劣なる歐米諸國に比して國の富實文明を成すに甚だ容易なるは無論のことなりと然るに今退て日本の富實文明を見るに歐米諸國に及ばざ

ること遠きは何ぞや國の富實文明は單に天候地味にのみ依頼す可らざるが故なるべし國の富實は天候地味にのみ依頼す可らず何となれば此天候地味の中に生息する人類の良否に由て之を利用するの度一様ならざればなり然るに今我日本人種と歐米人種とを比較するに兩者の間其優劣未だ俄かに判す可らず歐米人の説に従へば自家歐米人種を以て世界第一等のもつと爲し我輩日本人種を目して之に一等を讓るものなりと云ふと雖ども是固より一人種が妄想の私言にして天下の公論にあらざるを以て爲めに我日本人種の品位を輕重するに足らざるや甚だ明白なり我輩が内外書籍上の智識と耳聞目撃の實驗とを以て之を判定するに才智或は道德に關する精神の働きに於て彼我人民を比較し日本人の伶俐なる品行の方正なる間ま或は歐米人を凌駕することあるも毫も嘗て其下に出ることなし故に我輩は斷言す日本人種と歐米人種との間に決して彼此優劣あることなし或は之あるべしと疑ふ者は自分勝手論ならざれば自暴自棄耻を知らざる者の妄説のみと然るに今日本の富實文明を以て歐米諸國に比較するに當に一二等の優劣のみならざるは何ぞや思ふに天候地味を利用して衣食を豊かにするの巧拙は一概に人種の良否のみを以て判すべきにあらざるなり

我日本の天候地味と云ひ又此間に生息する人種の才智と云ひ單に此兩者に就て之を判すれば其富實文明は之を歐米諸國に比して優る所あるも劣る所なくして然るべき數理なるに其實際に於て然らざるは何ぞや蓋し富を得るは天候地味の良否と人種の智愚とに關すること稀にして多くは其人の働を左右する外物の刺激の多寡に在て存するが故なるべし語を更へて之を言へば貿易交通の大小に由て國民の富を増減すべきが如く然り我日本人の如き古來豆大の數小嶋嶼中に閉居して世界の廣きを知らず其商業の如きも尋常は一州一道の中に限り東西兩極端の物産を交易するをも至難として顧みる者なかりき之を彼の歐米人民が千萬里の波濤を凌で世界の人民と貿易し市場の廣きがために同一の勞力

にして其利を收むること多く爲めに工業の發明を促し爲めに運漕の便利を加へ國內各般大小の農工商業をして全世界の市場に向て其利を求めしむるものと比較して實に霄壤の相違なりと云はざるを得ず斯の如く歐米人が貿易の廣大なるがために其富實の世界に比類なきは著明の事實にして解説を要せず之に次で我隣國の支那人の如き自國限りの市場にても其廣大なること日本の二三十倍に下らず隨て其社會の富實なるは日本人の企て及ぶ所にあらざること既に天下の定論たるが如し故に今我日本人をして大に富實文明に進ましめ支那人は勿論歐米人民と比肩して毫も愧る所なからしめんとするには其貿易を廣大にして富を全世界の市場に求めしむるの外に工夫なかるべし而して之を爲すの法は決して一二に限る可らず農工商業共に大に改良進歩の事なかる可らずと雖ども目下の最捷徑は物産の改良を圖るに在り例へば桑田と稻田と其利孰れが最も大なるやと問はん日本全國何れの地方として其利の大なること桑田に如くものなし唯日本人は米を常食となして之を要すること多量なると目下鐵道汽船の便甚だ不十分なるとに由て全國内をして有無交易の利を享有せしむること能はず故に止むを得ず各地方に稻田を存するの要用を見るなり然れども若し全國に蛛網の鐵道を設け汽船の往來亦織るが如くならんには日本全國人民の食料は直ちに之を印度地方の米穀に仰ぎ全國の稻田を變じて桑田と爲し日本全國を一個の大製絹場たる仕組に改めんこと難きにあらざるなり故に我輩は斷じて之を云ふ我日本の富實文明をして歐米諸國と比肩せしむること甚だ易し唯其貿易を廣大にするのみと(明治十六年三月二日及び七日)

農業を論ず

第一

富國の一端は農業の改良進歩を圖るに在りて決して忽諸に付す可らず唯此一事を以て富強の目的を達すること能はざるのみ思ふに我國の農事は多年の經驗を積み工夫を凝し之れに従事したるを以て他の事業に比すれば頗る進歩したるに相違なかる可し加るに土壤頗る肥沃なるを以て其收穫も一反歩に付て之を算すれば敢て少量と謂ふ可らずされば我國の農事は世界萬國に推出して恥る所なく其產物は世界の市場を動かすに足るべきものありやと云へば我輩は殘念ながら大に然らずと答へざるを得ざるなり又何故に大に然らざるかと云へば其短所の尤著しきもの二あり第一農學の原理明かならざるなり第二耕地未だ開ざる是れなり

(第一) 我國の農夫は元來無學無識にして農學の理論の如きは嘗て其思想に浮びたることなく偶實地の經驗に依り得る所あるも僅に一部一物に止り之を推究して一定の法となし以て子孫に傳へ以て他方に移すことあらざりし是れ畢竟學問上の原則を知らざるに坐するのみ故を以て農夫は常に固陋の舊慣に泥み改良進歩廣く利益を求むること知らず數十年を経るも依然として同一の地位に止り徒勞元費亦甚だ大なりとす之を譬へば盲者の杖に由て遅々歩行するもの、如く其熟路に就ては左まで差支なき様なれども更に遠方の土地に赴くか又は新に捷徑を開きたる時の如きは茫乎として其方角を辨知すること能はず蹉跎迷津尙舊時の熟路を迂回す安ぞ能く明目の人と並進競馳するを得可けんや試に見よ我國の農夫は菜麥の一莖一葉何の理に由て生成豐熟する乎を知らず漠然陰陽五行の説に従ひ天の命する所とな

し、人糞の好肥料たる由縁の理を究め又之を保存するの道を盡すことをなさず肥料は只肥しとなるが故に肥料なりとし、蟲類の生ずる由縁の原を探り之れが豫防の法を設くることをなさずして偶然に湧出したるもの、如く思惟し運を天に任せて人力の及ばざること、なし注連を張り神符を立て、安心したるものなきにあらず、種實の良否を検定し器械の便否を較量し迂を捨て便に就き粗を措て精を撰むの心ある者亦甚稀なり其他無學無識の弊枚舉に暇あらず爲めに收むべきの利益を收めずして巨多の損失を被むるもの勝て數ふ可らざるなり其間學者社會に農學の理を談するものあれども全く實業家とは其縁なきものにして農學者は農學者にして實業家は實業家なり此の如く理論實際互に密接すること能はざること我國産業の振はざる由縁ならん

西洋諸國に於ても往時理論實際相合はざることありしも五十年前農學を以て一科の學術となせしより學者は愈其蘊奥を極めんとし實業家は之を實驗に徴し二者相照合して改良進歩頗る著明にして迅速なりと云ふ加之ならず各般の學科も追々に開けて植物學なり化學なり物理、生理、器械、氣象等の學科ありて大に之を補翼し苟くも實利を收め勞費を省くのことあれば之を世上に廣告し之を實地に採用し一般農夫も農學の大意を伺ひ知り假令ひ之を知らざるも知らんと欲するの念あるに至る或人の説に西洋諸國百年以前の農事を以て當年の日本農事に比較したらんには我恐くは彼れの上にあること一二等なりしならん而して日本の農事は爾來少しも改良進歩することなく今日西洋と相對する時は我却て彼れに劣ること五六等ならん夫の米國に於て現今専ら使用する所の犁は本と模形を日本に取り十有二三回の變形を爲し遂に今日の便利に迄達したるなり而して日本にては未だ一回も其形を改めたることなしと(其事實の如何は確知せざれども左もあるべきことにして其他類推すべきのみ)由是之を觀れば我國の農業一も進歩せず產出多きを加

へざるは決して偶然にあらず豈に我國多年の實驗のみを恃んで自ら足れりとするを得可けんや

以上の弊習を矯め改良の途に就かしめんとするには實業家に學理を勸むると學者に實業を執らしむるの二法あるに過ぎずと雖ども今俄かに西洋高尙の學理を以て我國の農夫に勸告するも恰も顰に對して音曲を奏すると一般一も耳竅に達することなく其效用とてもあざざるなり又學者をして一朝實業に就かしめんとするも其勞に耐ふること甚だ覺束なく且其經驗を積む亦數年を假さざる可らず依て先其衷を折し速成の功を見んとするには學者をして古來實地施行の順序を熟知せしめ之を學理に照して原則を發見し農夫に談話するを以て捷徑とせざる可らず前に云へる如く我國の農夫は實歴經驗には素より淺からずして獨り學理に暗きを以て若し其暗所より迷夢を開かんとするは甚だ難事にして到底速かに行ふ可らず依て其既に開けたる實驗の事實に就き誘導するを以て得策とす乃ち其知る所より知らざる所に及ぼすの謂なり然れども學者にして實地施行の順序を熟知せざる時は之を學理に導くも亦迂遠たるを免れず例へば肥料の效用及び保存の如き耕作輪轉法の利益の如き其要用は農夫の既に實驗する所なり夫の尿を汲む者常に井水を桶底に容るゝは尿中の「アンモニア」を吸収せしめ之れが蒸發を防ぐが爲めなり（若し同一形の水なればとて下水又は溝瀆の水の如き既に「アンモニア」を包含するものを容るれば香に蒸發を防ぐの效なきのみならず却て發散を促すの理を知らず）又同一の地面に同一の植物を年々栽培せざるは土中の養料を吸盡すの患あればなり（假令同一の植物にあらずと雖ども同科同性の植物なれば均しく其患あるを知らず）若し夫れ蟲害の如きは其卵生なるを知らず只稻莖にあるものを隨蟲と稱して一物とし其蛾となりて飛揚するを以て他の一物となすと雖ども蠶兒を養ふものは必ず知らん卵より蟲を生じ蟲老ひて蛹となり蛾となり又卵を遺して死することを故に他の植物を害する蟲類も一物にして形を變

じ時に隨て驅除の方を施すの必要なるを悟り又其卵を遺すの餘地を留めずして豫防の途を求むるの得策なるを談すれば大に悟る所あらん其他物に觸れて類推し漸次其理を究め其奥に達すれば其進歩期して待つべきなり我輩故に謂ふ農業の進歩を圖るは學理と實驗とをして密著せしむるにあり而して之を行ふには先づ實驗に就て學理に導くを以て得策なりとす

第二

（第二）我國古來瑞穂の國と稱し佳穀の産少きに非ざるも要するに只國內人民を養ふに足れるものと謂ふべきのみ蓋瑞穂國と稱し獨自ら誇りたるは晏然一海島に孤立して全く世界萬國の交通を絶ち海外無數の瑞穂國あるを知らざりし時代なり、彼の印度に米を産し米國に麥を出し其産出を以て世界の市場を動かすに足るとの實を發見したるは實に近年の發明にして印度にて内國に餘る所の米を毎年外國に輸出する其高は千八百七十四年に二十二億八千萬斤（凡七百萬石）此代價二千七百萬餘圓又米國より英吉利一國のみに輸出する各種穀物の數量は八十四億六千萬斤此代價一億八千萬圓なりとす巨額なりと云ふ可し

退て我邦産出の米穀如何を見れば一年三千萬石に過ぎず（政府の手に成りたる農産統計表に由れば二千三四百萬乃至九百萬石とあれども隱蔽實額を告げざるの弊あれば三千萬石と概定するも大過なかるべし）此内より酒類製造及其他の用に供する麴并餅團子菓子糊等に消費するもの凡五百萬石を引去れば殘額二千五百萬石なり此二千五百萬石を人口三千五百萬に割付ければ一日の食料一合九勺餘に當る一合九勺の米は固より一人一日の食料に充つ可らざる勿論なれば日本全國過半の人民は他の食物に依頼せざる可らざるや明なり乃ち麥粟蕎麥芋其他草根果實に賴て生活する者と

謂ふ可し我邦米穀産出の微々たる知る可きのみ之を近年の事實に徴するに今を距る十三年前即ち明治三年全國凶歳と謂ふにはあらざれども稻作損害を受けたる處ありて米價頗る騰貴し現に食料にも不足を生じたと見へ同年中輸入米の數量は五億三千七百七十一萬〇七百五十六斤にして其代價は一千四百五十九萬八千百十四圓餘とす其前年又は翌年に於ても五百六十餘萬圓の輸入ありし而して我國より外國に輸出せし數量は同六年より同十五年迄十箇年間千萬圓に足らず此の如く十年間に一年間の負債半額ども償ふこと能はざる有様にして米穀産出饒多と稱するを得ざるは勿論若しも十年乃至十五年間に一度大凶小凶の年あるときは始終食料の負債さへ償ふこと能はずして常に海外の輸入を仰がざるを得ざるなり之を稱して瑞穂國と謂ふを得べきや寧ろ虚名に屬するものならん是れ一は農事の開けずして耕地少なきに坐するのみ我國の土地は溪瀨山嶺に至る迄苟くも水利の通すべく鋤鋤の立つべき處は開墾播種せざるなしと云ふと雖ども其水利とて今日開明の眼を以て之を視れば固より十分のものに非ず現に東北諸國に至れば沃野千里の地を空ふするもの甚だ多し方今全國既墾熟田の總計は四百八十一萬八千町に足らず即ち全國中耕地未耕地を比較すれば耕地は三分の一に及ばざる位なり此僅々の地面にして如何なる天惠地福を専有するも其産出知るに足る可きのみ然らば即ち今後この小狭の耕地に農業の巧を致すも西洋諸國と比肩するに至るを得ざるや明なり即ち知る我國に於て農を以て本となすの彌恃むに足らざることを試に國內必需の品にして尤重要な綿砂糖に就て之を論ぜんに綿(繰綿)は一年の産額三千萬斤に足らず砂糖亦三千萬斤に垂んとす而して近年外國より輸入する綿は三千三百萬餘斤にして砂糖は凡二千萬斤なりとす即ち綿は全量十分の六にして砂糖は十分の四に居る之に加るに内地綿糖の業は外國貿易の開けしより頗る衰頹に赴き常に彼輸入に壓伏せられて十分の益を收むること能はず困迫の狀見るに堪へざるものあり斯くの

如く困迫すればとて一敗志氣を挫き改良挽回の途を忽にす可きに非ざるも一國內に於て地味氣候の如何に拘らず無理にも該物産を振作せんとするは決して策の得たるものにあらざるなり

若し夫れ土地廣大ならざる處に於て各種の植物を分播する時は其類愈多くして其土地愈分れ狭は益狭にして小は益小となり一も全國の一大物産として世界に争衡すること能はざるに至る之を喻へば封建の時に方て各藩各兵備を盛にし其將帥を異にし各其方向を殊にして外國と戦争するものに異ならず其一敗地に塗るや知る可きなり蓋明治一新廢藩置縣より政事法律兵制の如き悉く中央の一轄に歸し之を統合して左右するに至り政權兵權は從前に比して強大を加へ一致に赴きたりと雖ども獨り物産繁殖の途に於ては猶ほ未だ封建の舊轍を襲ひ全國を統一して外國に對するに至らず殖産興業上最大缺典と謂ふ可きなり故に向來我邦農業の目的は一二最も適當の物産にして世界に比類少きものを選び全國の力を一方に集めて以て衝を世界に争ふの手段を爲さざる可らず例へば内國綿砂糖の如き産出少量なるは獨り種藝の術に短なるのみならず地味氣候の他國に及ばざるものあるを發見せば徒らに無用の勞力と餘計の肥料を費すことをなさず其種藝を廢して之れに代る可き輸出産物を増殖することを勉めざる可らず現に甘蔗の如き四國邊にては多量の肥料を用るも大島に至ては大抵灌水のみにて他に價ある肥料を用ひず而して其生長收穫は適に四國の上にと云ふ是れ一國內に於ても尙ほ天候地宜の争ふ可らざるを證するに足れり況んや世界萬國天候地宜の大に異なるものあるに於てをや

我國從來米穀を貴び又往時に於て農産中尤利あるものなるを以て溪瀨掌大の土地も苟くも水利の通ずるあれば之を墾し山腹嶺上苟くも開くに堪べき所は或は池を掘り堤を築きて水を溜め以て水田となす而して雜草雜木の繁茂する曠

野の數十里に渉るものあるも水利の便あらざる所は措て省みず是れ他なし獨り水田にのみ汲々として他の植物に著目せざるの致す所なり其れ既に雜草雜木の生ずる所豈に桑茶の生長せざる理あらんや是れ亦農家が内國需用にのみ力を盡して未だ眼を海外に放たざるの誤に出るのみ此の如く溪瀨掌大の土地を争ひ隻手之を耕すも其穫る所果して幾何ぞや山腹嶺上の耕作は肥料の運搬灌漑の準備耕耘の來往之を平野に比すれば平時にありても其勞費實に二三倍の多を要す況んや一旦小旱魃に際しては土涸れ苗枯るゝを致し霖雨に及んでは堤決し苗流るゝに至る此皆農家經濟に於て大に取らざる所なり畢竟米穀を貴ぶは内國需用の著目に偏し久しく農民社會に浸潤したる耕作の習慣心に由て致す所なりと雖ども一旦外國の競争起りて外品の溢流我國に波及するに至ては恐くは又相敵すること能はざるに至るべし故に今より之れが慮を爲し水田不適當の場所は古來の習慣米を作らんとするの念を勇割して之に代るに桑茶を以てし蠶を養ひ茶を製し全國の力を盡して其業に従ふときは土壤廣大ならずと雖ども亦能く多量の物品を産出して然かも其産出品は最も本邦の地味氣候に適し世界中必ずしも普く適應するものにあらざるを以て全世界に向て衝を争ふことを得べきものならんのみ(明治十六年五月一日及び二日)

金満家奮へよや

巨萬の資本を所持して能く其働きを支配し鐵道運河等の起業ありて資本を募るの際には其債主の政府たり會社たるを問はず利子と信用の如何を察して其求に應じ社會有益の事を助成し兼て又自家の囊橐を利するもの之を稱して資本家と云ふ家に大金を積めども之を利用することなく或は貨幣の何物たるを解せずして直に貨幣其物を尊び眼を過ぐる

の金銀は再び其門を出づるを許さず萬鎰の黃白をして暗窖に呻吟せしむるものに至ては貨幣をして其功用を失はしむるものにて之を金満家と稱す可きも資本家の名を下すことを得ざるなり西洋諸國にては資本家國民の一部を占め其所持高の莫大なるは申すに及ばず之を運轉するの活潑にして射利の妙訣に合するは實に感服の外なきなり我邦にては別に資本家と稱す可きものなきが如しと雖ども其名に相當するものは所謂紳商社會の人々にて資本家にして商業家を兼ねるものならん此流の人々にても之を西洋諸國の資本家に比ぶれば見る影もなき有様なるが況して地方の金持に至ては其名の指し示すに違はず唯だ金を持つのみにて之を使ふことを知らず今日にても何縣の富豪が大金を土中に埋めたりとの風聞を耳にすること度々なり畢竟此等の人々は一たび其手を去りたる貨幣は後來再歸の期なきが如くに感じ所謂與之爲取を知らざるものならん古人は貨幣を形容して無足而飛と云ひたれども我邦金持の手に墜落したる貨幣は飛行の妙術を擬はれて永く其禁錮を蒙らざるを得ず貨幣若し心あらば必ずや其冤を訴ふることならん

歐洲諸國にては資本を利用するの美風大資本家の間に行はるゝのみならず次第に小民の間にも布及し少額の資本を聚めて其働きを大にし融通資本に寸時の遊惰を許さざるに至りたり英佛二國にて國債の募に應じたる資本家を見るに千八百年初より募集の金額に比例して之に應ずるの人数次第に増加し千八百三十年度佛國の公債證書所持人は僅に十二萬五千人計りなりしに其七十七年度には百二十四萬九千七十一人に上りたり、この兩年度間の公債は其高同じからざるが故に之に割合はして所持人に何程の増加を來したるや之を詳知する能はずと雖ども國債の募に應じて其資本を投ずるの人数次第に増加したりとのことは掩ふ可らざるの事實なり英國にては富豪の徒、一手を以て巨額の公債募集に應ずるが故に之を佛國に比すれば其所持人数頗る少く千八百七十六年三分利付の永遠公債證書を所持したるもの

は十萬八千三百九十二人に過ぎざれども之を前年度に比すれば其持主の數大に増加したるものなりと云ふ今公債證書所持人の多寡を以て直に其國の人民が資本を利用するの例證となす能はず、況して東西事情を異にする我邦に比較して云々なりとの判斷を下すを得ずと雖ども此一斑を推して考るも亦以て英佛諸國の人民が其資本を使ふの次第に敏捷なるを察するに足らんと信ず（目下我國にても公債證書を買ふ者非常に増加して其價の騰貴近年未曾有なりと雖ども其原因を尋れば世間の商賣日に不景氣を増して物價次第に下落せんとするの勢を示し之に加るに紙幣の昂低常ならず昨今銀貨一圓二十錢餘なるも或は數日にして一圓十錢に至るも計る可らず斯る無常變幻の通貨に依頼して商賣品を仕入れ忽にして百に一二十の損亡を蒙らんよりも寧ろ薄利なる公債證書を買ふに若かずとの胸算に出たることにして即ち商賣世界活潑なる資本を移して遲鈍なる證書の蔭に蟄居せんとするの謀より外ならず故に目下我公債證書の騰貴は商賣の惡況を示すの標準として見る可きものなり）

現今我邦の金利は歐米諸國に比して頗る高く殆んど之に二三倍する位なれば内資輸出杯の事は思ひも寄らぬ次第なるが金滿家其所持高を利用せんと欲せば内國に在て決して其餘地なきを患へず之を用ふるの餘地ありながら遂に其用を果さざるは何ぞや我輩は斷じて言はん是れ我邦の金滿家が其資本を投ず可き事業の性質を知らずして徒らに危險を感ずるの致す所なりと、西洋諸國にては資本家耳を傾けて其募集の沙汰を待ち一旦之を募るものあれば争ふて之に應じ其勢水の卑きに就くに異ならず、パナマ地峽掘割の資本を募るに當りては米佛の資本家先を争ふて其求を充たし佛境鐵道架設の資本を募るに際しては歐洲の資本家雀躍して之に應じたり是れ畢竟資本多きが故とは申しながら其資本家の見識高くして地峽掘割、鐵道架設の何事たるを知り既に之を知るが故に其危險を感ずること少きの故ならん我邦

の金滿家は之に反して概ね文明の事物を知らず之を知らざるが故に妄想の危險を感じ之に戰慄して其資本を用ふるの機を失ふが如し我輩若し金滿家に向つて假に一二の疑問を設け此度朝鮮政府にては採鑛の業を起さんとて若干萬圓の資本を募る由なるが其利子は差引精算して内國の利子より何朱の餘分なり之に應ずるの意ありやと問はんは金滿家は蓋し其頭を横掉するならん若し又言葉を更めて然らば近日神戸大阪間に數箇の電話機を設置せんとする企圖ありて其發起人は有名の誰某なり其利子は云々なり之に應ずるの意ありやと問はんは容易に之を首肯するや否、十中の八九は先づ見合せに仕らんとの返答を得ることならん是れ其金滿家が朝鮮政府を知らず其電話機の何物たるを知らざるが故に徒に危險を感じて射利の欲心を挫折するに由るなり故にこの金滿家を以て西洋諸國資本家の地位に進ましむるには之をして内外の事情に注目せしめ文明の事物に接して其性質を知らしめ傳來の昔し堅氣を破り事業を見分けて之に其資本を投ずるの勇氣を養はしめざる可らず今日の金滿家は退守を以て專一とし質素儉約十口の素封にして未だ新聞紙を購讀したることなし杯との奇談は毎度の事なるが今後我邦と西洋の交際益密接となり汽船の往復織るが如くにして益其速力を加へ海底電線は蛛網の如くにして東西合璧の觀をなし金錢上の掛引は電光石火暫ならざるの日に當りても尙且今日同様の地位に在て躊躇逡巡することあらんには西洋の商人等は奇貨居く可しとて鬼臉を蒙て小兒を嚇すの手段に出んこと必然なり此時に當りては智者は資本に乏しく資本を有するものは遲鈍にして力に及ばず看すに落後國となり剩へ其利益を奪はれんこと疑を容れず我輩は後日の圖畫を胸中に畫きて獨り痛心に堪へざるなり世上の金滿家も此邊に注意し今日よりして自ら奮勵する所なかる可らざるなり（明治十六年八月十四日）

運輸交通

日本には船なかるべからず

我日本は四面海を環すの一嶋國なり此嶋國にして兵備上にもせよ商業上にもせよ須臾も無かるべからざるものは船なり我國既に三菱會社あり近日は又共同運輸會社の設立ありて内外洋の運輸をして今一層の便を得せしめんとし續續新船舶の購入あり政府は護國の海軍を擴張せんがために新たに軍艦を購入し又其新造に著手するあり今より以後我日本帝國の船舶は年に月に増加して兵備上にも商業上にも絶えて遺憾なきに至らしめんとするの勢あるは我輩が國のために賀する所なり

我輩は船舶の増加を見て國のために之を賀する者なりと雖ども顧みて其船舶を増加し得る所の方法を見れば又大に國のために之を悲まざるを得ざるものあり之を内國に造らずして外國に買ふこと即是なり蓋し今の船舶は古の船舶にあらず其構造の巧妙堅牢なる恰も天下の名城に羽翼を附し自在に洋面を翱翔せしむるの觀あり殊に又驚歎すべきは當代文明の長足疾歩して人を顧ざる造船の術も日月に改進し明治元年の船は以て明治十六年の用に供すべからず實に三日見ぬ人をして刮目せしむるものなり斯る世の有様なれば日本新技術の幼稚なる其鋒を歐米諸國と争ふこと能はず當時は尙ほ我立國必須の船舶をも人に依頼して其構造を成すが如き遺憾は固より遺憾なりと雖ども事情止むを得ざることを以て之を放擲せんか我内國の船工は永久其術を研くの機會なくして明治五十年の技術も之を十六年の昔に比して

遂に優る所なくして止むべし故に目前些少の不便を顧みず務めて造船の術を獎勵し苟も日章旗を翻へすの船舶ならんには其大小輕重を問はず一切日本工人の手に成らしめんことを期すべし船を造るに第一の要用は良工を得るに在ること勿論なるが次に又大に要用あるものは造船の材料たる鐵と木材との供給なり鐵は日本普通の礦物たりとは古來全國人民の信じて疑はざる所なりしが近來實際の經驗より推すときは或は大に然らざるものゝ如き疑なきにあらず彼の陸中釜石の鐵山の如きは百世無盡の良坑と唱へ依て以て日本全國をして文明必須の鐵に飽かしむること難からずとこそ信じたりしを豈圖らんや多年の希望は一朝空しく水泡に屬し折角の無盡藏も今日は既に其工業を廢し數里の鐵道一落の工場空しく山間に存在して巨萬金の消滅を證するの記念碑たるに至りたるは其悲觀一見して我輩日本人を泣しむるに足れり然りと雖ども日本八十餘州釜石を除きて鑛山なしと云ふにてもあらざるべければ或は他に適當の鐵鑛を發見して我輩の希望に副ふの日あるべく或は不幸にして日本全國鐵山なしと定まることあるも是非もなき天運にして人力の及ばざる所なるを以て不満足ながら鐵の供給だけは外國に仰ぎて内國の造船を怠るなからんことを希望するなり内國に鐵を産せざればとて造船を廢するの理なければなり故に其産地の内外は姑らく之を舍き造船の用に供すべき鐵を得るに差支なきものとせんか今一個の緊要事は木材の供給を不足なからしむるに在り日本は木材に不足なる國にあらず西南諸州深山大谷に乏しきの地の如き或は十分に木材に富むを得ざることあらんと雖ども東山道諸州或は北海道全島の如き大小各種の良材は實に勝けて用ふべからざるなり幾十百年の間斧斤を入れたることなきがために立木は倒れ倒木は朽ち木を以て山谷を埋むるもの少なからずと云へり然に現在此良材に富むるにも關せず時に或は米國より木材を輸入し造船の料に供することあるは我輩が遺憾措く能はざる所なり東山北海諸道の山林は自然に生長して自然に腐

朽するも嘗て我必須の造船に助力すること能はざる所以は道路運搬の便未だ十分ならざるがためなるべし若し此良材をして一たび人間に出るの便を得せしめば空しく山谷に腐朽せざるのみならず幾千萬艘の船舶を新造して日新の文明に先登の功名を収むべきや必せり我輩之を思ふ毎に日本の内地に鐵道の便なきを悲まざるはなし造船事業の一事よりして之を視るも鐵道の布設は目下日本の急務と云ふべきなり鐵道布設甚だ急務なりと雖ども造船も亦甚だ急務にして鐵道の落成を俟て後に初めて之に著手するが如き緩漫の談を許さず殊に造船用の木材の如きは最も生木のものを忌み一年にても古きを貴重するが故に現在鐵道の布設如何を顧みず東山北海の諸道を始め所在の山林に就て斧斤を入れ先づ其木材を近傍の池沼水澤の中に沈め置くべし斯の如くして其木質の漸く用に適する時に至れば恰も鐵道の布設に逢ふことあるべく好しや數年の内に鐵道の其側を過ぐるものなかるべしとするも池中の木材は腐朽すべきにあらず一年は一年より良質に變ずべきを以て伐採の後幾十年を経るも苦しからず日月の経過と共に其木材の價を増し他年一日必ず其價を實にすること疑なければなり故に我輩は我海國必須の造船を奨励せんと決心すると同時に直ちに各地の山林を伐り目下道路の有無に拘はらず悉く之を所在池沼の中に貯へ置き一旦道路の開通と同時に造船適用の古材を得べきの準備あらんことを希望するなり(明治十六年四月二十五日)

天下大に急にすべきものあり

第一

天下の事政治に關するの議論には世上の論者その執る所各同じからず左せんと望む者あれば右せざる可らずと争ふ

人あり甲は漸進著實の政治を希望すれば乙は急進改革のことを悦び三人五人互に其説を別にして滔々たる天下急漸の議論恰も湯の沸くが如く又蚊の鳴くに似たるあり然るに玆に天下の事是非に急行を要する者あり之を急行せざるときは一國一身各遂に其獨立安寧を保つこと能はざるものあり此一事に關しては世上の論者政治思想の急となく漸となく必らず急進斷行の主義を執るべしと我輩は深く我良心に信じて疑ふ所なし若し猶ほ此一事も漸進にすべしと云ふの頑論者あれば我輩は之に對して汝は與に日本國の事を議するに足らずと一言に之を謝絶するも敢て無禮に非ざるべしと思惟するなり此急進を要するの一事とは何ぞや日本文明の進行乃ち是なり

抑々運輸交通の便否は一國文明の以て遲速する所にして特に鐵道の長短は文明高低の程度を定むるものなり今日我國の文明を導かんとするには早く全國の鐵道を敷設すべしとの所論は毎度我輩の開陳して世上に訴ふる所なり然るに今日の實況を顧みるに世上未だ鐵道敷設の要務なることを知るの人少なきか或は之を知ると雖ども是れ漸進を期すべき者なりとて殊更に優悠不斷の爲を學ぶものか兎角に遲緩を極むる者の如し蓋し文明の事は甚だ急なり文明の要具を用るも急ならざる可らず駸々として駟馬も及ばざる今日文明の長歩に相連れて大に急にすべき其要具を作るにも尙且つ驚々として老馬の進みを學ばんとするは甚だ解すべからざるなり西洋に於て始めて蒸汽車の試乗ありしは千八百二十九年のことにして爾來今日迄の星霜は僅々五十四年に過ぎず然るに其間に此文明の利器を使用すること最も敏捷にして空前絶後の長進歩をなせしは米國人民の上に出づる者ある可らず本年七月米國出版の學藝雜誌にジョージ、アイルス氏が米國の鐵道を記したる一章ありこれに由るに目下米國鐵道の全長十一萬四千英里なりと云ふ之を鐵道創始以來の星霜に比較するに米國にては毎年平均二千百一十一英里の鐵道を敷設したる勘定なり米國人民の能く文明の事に急

進急行なる偏に我輩の感服する所にして退て内國の有様を反顧すれば心中亦實に感然に堪えざるなり更に同氏の報ずる所を見るに目下米國にて築造中の鐵道新に落成する者平均毎日三十英里に下らずと云へり嗚呼盛んなるかな米國の鐵道、一日にして三十英里を落成すれば一ヶ月にして九百英里一ヶ年にして一萬〇八百英里の割合なり固より毎日三十英里の平均と云ふは當時幾月幾年間の平均なるか之を明記せざるを以て其詳細を知り難しと雖ども兎に角に米國人民が文明進歩の必要具なる此鐵道を作るに急進急行なることは我輩唯感服の外なきなり

我國に於て鐵道の第一紀元と稱すべきは實に明治五年六月にして新橋横濱間十八英里の鐵道が其落成を告げたる時なり爾來本年に至る迄星霜を経ること十二其間に落成したる鐵道は神戸より大阪京都を経て大津に至る者五十八英里敦賀より長濱を経て關ヶ原に達する者四十一英里以上の三線路與に官設に係る者なり其民設に係る者にて既に開業したる線路は上野より熊谷に至る三十八英里なり熊谷より高崎に達する分四十三英里は沿道既に軌條を設けたる所多く遅くも本年の暮れ迄には開業に至るべしとのことなり故に此分も落成近きに在る者なれば假に既成の鐵道線中へ加算し以上四線の里數を通計すれば全線路の長さ百九十八英里となる此百九十八英里の線路は明治五年の第一紀元を始めとして本年の終末に至る其間殆んど十二年の久きを経過して落成したる者なれば日本國の鐵道は毎年平均十六英里半を落成するものと見做すことを得べし之を毎月に平均すれば一ヶ月僅に一英里三分強に過ぎず之を彼の北米合衆國が五十餘年間に十一萬四千英里を敷設し毎年平均の延長二千百一十一英里毎月の延長百七十六英里の進歩に比較すれば日本鐵道の進歩の如きは寧ろ兒戲なりと謂はんこそ適評なるべし況んや近時米國の鐵道は毎日平均三十英里を進むると謂ふに於てをや我輩が日本鐵道敷設の急進急行を希望するは決して無理ならずと信するなり

第二

我輩は斯の如く日本鐵道敷設の急行を希望する者なりと雖ども復た直に一舉して米國の盛大に倣ふべしと責むる者に非ず土壤の廣大なること米國の如き、沃野千里地味豊かにして河海の利も亦大なること米國の如き、人口月に増殖し事業日に多きを加ふること米國の如き、國富饒にして資財餘りあること米國の如き、文明の進歩勢ひ旭日の天に沖するに似て英佛諸國も尙且つ之に辟易すること米國の如き直に之を取て以て我日本と對照し我日本人に責むるに其及ばざる所を以てするは事實少しく殘酷の仕方に互り實際に行はれ得ざる掛念もあるべし故に我輩は敢て此殘酷を爲さずと雖ども去迎は遁辭を自國の不文明に托し口實を自國民の貧乏に假り因循懶惰に歲月を送迎し活潑無比の文明世界に立て遅鈍なる無懷氏流の民俗を學ばんとする者なりと云はるゝも我輩は亦これに答るに辭なきを愧る者なり我國の米國に及ばざるは我輩固より之を知ると雖どもその相及ばざること米國にては一日に三十英里の鐵道線路を延長するに我國にては十二年間に百九十八英里一ヶ月僅に一英里三分を作り得る迄に彼我の文明國力相懸隔する者とは信ぜざるなり日本が十二年間を以て敷設せし鐵道は米國に於ては六日を以て之を敷設することを得べし故に單に數字を以て兩國進歩の狀況を表すれば日本の十二年間は米國の六日なり此多忙なる世界に居りながら如何に文明に差等あり如何に貧富に區別あるにもせよ彼岸六日の事業が日本十二年の事業たらんとは案外千萬の事ならずや如何に鬱憂自暴自棄の論者と雖ども我國の貧乏を斯るものなりとは信ぜず我國の不文明を斯るものなりとは思はざるべし畢竟は日本國人が因循懶惰にして活潑進取の氣概に乏しく其急なるべき者を急にせざるの致す所なりと云はんより外に此理由を見出すこと能はざるなり一日三十里の延長は固より日本に望む可らずと雖ども一月三十里の延長は之を望むを得べし一月

三十里の延長も尙且つ望む可らずとせば三月三十里の延長は必ず我日本國に望むべきなり三月三十里一年一百二十里假りに明治五年日本鐵道第一線路の開設以來今日に至るまで十二年の間若し此速力に由て斷えず進行したらんは今日は既に我日本國內に千四百四十里の鐵道を有し今の日本の文明も亦幾層の上位に在るなるべし然るに我々が今日此鐵道を見ることを得ざるは我日本國人の大不幸なりと云はざるを得ず若し日本國人にして既往の過ちに懲りて將來を戒しめ大に其力を鐵道敷設に用ひんには三月三十里は愚るか一月三十里の鐵道を敷設し得んこと決して難事にあらざるべし但し是迎も米國の進歩に比較すれば猶甚だ遅々たるものと云ふべきなり

又アイルス氏の言に最も正確なる計算に由れば當時米國の鐵道に放資したる財本は六十五億弗にして全米國にある一切所有物の總價格の八分一に當ることなりと我輩は此計算を得て益々我日本國に鐵道を敷設するの急務なるを感じ又日本國の財貨は大に鐵道を敷くに餘りあることを知り米國に於て鐵道の財本は全國總所有物の價格の八分一に當ると云ふ以上には全國の人民が其資本の八分一は皆鐵道の事業に放資したる者にして彼國の人民が銳意熱心以て鐵道敷設を急にするを見るべし今我日本國にて工部省所有の鐵道東京横濱間、神戸大津間、敦賀關ヶ原間、の三線路又日本鐵道會社所有の鐵道東京高崎間の一線路又高崎より以北青森に達するまでの分又或は東北鐵道會社信越鐵道會社の各線路等差當り我々の希望に屬するものまでを擧げて之を算するも其財本は五千萬圓に上ること能はざるべし我輩は未だ日本全國總所有物の價格を知らずと雖ども五千萬圓の八倍より多きは勿論五十倍百倍よりも尙多きは疑を容れざるなり然るに我日本國人は此豊かなる資本を有しながら文明の要具たる鐵道を敷設するに當りて僅々數千萬圓の資本を下して満足するの理由はなかるべし今日全國總所有物の價格と鐵道の財本と相比较して其間に非常の懸隔ある所以は文明の進行を忽せにする日本國人の因循懶惰に因るものにあざれば鐵道の文明進歩に必要なを知らざる不學不明の致す所なるべし豈に亦哀まざるを得んや我輩は茲に我日本國人に向て文明の事は専ら急進急行を要する者なれば決して因循遲滯すべからずとの一言を陳述し以て其注意を煩はさんと欲するなり(明治十六年八月十日及び十一日)

大に鐵道を布設するの好時節

第一

今回我日本政府は中仙道を経て東京大阪間の鐵道聯絡を急にせんことを欲し工部省に命じて早々其工事に著手せしめ明治十七年度に於て別途金五十萬圓を同省に下附あるべしとなり東京は日本第一の大都會にして聖天子の在す所中央政府の在る所其重要全國に比類すべきものなしこれに次ぎて重要なる大都會は日本國中大阪の右に出るものなし今此兩都會の間に鐵道を聯絡せしめんとすること其企の善美なる固より我輩の辨を俟たず或は顧みて我日本國の性質を考へ三十年前に大に國を開きて西洋の文明を輸入し爾來唯歐米諸文明國と對峙して國の富強を競はんとするをのみ全國人民畢生の本願と定めたる改進黨にして明治十六年の今月今日に至るまで其首府の東京と國中第二の大都會大阪との間に未だ一線の鐵道も相通することなしと云ふは歐米諸國人民に對して大に自から赤面せざるを得ざる一大不始末とも申すべし我輩は日本全國人民と共に一日も速かに此鐵道を落成し顔を仰ぎて能く他の文明諸國人と相見るの愉快を得んことを欲するなり

然れども我輩が全國人民と共に鐵道を渴望するの情は獨り中仙道の線路のみに限りて其の甚だしき感ずるにはあらず中仙道の鐵道固より大切なりと雖ども他の地方に屬する鐵道の大切なるも決して大に中仙道に譲らざるべしと信するなり即ち信越鐵道會社の線路を關東の線路と聯絡せしめ東北鐵道會社の線路を關西の線路と聯絡せしむるを始めとし大阪以西の鐵道を延長して山陽道を下の關に達し更に九州に入りて長崎鹿兒島に及ぼすの線路は勿論越後以北羽前羽後を経て青森に至り日本鐵道會社の線路の陸前陸中地方より來るものと聯絡するの鐵道又は東海道相模伊豆駿河遠江三河尾張を経て關東關西を聯絡するの鐵道又は京都を發して山陰道を長門に出るの鐵道又は四國全島を縦に貫く鐵道又は九州の東北海岸豐後日向地方を通過する鐵道又は伊勢大和紀伊地方を東西に横斷する鐵道又は東山道の東北部を東西に横斷する一二の鐵道の如きは孰れも皆差當り我日本國の文明を進め我日本國の富強を増すために無かるべからざる必要具たるべし我輩は我國民と共に我文明富強に必要な此等諸鐵道の一日も速かに工事に著手するありて一日も速かに落成開業の好報道を聞かんことを希望するなり

我輩は日本鐵道に望む所甚だ大にして其成功を急ぐことも亦甚だ切なり蓋し厚く自から信じて毫も疑を容れざる所あればなり然れども我輩今故らに爰に鐵道の功用を説明するの必要なを覺えず何となれば我日本の文明を進め我日本の富強を増さんとするには目下鐵道の上に出るものなしとは我國輿論の既に識認する所にして今の日本に向て鐵道の利を説くは釋迦に向て法を説くの類たるを免かれざればなり我日本人は早く既に鐵道の利害を討論するの時期を經過し了り今正に鐵道建築を實施するの地位に立つ者なりと云ふべきなり依て我輩は出納計算上の點より聊か鐵道を布設するの利益を略記する所あらんとするなり

日本鐵道會社の上野本庄間の線路は鐵道布設希望者の爲めに最も仕合なる先例を揭示したり初め該會社の創立したる頃は日本全國の輿論未だ充分に鐵道の功用を悟らず或は鐵道は文明の必要具なりと承知してあるべき筈の人々にて其布設費用の大なるに驚き出納上得る所を以て失ふ所を償ふに足らざるべしとて兎角に遲疑逡巡するの狀情あるを免かれざりし然るに本年七月下旬上野熊谷間の鐵道落成して汽車の運轉を始め尋で十月下旬本庄迄の線路も竣工するに至りて世人皆其好結果に驚嘆し始めて出納上得失相償ひて更に又餘あるを知り前の遲疑逡巡の情も丁度此際の際雨と共に一時に霽れ渡り急に秋晴の心地となりしは日本の文明將に大に進歩せんとするの期に臨みたりと云て不可なかるべし實に日本鐵道會社は日本の文明開化を催促するの恩人なりと云ふべきなり

日本鐵道會社の既成線路上野本庄間の鐵道五十一英里四分一（日本里法にて二十一里弱）の築造費實際の計算を聞くに此線路間に在る戸田川鐵橋架設の費用をも合して總計百六十三萬五千八百圓許りなり而して該會社役員給料、鐵道保存、列車運轉等一切の營業費は本年七月より十二月まで半期間に五萬六千圓の豫算なるにこれに對し七月より十二月まで同半期間に收入する金額は七月下旬開業以來十月三十一日まで實際收入高の平均を以て計算すれば十二萬七千四百二十圓にして此内より前記營業費五萬六千圓を差引き當半期の純益金は七萬四千四百二十圓なるべき豫算なりと云へり試みに此純益金を前記百六十三萬五千八百圓の鐵道築造資金に配當するに一ヶ年八分七厘餘の利足に相當せり若し該會社に於て株金を募集すること實際の鐵道築造費額よりも少なく其不足の分は他の金主より一ヶ年八分七厘以下の利足を以て金員を借入れ其業を營む様のことありたらんには該會社の株金に配當すべき利益金は今日既に一ヶ年一割以上にも昇りたることなるべし今や日本全國農商工業の不景氣は三尺の童子も明知する所の事實なり假令鐵道は

文明の必要具なりと云ふも今日社會一般の不景氣に當りて已れ獨り其災厄を免かるゝこと能はざるは無論の事なるが故に目下日本鐵道會社の社運は決して好景氣のものにあらず矢張り他の諸業と共に今正に不景氣の頂上に在るものなりと云はざるを得ず然るに日本鐵道會社は此不景氣の衝に當りて此新業を開きたるに業の新らしきと時の不景氣なるにも拘はらず尙ほ且つ一ヶ年一割に近き利益を收め得るの事實は以てこれを視れば日本の鐵道は其利益の甚だ大なること世界に比類なき營業なりと斷言するも敢て差支なかるべし

第二

我輩は鐵道の功用を説き又此業の商利多き見込ある理由をも説きて日本國中其布設の速かならんことを希望したるや甚だ久しく今日始めての事にあらず然れども當時未だ日本國內の既成鐵道に就きて實際に此等の説明を爲すことの機會を得ざりし何となれば國內各處の鐵道は其里程極めて短かく固より未だ鐵道の功用を十分に示すに足らず殊に其興業營業とも悉く皆官府の手に在て存し工事に念の入りたること營業事務取扱ひの鄭重なること等何れも皆夫れに相應する餘分の費用を要するものにして俄かにこれを取りて私設の鐵道事業を例するに適せず故に此際我國人に向ひて鐵道を談ずるにも官府の手に屬するものなれば兎も苟くも私立會社の事業として其所得の利益多寡如何を勘算するに當り聽く者をして十分心服安堵の思を爲さしむること能はざるの憾なきにあざりしなり然るに私立日本鐵道會社の世に現はるゝありて東京高崎間の線路漸次其工を竣りたるより以來は所謂百聞一見に如かずの諺に漏れず前きに未だ安堵せざりし人々も此線路の好結果を目撃して始めて大に悟る所あり全國の人心方さに鐵道布設に熱中するの傾を示すに至りたるは日本人民の大幸實に此事なりと申すべし

我輩既に前號の紙上に記したる如く日本鐵道會社が本年七月下旬に上野より熊谷までの線路を開き同十月下旬に更に又本庄までの線路を開きたる以來實地の收入支出に依りたる該會社の會計を聞くに本年の十二月に終る半期間に於て早く既に一ヶ年一割内外の利益を見るべき見込なりと云へり實に申分なき好結果と云ふべし依て我輩は全國の富豪有志諸君に勧告す日本國中農工商業の不景氣なる實に今の時より甚しきはなく金力あるものは金の振廻はしに困り才力ある者は才の使ひ場所に困り茫然坐食して唯日に身代の減少すると才思の鬱滯するとに當惑する者百人は百人千人は千人皆然らざるはなし故に諸君にして一たび奮起し此金と此才を以て大に鐵道事業に従事せんには今の不景氣も決して憂るに足らず此慘雨悲風の眞中に在てすら尙ほ且つ一ヶ年一割内外の利益を收むること甚だ容易なればなり追て商機をして一轉せしめ全國各業好景氣の時節到來することあらんか此際に於ては鐵道の利益も亦他の諸業の繁榮と共に大に増進し終始常に天下第一の好營業たるの實利を失はざるべし鐵道を布設して全國人民の爲に文明を進め鐵道を布設して自家一身のために功名榮利を博す諸君を此業に誘致する所のもの其力甚だ強大なりと云はざるを得ず全國の富豪有志諸君は今の時に及びて早く自から大に計畫する所ありて私立鐵道諸會社を設立し文明を進め功名榮利を博するに決して猶豫することなかるべしと信ずるなり然れども萬一諸君にして目下尙ほ聊か躊躇する事情ありて獨立獨行直ちに此好事業に従事することを好まず日本鐵道會社の例に倣ひ政府に依頼して一ヶ年八分の利益請合并に他の保護を得んと欲することあらんか我輩は諸君に向ひて俄に同意を表すること能はず如何となれば利益請合其他一切の保護も無代價にして得らるべき者ならんには兎も角もなれども既に代價を拂ひて買入るゝものたる以上は篤と勘辨して其損得を思はざるべからず今日日本鐵道會社と政府との間に定めたる特許條約書を一閱するに政府より該會社に與ふる保

護の大略は鐵道線路倉庫停車場等の敷地は其土地官有なれば無賃にて會社に貸渡し民有なれば政府にて買上げ會社に拂下ぐべし、鐵道の用に供し又は取除くべき家屋は官有なれば無賃にて貸渡し又は相當の代價にて拂下げ民有なれば政府にて買上げ會社に拂下ぐべし、鐵道に屬する土地は國税を免除すべし、鐵道落成の前と雖ども拂込の株金に對し一ケ年八分の利足を政府より下附し落成開業後會社の純益一ケ年八分に達せざることあれば東京より仙臺までは十年間仙臺より青森までは十五年間其八分に不足の分丈の補助金を政府より給すべしと云ふに在り然るに該會社が政府に對する義務即ち此保護買入の代價とも云ふべきものは政府は監査官を命じて鐵道工事運輸事務及び一切の會計を監査し命令督促すべし、旅客及び荷物の運送賃及び走車の速度發車の度數時間は工部卿の許可を得て定むべし、鐵道地面内に於て土地或は家屋の一部分を電信郵便兩局の需に應じて無賃にて貸渡すべし、郵便信書及び其遞送に關する人員を無賃にて輸送すべし、鐵道事務に關して往來する官吏は無賃にて乘車すべし、公務を以て往來する陸海軍人軍屬軍馬軍用品及び警察官は半價にて乘車輸送すべし、檻車及び警固吏員は無賃にて乘車輸送すべし、非常の事變兵亂等の時に方りては政府をして自由に鐵道を使用せしむべし、凶歳穀價騰貴の時は政府の命令する時日の間指名する穀物に限り半價にて輸送すべし、政府より他日該鐵道に枝線を附し若くはこれを横斷し若くは其近傍に道路溝渠運河を設くるを允許するときは會社に於てこれを沮拒するを得ず、この特許條約期限は明治十五年一月より向九十九年とす但し滿五十年の後は政府に於て何時にても鐵道及び一切の附屬物を會社の總株券金額を以て買上ぐるの權あり、特許條約及び會社創立定款に依り施行の際當該官吏と會社との間に異見を生じたるときは工部卿これを判定すべし云々以上日本鐵道會社が前の保護と交換したる所の責任義務なり我輩は今全國の富豪有志諸君に向ひて此保護と義務と孰れ

が重きやと問はんとす好し兩者の間に輕重の別なしとの答ならんにも會社設立五十年の後には何時にても株券の金額を以て政府にて此鐵道を買上ぐることを得るとの約定あるが故に日本鐵道會社の例の如く開業早々一ケ年一割の純益を得るの勢にては五十年の間に二割三割又は其以上の利益を收むるの時節到來するやも知るべからず此際株券面の金額にて此鐵道を政府に買上げらるゝは會社の身に取り決して喜ばしきことにはあらざるべし是れ我輩が保護と義務との輕重如何に關して鐵道の持主たる諸君の一考を煩はす所以なり

第三

我輩は前日の紙上に於て全國富豪有志諸君に忠告し今の日本の鐵道は甚だ利益の大なる事業たるが故に必ずしも他人の保護を要せず獨立獨行にして此業を營むことの難からざる所以を述べ或は好しや彼の日本鐵道會社の例に依り我政府と特許條約を結び株金に對する一ケ年八分の利足請合其他の保護を得んとするも保護は無賃にして得らるべきものならざるが故に拂ふ所の代價と得る所の保護とを對比計量して篤と損得如何を顧みざるべからずとの意を述べたり然れども富豪有志諸君にして十分熟考の後到底政府に依頼して利足請合其他の保護を受けるを以て得策なりと決定せんか我輩は決してこれを止むる者にあらず果して保護の必要を感ずること斯の如くならんにはこれを請ふも亦よろしからん我輩の見る所にては今日の實況に於て此保護を得ることは甚だ容易なるべしと思はるゝなり何となれば假りに吾人をして政府の身と爲りて一考せしめよ今日の實例に依れば此保護を與ふる約束に關し政府は決して損失者たるの恐れなければなり鐵道の利益甚だ覺束なき時節こそ利足の請合も容易に許し難き意味のあることなれども一ケ年八分位の純益は開業の當分天下の各業大不景氣の時に當りても間違なく收得するものと見据ある以上は條約の上にては向十年

乃至十五年の間利足を請合ふと云ふも其實は株金拂込の時より開業の日まで鐵道築造工事中の短日月の間を請合ふものに過ぎざるなり尤も此工事と雖ども彼の日本鐵道會社の上野本庄間の線路の如く僅々二十里許りの鐵道を布くに政府と特許條約の成りし日より殆んど二ヶ年を費して始めて成功を告ぐるが如き緩々たるものにては自然株金拂込の時より開業までの日月も長かるべき恐なきにあらずと雖ども此等は例外の沙汰としてこれを含き且つ政府の監査官にして其督促をさへ怠らざるときは工事の抄取りは甚だ速かなるものなりと信すべきが故に開業迄の利足請合は決して恐るゝに足らざるべし假りに一例を擧げて特許條約の爲に政府は大に利する所あるも損する所なき理由を示さん今東京大阪の兩都會を聯絡する中仙道の鐵道を布設するに千萬圓を要すとし或る私立會社にして此工事を思立ち政府に特許條約を願出でたりとせんか現時將來此中仙道線路の繁昌すべきは甚だ明白の事なるが故に政府は唯開業までの間の利足を請合ふの覺悟にて十分なるべし而して其工事の如きは注意次第にて一ヶ年乃至一ヶ年半間に竣功せしむることは亦決して難からざるべし左すれば此特許條約を結びたるがために政府の失ふ所は千萬圓の八分利足一ヶ年乃至一ヶ年半分即ち八十萬圓乃至百二十萬圓にして一たび此金額を拂ひ置くとときは爾後毎年此鐵道使用のため政府の手に落る所の利益便利は百萬圓内外の利足又は元金の幾分を償還するに相當すべきのみならず暫時辛抱して五十年の後に至れば東京大阪兩都會間の好線路にして其所得の純益は一ヶ年三四割に達し居る時ならんとても單に其株券額面の千萬圓を投ずればこれを政府に買入るゝことを得べし豈妙策中の妙なるものならずや故に我輩は切に信ず私立鐵道會社にして若し日本鐵道會社の例に倣ひ政府の保護を希望する者あらんには政府は必ずこれを與ふるに吝ならざるべしと

以上是我輩が全國富豪有志諸君に向て鐵道事業に従事するの利益多きを説き獨立獨行大に此業を興して差支なき理

由を説き或は若し政府に依頼して保護を得んとの願望ならば此願望を達することも決して難からざるべく政府に於ても此保護を興へて利すべき見込あるも損すべき恐なき所以を説きたるものなるが果して以上の論旨のみにして實際大に日本國內の鐵道を興し富強文明を増進するに十分ならば則ち可なりと雖ども若し日本の人心尙ほ未だ空しく此好事業の前に躊躇するの實あらんか我輩は則ち我日本政府に向て政府自から鐵道布設の勞を取らんことを希望するなり今政府自から手を下して大に各路の鐵道を布設し文明の進歩を速かにせんと欲せば其法甚だ容易なり目下全國の各業不景氣を極め金利の低落すること近年其比を見ず各地大小の財産家は皆其資本の融通に當惑し空しく庫内に貯藏して金紙山積の裡に鬱悶するもの滔々たる天下皆是なり左ればにや近來公債證書の騰貴不相應の高點に上り七分利付の公債百圓を九十圓内外にて賣買するに至りたり九十圓にして一ヶ年七圓の利足を得るは百圓にして七圓七十七錢を得るの割合なり日本の金利にしては頗る廉なるものと云ふべし依て政府は世上尙ほ此需用の甚だ大なる時に及びて新たに公債證書を發行し人民の買はんと欲する限り千萬圓にても二千萬圓にても各々所なく賣渡すべし斯の如くするとき供給の増加と共に需用も減じ七分利付の公債を九十圓に賣ることは六ヶ敷して八十圓に價を引下ぐることの費用を見出す場合もあらん或は募集の總額終に二千萬圓に達せず一千萬圓にして漸く需用の止むこともあらんかなれども中仙道の鐵道を布設する位の金額は忽ちにして募集し得らるべしと信するなり政府は公債を發行し一ヶ年八分乃至九分の金を借りてこれを鐵道に使用し一年の後工事落成の日に至れば忽ち一二割の純益を收むること難きにあらず公債償還の法甚だ容易なりと云ふべきなり然れども今や鐵道の功用甚だ著しく各路一齊に起工を熱望するの折柄僅々一二千萬圓の内國債發行を以て此望に應ぜんとするは事多くして金少なしこれを如何と云ふ者あらんか我輩はこれに答へ

て果して金の不足に當惑するとならばこれに應ずるの策甚だ易し即ち外國債を募集すべしと云はんのみ今日我日本政府の信用を以て英國倫敦に到り公債を發行せんには一ヶ年六分乃至七分の利足にて五七千萬圓の金を募集せんことに容易なるべし殊に近日倫敦よりの報道に依れば同府市場の金利近來大に下落し本年七八月の頃までは一ヶ年四分内外の利足なりしに九月下旬以後は三分乃至二分二厘五毛に下りたりと云へり倫敦も亦財産家が資本の振廻はしに當惑の折なるべし斯る低利の國より資本を借來りて莫大の收益ある我日本の鐵道を布設せんこと其損益得失固より多辨を要せず我輩は今の時を以て公に私に大に鐵道を布設するの好時節なりと信するなり(明治十六年十二月一日より同月四日に亙る)

教育學術

時事新報の敗訴天下の爲に賀す

時事新報の記者は其第二百二號の社説に賣藥の無效無害なることを記したりとて東京の賣藥屋共に訴へられて始審裁判所に於て新報の敗訴となりたれども新報の記者は素より學問上より論じたることなれば其裁判に服せず直に東京控訴裁判所に控訴して様々辨論したれども昨日左の如き判決を得て重ねて敗訴なり

明治十六年第四百五十七號

裁判言渡書

- 東京府芝區三田二丁目二番地
新潟縣士族時事新報假編輯長
- 控訴人 大崎 鈿人
- 同府京橋區瀧山町十一番地寄留
埼玉縣士族
- 右代言人 澤田 俊三
- 同府日本橋區室町三丁目十二番地
平民山内作左衛門外三十七名總代人
- 同府京橋區銀座二丁目一番地平民
- 被控訴人 岸田 吟香
- 同府同區大鋸町六番地平民
- 斷 喜谷 市郎右衛門
- 同府日本橋區吳服町十一番地平民
- 斷 太田 信義
- 同府神田區小柳町六番地平民
- 斷 森島 松兵衛

時事新報の敗訴天下の爲に賀す

同府麹町區麴町三丁目二番地平民

同 斷 河 村 謙 吉

同府下谷區下谷西町四十七番地平民

右代言人 松 尾 清 次 郎

本訴ハ東京始審裁判所ノ裁判ニ對スル營業毀損回復ノ控訴ニシテ其争フ所ハ賣藥ノ効能如何ト被控訴人等ガ取
消ヲ需ムル時事新報第二百二號ノ社説ハ取消シ難キ者ナルヤ否ヤト若シ之ヲ取消スベキモノト爲ルモ其日數ハ五
日間廣告スルヲ至當トス可キ者ナルヤ否ヤノ三項ニ在リ今本衙ニ於テ終審ノ裁判ヲ與フル左ノ如シ

控訴人ハ文部省ノ報告及衛生局ノ報告又ハ「ビツトル」ノ廣告及内務省ノ賣藥検査心得書等ヲ乙號證ト爲シ文
部省ノ報告中ニ（賣藥検査之趣意ハ有害ノ方劑ヲ禁ズルニ在リ無害ノ方劑ハ効ナキモノト雖下モ姑ク之ヲ存シテ
發賣ヲ禁ゼズ故ニ免狀ヲ與フルハ只其害ナキヲ保ツノミニシテ必ズ其藥ヲ以テ有効ノ良劑ト定メ之ヲ世ニ證スル
ニ非ズ）トアリ衛生局ノ報告中ニ（賣藥云々其内藥用ニ妥當ナル方劑ハ僅少ニシテ無効ノ者大率十ノ八九ニ居ル
但其巨害ナキヲ以テ姑ク之ガ發賣ヲ禁止セザルノミ）トアリ「ビツトル」ノ廣告中ニ（抑モ世ノ賣藥ヲ見ルニ云
々俗眼ヲ眩惑スルモノ十ノ八九ニシテ其實ハ功モ無ク亦害モ無キニ過ギザルノミ）トアリ賣藥検査心得書ニ（世
ノ所謂賣藥ナルモノハ無稽ノ方劑十ノ八九ニ居リ云々）トアルヲ以テ賣藥ノ効アラザルコト推テ知ル可シ故ニ時
事新報第二百二號ノ社説ハ敢テ過言ニ非ズト云フ是控訴ノ要件ナリ素ヨリ良醫ノ配劑ニ係ル適藥ニ比スレバ賣藥
ハ姑息法ニシテ信用ス可キモノ甚ダ尠キコトハ衛生局ノ報告ニ自ラ明ラカナリト雖モ其報告中（無効ノ者大率十
者ナリトス

ノ八九ニ居ル）トアル文詞ヲ以テ之ヲ見レバ強チ賣藥モ無効無害ナル者ノミト云フ可カラズ殊ニ被控訴人ガ提供
スル甲第十一號證ニ據レバ已ニ近年免許ヲ受ケタル賣藥中ニ劇藥等若干配合スル者アリ若シ之ヲ茶ノ如ク濫用ヲ
爲シ或ハ之ヲ水ノ如ク過重ニ服セバ恐ラクハ時トシテ瞑眩スル者アラン果シテ瞑眩スルノ害アル者ナレバ病ヲ治
スノ効モ亦ナキニ非ズ且官廳ニ於テモ之ヲ検査ノ上藥劑タルノ故ヲ以テ其發賣ヲ許サレタルモノナレバ設ヒ數萬
ノ賣藥中或ハ其効能著シカラザル者アリトスルモ藥劑ハ自ラ藥劑ニシテ概シテ之ヲ水又ハ茶ト同視スルヲ得ザル
者ナリトス

凡ソ名譽ハ無形ノ財産ニシテ殊ニ貴ブ可ク且養フ可キ者ナルガ故人ノ行事又ハ物ノ良否ニ論ナク妄ニ之ヲ讒毀
スルハ固ヨリ善ミス可キモノニ非ズ若シ之ヲ毀損スレバ隨テ害ヲ生ズルハ最モ賸易キ道理ナリ然ルニ控訴人ハ時
事新報第二百二號ノ欄内ニ太政官第五十一號布告ト題スル一案ヲ掲ゲ（賣藥ハ云々無効無害之ヲ服スルモ可ナリ
服セザルモ亦可ナリ水ヲ飲ミ茶ヲ飲ムニ等シク香ヲ嗅ギ胡椒ヲ嚙ムモ同様ノモノニシテ始メテ發賣ノ許可ヲ得ル
モノナレバ名ハ藥ニシテ實ハ病ニ關係ナキ賣物ナリ）ト論及セリ其論文タルヤ果シテ控訴人説明ノ如ク文章上ノ
抑揚ニ出デ或ハ課稅上ノ美學ヲ評シタルマデニ止リ賣藥營業者ヲ讒毀スルノ故意ニ出タルニ非ズトスルモ今夫レ
時事新報ハ世人信用ヲ措ク屈指中ノ者ニシテ其文中餘サズ漏サズ賣藥ハ水ヲ飲ミ茶ヲ飲ムニ等シクト論ジアルヲ
以テ之ヲ見ルモノ或ハ水又ハ茶ト一般ノ如ク解スル者ナキヲ保チ難シ然レドモ天下ノ廣キ人民ノ多キ家毎ニ說キ
人毎ニ論ス能ハザルヲ奈何セン之ヲ以テ被控訴人等ニ於テハ將來ノ害ヲ恐レ只一項ノ取消ヲ求ムルニ過ギザレバ
控訴人即チ新報編輯者ニ於テモ例ノ如ク之ヲ廣告スル焉ゾ難キコトアラン速ニ其需ニ應ジ被控訴人等ヲシテ其營

業ニ安著セシムルヲ以テ穩當ナリトス

前二項ノ理由ナルニ由リ結局始審裁判ノ如ク履行スベキハ當然ナリトス然レドモ其廣告日數ニ至テハ初メ被控
訴人ニ於テ五日間取消ノ廣告ヲナサシメント起訴シタルモノニシテ今尙五日間ノ廣告ニテ賺足スル旨自陳スル所
ナレバ被控訴人供述ノ如ク五日間廣告スルヲ至當ナリト判定ス
但シ控訴入費ハ各自辨タル可シ

東京控訴裁判所

明治十六年九月二十七日

判事 山口 豐 誠
判事 今村 信 行
判事 由布 武 三 郎

元來新報の記者は學問上の理を根本にして議論したる積なれども兎に角に再度の敗北とは誠に以て面目なき次第な
り此裁判も不服なれば尙又大審院を煩はすに至る可し勝敗は固より期す可らず或は三敗することもあらんかと思へど
も訴訟の勝負は一新聞紙と賣藥屋との關係なれば先づ之を區域の狭きものと致し爰に我輩が裁判の終末如何に拘はら
ず廣く世間凡俗の爲に賀す可きものありと信すれば聊か其次第を述べざるを得ず抑も人間社會は智愚相半して組織す
るに非ずして或は愚の多數より成ると云ふ可き程のものにして其愚の弊害學て云ふ可らざる中に就ても最も憂ふ可き
は輕信の一事なり天を信じ地を信じ淫祠を信じ加持祈禱を信じ甚しきは毒物の無毒なるを信じて害を蒙る者さへある
世の中に賣藥の如きは人の病を癒やすの名を以て其功能書を書き並らべ其店を廣大にし其看板を金にし凡俗の看る所

先づ其外面に膽を奪はれて之を信ぜざるを得ず何ぞ學問上の眞理原則如何を顧るの迫あらんや然るに其發賣する正味
の品物を尋れば右判決の文に載せたる文部省の報告に免狀を與ふるは只其害なきを保つのみにして其藥を以て有效の
良劑と定め之を世に證するに非らずとあれば賣藥の官許あればとて其藥は必ずしも效能あるものとの證據を得たるに
非ず又同文衛生局の報告には無効の者大率十の八九に居るとあり又賣藥検査心得書にも同様の文字あり即ち賣藥十品
の中八九品は丸で無稽にして效能なしとの意ならん又同文「ピットル」の廣告中に世の賣藥は俗眼を眩惑するもの十
の八九にして其實は功も無く亦害も無きに過ぎざるのみとあれば「ピットル」を賣る賣藥屋も仲間の實情をば明に知
たることならん

右は官府にて醫學の根本に據り厚く注意せられ又賣藥屋も深切に世間に告げて賣藥なるものは大概皆病に功能なき
ものなりとの事を知らせたるものならんと雖ども社會の廣き人類の多き能く是等の意味を了解するもの少なきは誠に
嘆ず可き有様なるに幸にも今回時事新報と東京の賣藥屋との間に詞訟の事起りて之が爲に舊き文部省の報告、衛生局
の報告、賣藥検査心得書より些細なる「ピットル」の廣告に至るまでも公然たる公判の文面に上りて之を再び世に公
にするの機會を得たるは畢竟今回詞訟の蔭なりと云はざるを得ず時事新報の敗訴は實に氣の毒なれども我輩心事を轉
じ身を局外に置いて考れば天下公衆の爲には事の成跡を賀せざる可らず苟も事物の道理を辨じて官府が醫學上に注意の
厚きを知る者ならば今後自身衛生の爲に大に戒る所ある可きなり（明治十六年九月二十八日）

學者の議論

眞理は行爲の準繩なり原則は所業の規矩なり去れば社會の人々をして其行爲を正しきに導き其所業を誤りなきに近づかしめんと欲せば常に其眞理原則を世上に顯彰し世人の恃で以て標準となすべき所を表示せざるべからず而して之が任に當る者果して誰ぞ乃ち世の所謂學者其人にあらずや蓋社會なる者は之を自然に放任し敢て人爲の方便を以て其發達を促がざるも常に幾分か進歩改良して漸く文明の佳境に進入することならんと雖ども若し之が先導者ありて一切萬事社會に先鞭を著け改むべきの弊習は速に之を改めんことを極論し探るべきの美風は直に之を用ひんことを主張し消極に積極に社會の改進を促すことあれば自から其進歩駸々乎として又之を自然に放任したるが如くならざるは古今欺くべからざるの事實にして又争ふべからざるの眞理ならん而して已に進歩の惰力を得たる文明國に於ては自から學者の勸告も其勞力薄きに似たりと雖ども尙ほ前途遼遠なる半開國の如きに於ては何には扱置き學者の先導こそ最も頼母しく其社會進歩に效を奏する又他に比すべきものなしと云ふも敢て不可なかるべき次第なれば斯かる國柄に於ては別して學者の議論を大切にせざるべからざるものなりと知るべし

抑も社會は多數の愚者を以て組織せられたるものにして公議と云ひ輿論と云ひ未だ必ずしも眞理を含有するものにあらず否な其幾分を含有するも未だ必ずしも其全體を含有したるものに非らざるなり去れば世の眞理公道なる者は却て其公論に反對したる少數の異説に在て存すべきやも計り知るべからざるのみか古來其多數の輿論に抵抗したる異説こそ大に眞理に適合して社會に新發明を爲し洪益大利を貽したるの例甚だ乏しからず其最も睹易き例を擧ぐれば彼雷

鳴を以て越歴力の作用としたる「フランクリン」の如き蒸汽を以て有用の力としたる「ワット」の如き皆是れ千古の輿論を破り萬代不易の眞理を顯彰したるものなり其他政治學上に醫學上に機關學上に其學問の種類は如何があるも苟も新奇の理論を唱て古來の宿夢を攪破したる學者は皆其當世の輿論に抵抗し多數の公議に反對したる者にあらざるなく或は爲めに其身を危くしたるものあり又遂に其命を失ひたるものなきにあらず去迎は其本人には氣の毒の至りにして其未だ會て世上に知られざる眞理を社會に表示して其進歩を促したるの效に至ては千歳の下、後世の人深く謝せざるを得ざるものあるなり然らば則ち猥りに奇怪の説を唱て爲めに社會の安寧を紊亂し公衆の方向を誤らしむる等法律の範圍に於て之を咎めざるべからざるものは暫く擱き苟も其範圍外に逍遙する以上は如何に社會公衆の輿論に反するの異説なりと雖ども決して之を制止せず充分に其唱ふる所を逞うせしめて以て其果して眞理に合するや否、果して社會を益するや否は之を後來にトせざるべからず若夫れ唯其當世の風潮に格合せず公衆の輿論に背くの故を以て忽ち異端なり邪説なりとて之を排斥するが如きことあれば又何の時か眞理の社會に顯彰するの機會あらんや學者言論の區域を自在にせざるべからざること益昭然たりと云ふべし

然れども茲に學者に取て最も痛ましきことありと云ふは他なし凡そ人の智を測る者已れ亦智無んばあるべからず智者獨り能く智者を知り愚者の仰で智者と爲す所の者は亦必ず愚者に非らざるなしとは西哲某の名言なり去れば多數の愚者を以て組織せられたる社會の中心に於て少く新奇の議論を呈出し世人の迷夢を攪破せんと欲する者あれば必ず彼れ愚者なり狂者なりとて嘲笑罵詈すること古今の通常なれば學者苟も其一世の弊風を矯正せんと欲せば豫て周圍の攻撃を待設け世の嘲笑を甘んずるの覺悟なかるべからず學者の辛苦も亦大なりと云ふべし然れども社會の不明なる學者

をして此覺悟を抱かしめ此辛苦に堪えしむ尙ほ恕すべしと雖ども其公明正大なる心を以て社會の弊風を極論したるを見て其弊風中に呼吸する輩が若しも之を矯正し論破せらるゝに於ては大に自家の利害に影響を及ぼす可きを恐れ弊風の流行に乗じて學者の議論を抹殺せんとし或は之を法衙に訴ふるが如きことあらば學者を蔑如するも亦甚しと云はざるを得ざるべし若し夫れ斯かる惡例の社會に行はれ學者公明の議論を以て法廷の疑問に附するが如きことあれば學者の一言一句は常に裁判沙汰となるの奇觀を呈し遂には學者其心に於て如何に社會の弊習を破り世人の誤見を匡さんとするも敢て之を世上に公にするを厭ひ折角の學者も世に用なきに至るのみならず社會は爲に暗夜燈を失したるの有様を呈して其進歩も自から遅々するに至らん去ては心細き事共にあらずや今や我國漸く將さに文明の佳境に入らんとす即ち尙ほ政治上に社會上に改良すべき事の數多き世の中なれば成るべく學者の言論を自由にして其勸告を求めざるべからざるの時なり去れば我國に於ては故らに其學者の議論を尊で法律の間ふべき限りにあらざる以上は之を自由に放任すること甚だ肝要なるべきに未だ我國の不文なる兆しにや兎角之を輕蔑するの風ありて學者をして其言論の區域を縮小せしむるの傾きなきにあらず我輩は今日の學者學て其言論を逞うするも尙且つ其少數にして勢力の強からざるを憾むものなり況して此少數なる學者をして充分に其議論を放たしめざるの傾きありと云ふに至ては我輩國家の爲に歎息せざらんと欲するも得べからざるなり(明治十六年十月六日)

醫師規則の布告を讀む

第一

本月二十三日太政官第三十五號の布告を以て醫師免許規則を制定し明治十五年二月第四號布達同年八月第三十九號布告は之を廢止し又同日第三十四號の布達を以て醫師開業試験規則をも定められ明治十二年二月内務省甲第三號布達は廢止する旨を示されたるは我輩に於て之を賛成するのみならず此布告布達は即ち我學問の榮譽として天下の爲に祝せざるを得ず蓋し醫術試験の精神は新舊規則相照らして大同小異なれども舊規則は内務省の布達に係るのみなりしかども今回の新規則は奉勅の布告にして萬世の法律なれば其輕重明に見る可し此法律を遵奉するときは多年を出でずして我醫學社會の面目を改め日本國中古法の不學醫流は地を拂て跡を絶つことならん和漢數千年來の宿弊爰に始めて除去したるは假令ひ醫學の一項にても我日本政府の美學なりと云はざるを得ず

凡そ人生に去り難きものは懷舊の念にして社會に除き難きものは多年の慣行なり畢竟人情に基づくものにして其情時としては理を談する人の明を掩ふて自から理を談しながら事に臨めば却て自から其理を抹殺するものなきに非ず況や初より理を知らず又理を蔑如する者に於てをや滔々たる不學の天下情海の舟に漂はされて道理の楫なきもの中の八九、學理の行はれ難き亦謂れなきに非ざるなり聞く所に據れば方今全國醫師の數凡そ四萬人これを全國の人口に配當すれば人口八百八十人に付醫師一名の割合にして之を西洋諸國の比例に對するときは英國は人口千六百七十人に付醫師一名、佛蘭西は千八百人に付一名、獨逸は三千人に付一名、米國は六百人に付一名とあるからには日本の醫師の數は米國に比して僅に少數なれども英佛等より見れば倍數よりも多し斯の如く醫師の數は多けれども其性質如何を尋るに從來の開業醫師と稱する者の中にて之を區別すれば

西洋方醫

八千四百四十名

醫師規則の布告を讀む

漢方醫

一萬九千五百五十名

雜方醫

四千七十名

詳ならざる者

五百八十名

此外に口中醫産科眼科又は整骨家など云ふ者を計ふれば千五百六十名に下らず

又此外に成規の試験を受け或は卒業證書所持の故を以て内務省の開業免狀を得たる者の數二千八百二十名あり

又明治十五年三月内務省乙第十四號の達に従來開業醫の子弟にして其助手と相成居醫業を以て家名を相續し年齢當明治十五年六月滿二十五年以上の者に限り従來開業醫と看做し試験を要せず開業許可の證を與へて不苦の特令に由り開業したる者も無慮三千名の數ありと云ふ

以上醫師の數を共計すれば凡そ四萬の數と爲り此中に就て従來開業の者八千四百四十名と内務省の開業免狀を所持する者二千八百二十名と合して一萬千二百餘名は先づ之を西洋醫流として見る可しと雖ども内務省乙第十四號の達に由て家名を相續したる者の如きは開業試験を受けるを好まず又は之を受けるを憚る者にして多くは古流の醫師なる可ければ之を洋醫の中に算入す可らず依て四萬の中より一萬千二百を引き残りの二萬八千八百は古流の漢家に非ざれば則ち雜方雜科醫にして今日西洋開明の眼を以て見れば尙未だ醫學の眞理域内に入ざる者なり日本の醫師其數多しと雖ども醫學の區域は甚だ狭きものと云ふ可し

右の如く全國に古流の醫師甚だ多く之を信する者も亦甚だ多くして病に罹れば醫師を招く其醫師は則ち古流の漢家にて曾て疑を容るゝ者なし甚しきは醫學の新古醫術の巧拙を問はずして父祖以來出入の醫家なりと云ひ或は某醫は

自家の親戚なり己れの朋友なりとて治病に縁なき他の關係を以て病を托する者なきに非ず畢竟當局者の不學に原因するとは雖ども數千百年來我國の舊慣醫學を視ずして寧ろ醫師を親しむの痴情に生じたるものより外ならず是に於てか其醫師なる者も醫學の研究に兼て又實際の法を研き患者に接するの容體、家人に應對するの風彩等都て言語坐作の外を勉め其極端を擧れば唯外面の事に忙はしくして裏面の醫學を忘るゝ者ありと言はるゝも辨解に窮するの場合ある可し斯る内實の有様なれども流行家は舊に依て流行して自から得意の顔色を爲せば凡俗又これを許して疑はず情海楫なきの舟に乗り又これを載するものと云ふ可し實は醫師を咎るよりも世間の病家たるものが今少しく精神を高尙にして學理の貴きを解し醫を擇ぶの法を重んじたらば醫學の進歩も速ならんと思へども吾に凡俗のみならず今日文明社會の表面に立て人事を憂ひ世務の魁を爲すと稱する人にして學理の一點に至ては凡俗に等しき者なきに非ず醫學進歩せんと欲するも得べからざるなり然るに今回第三十五號の布告并に第三十四號の布達は古俗舊慣の如何に拘はらず法律上に於て數年の後は我日本國中に不學醫師の跡を絶つ可きものなれば我輩は學問の榮譽のため國民の幸福のために之を賀せざるを得ざるなり

第二

前節に記したる如く我國に於て古來醫師と病家との關係は情を以て成るものにして醫師も學理の貴きを知らず病家も醫師を擇ぶの法を知らず其餘弊は遂に天下の醫をして唯舊套に安んじて日新の進歩に後れしむるに至れり即ち今日世に學醫の少なき由縁なれども人情舊を忘るゝの難き目下の急務に迫りても尙漢方醫流の前途を憂て其法を永年に維持せんと欲する者なきに非ず惑へるの甚しきものと云ふ可し我輩素より醫事に不案内なりと雖ども醫師の言を聞くに

漢醫に古方家、後世家、雜方家の三あり古方家は専ら扁鵲仲景の遺法に従ふものと稱して所謂萬病一毒の説を執り金匱傷寒論の方劑を墨守して治療の手段は攻撃を主とし病を攻ると稱して劑劑を賞用し後世家は宋末元の時代の醫風に於て特に陰陽五行の説（此種の醫論は西洋にても今を去ること二千餘年彼の紀元前には「ギリキ」に行はれたることあり）を唱へて萬病は一元氣に歸すとて補元通氣の療法を主とし藥劑には人參黃耆等其效用恰も今の「コッフヒー」の如きものを賞用して之を溫補劑と名づけたり即ち古方は進で病を攻るものにして後世家は退て元氣を守るの主義ならん我國にて後世法の行はれたるは慶長元和以後のことにして一時は大に流行したれども元祿時代に有名なる吉益東洞なる者出で醫學の復古論を主唱して更に扁鵲仲景の道に溯り萬病一毒と稱す即ち古方の名の由て生ずる所なり又東洞に先だつこと幾年後藤良山など云ふ醫師は扁鵲仲景と唐以後金元の醫風を參取してか自ら一門流を作る之を雜方家と稱す今の漢醫は此雜方に由るもの多しと云ふ或は然らん歟、斯の如く漢醫流の系統一ならずして各分派すと雖ども其日常依頼する所は何れも皆金匱傷寒論素門靈樞等の數本より外ならず此諸書は上世聖賢の遺經と稱して漢醫の特に尊崇する所のものなれども如何せん今日文明開進の世に居て之を物理の眞理原則に照らし看るときは書中の言殆ど漠然として取るに足る可きもの少なし元來醫の目的は人身の變常態を常態に復らしむるに在るのみにして其人身は即ち有形の實物なり既に有形の實物とあれば其物に固有の性質を備へざるはなし其性質の働は手以て觸る可し、耳目以て聽視す可し、權衡以て量る可し、算數以て計る可し、即ち解剖生理學察病學の司どる所なり其性質を知れば又これに接するの外物なかる可らず即ち空氣光線水火藥物等是れなり何れも化學範圍内の物にして其藥料のみに就ては之を藥物學と云ふ即ち醫家に化學藥物學の必要なる所以なり斯の如く人身の百器百官一々實形に就て其常態と變常態とを

識別し果して常を變ずる所のものありて之を千萬人に示すも曾て疑なき程の實證を押へ乃ち之に應ずるに外物を以てす所謂藥劑是なり故に醫術は純然たる實理學にして須臾も有形の範圍を脱す可らず唯今日の文明に於ては尙未だ其妙奧佳境に至らず窮理の半途に彷徨して醫道の全面を實にするを得ざるを嘆ずるのみ即ち醫師が寢食を忘れて日新學に汲々する所以なり日新又日新三十年前助間對神經の十二は今日共十對なるを發明し五十四原素は六十と爲り又六十四と爲る（原素の數も學術の次第に精密を致すに従て次第に増減し方今六十四原素と云ふ其内三十七は千八百年後の發明なり學術日新の狀況は此一事を見ても知る可し）其變化は實物の變化に非ずして人智の進歩を證するものなり去年の奇妙は今日の常談と爲り今日の新發明は明日の陳腐たる可し學歩驟々留て駐まるを知らざるものなり然るに彼の金匱傷寒論素門靈樞とは抑も何ものなるや果して聖賢の遺書ならんと雖ども其聖賢は千百年前の人物にして書中の言時として眞理に適するものなきに非ざるも嘗て實物の以て證す可きなし實證なきの言は假令ひ理に中るも圖らざる偶中のみ人或は云ん漢方にも煉丹の法あり即ち化學なり易經あり即ち理學なり又靈樞の經水篇には其死可解剖而視之の語あり漢家自から實理の傳なきに非ずなど云ふ者あれども畢竟するに牽強の説にして一も今日の實用に適す可きものなし之を譬へば老儒が書經の中に利用厚生四字あるを恃にして經書に「ポリチカル、エコノミー」（今日の經濟學）を説くものありとて之を誇稱するに異ならず書中偶然に三五の文字あればとて其義を詳明するものあらざれば何の用に適す可きや無用の字句たるに過ぎず左れば今の漢方醫が金科玉條として拜崇する古聖賢の遺書は何程に之を研究するも今日文明の醫學社會に於て直接の實用を爲すに足らず其趣は儒者が萬卷の漢籍を讀むも之と共に今日の治國平天下外國交際の事を語るに足らざるが如し即ち今回の布告醫術開業試驗法の精神も純然たる文明日新學理の主義に出たる

ものなれば從來の漢方醫師に於ても大に思考する所なかる可らざるなり

第三

或人云く今回政府にて布告せられたる醫師免許規則の精神は全く日新文明の學理に出たるものにして道理に於ては間然す可きなしと雖ども醫術も亦是れ一種の營業渡世なり目下全國の漢醫は其數、萬を以て計ふ各其業を營で生計を立る者なり然るに今其主として依頼する所の學術は日新文明の用に適せずとて之を擯斥するときは文明の爲には則ち可ならんと雖ども左りとては彼等の生計を如何せん且又漢方疎漏なりと云ふも其法悉く理に背くにも非ず自から取る可きものもあらんれば其取る可きを取るが爲に之を保存するは妨なきのみならず却て醫學の材料を富ますの理なれば漢方醫學廢す可らずとの説あれども我輩は之に同意を表するを得ず第一の故障漢醫の生計云々は今日の實際にある可らざることなり我政府は俄然漢方醫を禁じたるものに非ず従前の開業醫を其まゝに免許したる其上にも情實を察し昨年の特に内務省乙第十四號の達を以て醫師の家名相續人二十五年以上の者には不要試験開業を許すとまでの寛典を示されたることなれば明治十五年六月滿二十五歳の醫師なれば漢方にては雜科にても生涯其營業に妨あることなし或人の説は過慮なりと云ふ可し苟も其年齢以下の者ならん歟、奮て自から眞成の醫學に従事す可きのみ試に見よ今の天下の洋醫なり又洋學者なり果して何者の子にして何れの路より學の門に入りたるや百中の九十九は漢醫漢學者の子に非ざれば漢學流行の社會に生れて其身亦少小時には漢書を読み漸く長じて始めて洋學の門に入り遂に或は醫と爲り或は學者と爲りたる者より外ならず即ち漢學を變じて洋學と爲し縱文を見るの眼を以て横文を解する者なり日本國中先天の洋醫洋學者なしと云て可ならん左れば今漢醫家の子弟二十五歳以下の輩は春秋正に富み正に學問に勉勵す可き

の齡にして世々遺傳の能力文事の資に乏しからず一朝志を起して學の門に入るときは期して其成業を待つ可きこと日を觀るよりも明なり洋醫の學問決して難きに非ず僅に三五年の時を費すのみ尙に此輩が家に居り又師家に執行する様を察するに洒掃應對丸藥の製造より漸く進で調合代脈を勤め其餘暇に醫學を研究するは無論經史百家の書、詩文書畫をも學ぶの慣行にして夫れ是れの成業には少なくとも六七年を要することならん故に今醫術開業試験規則の科目に就き物理解剖外科藥物等の諸學を學ぶには前後三年にして試験の課程を終る可きなれば或は却て速成の道と云ふも可なり經史詩文固より無益に非ずと雖ども醫家本業外の事にして一種の遊藝たるに過ぎず遊藝に等しき文事に貴重なる青年の日月を費して文明實用の學問を忘るゝが如きは輕重の別なき者ならずや漢醫家の子弟大に自から顧る所ある可し又老大の漢醫に至ては非常の勇氣ある者に非ざるより以外は其業を改ること固より難し人生の心事は老て益堅固なること即ち人心學の定則なれば我輩は敢て此流の老先生に向て改業を責るに非ざれども唯願ふ所を云へば諸老先生の事業は唯數十年來幾千萬の患者に接して其病床に得たる自然の手續を以て今後も好き様に病人を取扱ひ假令ひ進歩新發明の偉功なきも大なる誤謬に陥らず自から世益萬分の一を致して以て殘年を終るの覺悟を定め顧みて後進の少年子弟に向ては大に後來を警め一日も早く日新眞成の醫學に入るの要を説諭せられんことなり此一事は我輩獨り老醫に求るのみならず老儒老武人に向ても一様に冀望する所のものなり我開國以前に在ては儒學固より貴し、武道亦大切なり經文緯武は我國體と稱して儒教の文と弓矢槍劍の武とを以て日本の治國平天下を致したることなれども外國交際の開けたる今日に至ては其文其武共に實用を爲すに足らず唯願ふ所は此老儒老武人が自身をば世事の局外に置き只管後進の者を獎勵して日新實用の實文實武に誘導するの一事なり老大の身を以て日新の變化を觀察すれば耳目に快からざる

もの甚だ多し其情態は世界萬國同様にして殊に我日本の如きは僅に二三十年間に社會の根底より變動したるものにして其變動の際にも重ねて西洋の新文明に促されて又再變を要し再三再四實に際限ある可らず現に十數年前王政維新の頃には斷然舊套を脱却して日新文明の魁を以て自から許したる人物にても少しく油斷すれば忽ち時勢に後れて十年前の事も今は舊視せらるゝ程の有様なれば況して文政天保の故老先生に於てをや其不愉快は察し入る所なれども唯我日本國の爲と思ひ枉げて時勢に従はざるを得ず是れ我輩が今の老儒老武人に向ひ殊に今回は彼の老醫に懇願して思慮を煩はす由縁なり

又第二に漢醫學中自から取る可きものもあらんとの説は實に然り金匱傷寒論以下の書必ずしも荒唐無稽の説のみに非ず間ま或は眞理に偶中したるものもあらん之を譬へば從來日本の船大工が船を造り船頭が渡海するにも自から傳授の法ありて或は今の造船航海の學理に適するものあるを見るが如し殊に藥劑物の如きは漢家に用る所のものも能く能く之を化學分析の法に掛けて性質を詳にしたらば果して大に利する所もあらん醫家の最も等閑にす可らざる部分なれば苟も漢醫の書とあれば之を燒棄て漢藥の類は一切不用なりと云ふ可らず漢醫書も講讀す可し漢藥も吟味す可しと雖ども是等の講讀吟味は先づ醫師の本分たる眞成の醫學を學び得たる後の事にして俗に云へば醫師たる者が心得の爲に古き漢方をも詮索して醫術の補助と爲し或は新發明の鍵にも用ひんとするまでのものなり如何なればとて未だ本分の醫學に入らずして先づその補助を求む可けんや造船航海の學士が未だ其學を學び得ずして先づ船大工と船頭に謀るが如く又日本國中造船の術未だ治ねからず航海の法未だ廣からざるの今日に於て舊大工舊船頭の集會を設けて大に討議するものゝ如く又國中西洋學の未だ開けずして眞成の學者に乏しき今日に於て特に漢學大學校を設立し支那一國の經

傳を講じて其道を保存せんことを謀るものゝ如し事物の輕重前後を失ふものと云ふ可し然りと雖ども人心は存外に柔なるものにて世間一時の風潮、西洋より吹き戻りて漢の方に反流せんとするが如き天氣に際すれば彼の醫師の心得又は漢方を補助に用る等の口實を設けて其内心は兎も角も外面に不可思議の舉動を現はす者なきを期す可らず此流の人は果して何を信するものなる歟其安身立命の道は何れの邊に在る歟我輩に於て屹度承はり度き所なり今回醫師規則の布告は政府に於て醫學萬代の基礎を固くして學問の方向を一定せられたるものなり抑も學者にして其道の方向を政府に指示せらるゝが如きは赤面の至ならずや苟も道心あらん者は政府に愧ぢて爾後を慎み確乎不拔益其志を堅固にして醫術に勉勵せられんこと我輩の冀望に堪へざる所なり(明治十六年十月二十六日より同月二十九日に互る)

身體を大切にすべし

諺に命ありての物種と言へることあり命なければ世の中に於て萬事萬物一も之を處理すべからずとの意味ならん如何さま人は命ありての人なり命なければ人にあらず人にして苟も事を爲さんと欲するには是非とも其命なくては叶はぬことなりとは云はでも知れた道理と云ふべし去れば凡そ人にして多く事業を仕遂げんと欲せば先づ其命の長からんことを祈らざるべからず長壽は萬業の源と云ふも敢て不可なきが如くなれども唯長壽のみにては餘り目出度しと思はれず如何に其命長きも常に虛弱病身にして一人前の仕事さへ覺束なき時は所謂生き甲斐のなきものにして世の厄介者なり寧ろ早く死するの愈れるに如かず乃ち單に命の長きは必ずしも之を望むべきにあらず之を望むと同時に其身體の健全をも併て之を祈らざるべからずとは今更我輩の多辨を要せざる所なるべく健康なる長壽と云へば誰しも不同意

なきことならんと信するなり

扱其健康なる長壽を遂げんには如何して可なるかと言へば唯常に身體を大切にするより外なし身體を大切にすることは固より種々の方法ありて存す曰く運動を怠らざること曰く食物を精撰すること等皆是れ身體を大切にする方法なるべしと雖ども我輩は身體を大切にすることの策尙ほ大に他に在て存すべきを知るなり抑も人間の身體なる者は造化の妙巧種々様々の機關相連絡して組織せられたるものにして一朝病の發するや其關係する所甚だ大に甚だ廣し去れば一病一症之を診斷すること決して容易にあらず實は名醫國手も唯其實驗と病理と相對照して想像上より病名を定め藥劑を投ずるのみ果して其正鵠を誤らざるや否は始より之を斷定し易からざる程の次第にして固より素人が早合點に病氣の性質を見定め其藥を投じて其當を得べしとも思はれず或は素人の見て以て輕症となす所醫師の診察に依て始て其重症に驚くことあらん醫師の診斷以て微恙となす所其當人は前きに大患として大に之を恐れたることもあらん殊に病は必ずしも一定の方向に従て運動するものにあらず時々刻々變動變化して朝夕其容體を同うせず昨今其病狀を異にして暫くも同一の有様に靜止すべきものにあらざれば素人考に其病を速斷し或は已に其病性の變じたるをも辨へずして數日の久しき同一の藥を投じて遂に不治の大患に沈むことあるべし杯恐ろしき理由の存するに於ては益以て病の診斷は決して容易ならざることなりとの道理を發明するに至るべし畢竟餅は餅屋丈け醫者は自から病氣の診斷に熟練して専ら其道に依て一世を渡るものなれば人々一朝病を發して先づ頼むべきは醫者なり醫者を捨て、又他に頼むべきものなし醫者の未だ存せざる世の中なればいざ知らず苟も之ある以上は世人病を發せば必ず其診斷を受けざる可らざる者なりと知るべし

身體を大切にするの策、病氣の時に方て猥に自分療治を爲さず直に醫者を招て其診斷を求むるに在りと雖ども而かも尙ほ他に一策の在て存するなり蓋し世間凡俗の考にては醫者は唯病の時にのみ要用なるが如くなれども我輩の所見にては醫者の職分たる必ずしも已に發したる病氣を療治するのみに限らず將に發せんとするの病を未然に防ぐも亦是れ醫者の本分にして取りも直さず醫者は二重の役目を司どる者なり乃ち一は積極已に發したる病症を抑制し一は消極未だ來らざるの病を防遏せざるべからざるの責任を有せり此二重の職分を盡してこそ眞に國手名醫の名にも愧ぢざるべけれ醫は唯病を療せば則ち可なりと言ふが如きは寧ろ陳套の笑を免かれざるべきなり殊に凡そ事物の正當を證據立つるには其反對の顯像を照合すること甚だ肝要なりとは西人某の名言にして例へば彼算術に於て加算の誤なきを證せんには試に其反對なる減算を以て一旦其數を以前の數に戻し乗算の正答を得んには其反對なる除法を以て更に其得數を割戻すが如きは反對の結果を見て答數の正確を保證するの法なり今醫者にして人の病氣を診斷せんには常に其人の平時の容體、健全の有様等を知悉するに如くものなし畢竟平時の有様を知らずして非常時を處せんとするは甚だ難きことなれば醫者たるときは其病狀をも能く辨知するを得べきなれ常時を知らずして非常時を處せんとするは甚だ難きことなれば醫者は病人を診斷して苟も誤なきを期せんと欲せば常に其人の平時の有様如何に注意すること頗る肝要的のものなるべし然れども此事たる獨り醫者に向て注意を促がすべきにあらず我輩は廣く世人に向つて省慮あらんことを希望するものなり蓋し今日世上の人は已に命の物種たるを知り健康なる長壽の甚だ望ましきことなるを知り身體運動の忽せにすべからざるを知り食物の精撰せざるべからざるを知り尙ほ自分療治の恐るべくして病は必ず醫者を招て其治を求めざるべからずとの理由を承知しながら一步を進め平時と雖ども時に醫者を招て其身體を檢査せしめざるべからずと言ふに

身體を大切にすべし

至ては殆ど之を顧みざるものゝ如し是れ大なる誤謬のみ何となれば前節にも云へる如く身體の機關は甚だ繁雜なるものにして其小部分の不例と雖ども或は如何なる大影響を全體に有するや殆ど計るべからず殊に素人考に微症と心得たるもの一朝醫者の診断に遇て不治の大患たるを知るの例さへ少なからざれば平素其身心共に活潑にして頗る健全なりと自信するの時と雖ども折々醫者を招て其身體を検査せしめ他日或は發病の時に方て其醫の參考に供する所あらしむべし是れ苟も身體を大切にするものゝ忽せにすべからざる所にして我輩の特に世人に向て注意を乞ふ所以なり世人果して身體の尊むべきを知らば自分療治の恐るべきを曉ると共に平時病時一切身體の事は醫者に依頼するの覺悟あるべきなり(明治十六年十一月十五日)

我國普通の洋學は英語に歸す可し

第一

西洋の文書を學び西洋の言語に通ずるの緊要なるは前日の紙面に之を記し讀者も必ず我輩と所見を同うして後進の學者は爾後益奮發して餘念なく洋學に従事することならんと信ず扱洋學に志を起すとして西洋各國其文を同うせず言語亦相互に異なり故に一概に西洋學勉強と云ふも其西洋は何れの國の文を學で然る可きや英か佛か獨か露か尙この外にも伊太利あり西班牙あり荷蘭あり葡萄牙あり我日本國人が洋文を學ぶに此數ヶ國の内何れを擇ぶ可きや大に思案を要する所のものなり

右の問題に付き我輩の所見を陳べんとするには讀者をして先づ左の二項に注意せしむること緊要なり即ち

第一 洋學に従事せんとする者は日本國と西洋諸國と相對して關係の最も廣くして大切なるものは何事に在るや之に注意せざる可らず

第二 人生の學業は中途にして廢するも其中途まで學び得たるものを利用して其勉強の勞力を空うするなからんとに注意せざる可らず

抑も我日本の國柄を視察するに西洋諸國と交際を開き之と並立し之と競争し國權を擴張すと云ふと雖ども虚心平氣獨り沈黙して其方便を求めたらば果して今日大に恃む可きものを得て世界に威福を行ふ可きの實ありや我國素より武國なりと雖ども其勢力尙未だ歐米諸國に達せざれば之を威するに足らず我國素より不文ならずと雖ども文明を學ぶこと日尙淺くして未だ以て世界の文壇を專にするに足らず文武共に唯進歩の最中にして前途の目途乏しからずと雖ども此文武を進るの基本は内國の殖産外國の貿易に在ることにして苟も國の文明を促がして國權擴張の佳境に入らんとするに殖産貿易の大切なるは固より論を俟たざる所にして目下日本の國勢に於ても殖産貿易の道は次第に進歩して漸く外國人の注意を惹くものゝ如し例へば開港の初に在ては我輸出入の金額僅に數百萬圓に上らざりしものが漸く増して近年幾千萬圓に達すれば彼等が日本を重んずるの情も正に其金の數に應じて増加し今後幾十年の間に我貿易の數に幾十倍を増すときは外國に對して我國の品格も亦幾十倍を加へ多々益我國權に利する所のある可し故に内地の殖産外國の貿易は直接に國權の重きを致して間接には其利益を以て文武の資に供す可きものなれば我前途の目的は唯應に殖産貿易を勉強して世界萬國に對し東洋の一大貿易國として名聲を張るに在るのみ即ち我國柄にも相應し民情にも適し最も無毒有益の策にして苟も西洋諸國と並立し競争し隨て國權擴張の基本を立てんとするには先づ我日本國をし

て純然たる貿易國たらしむるの外に方案ある可らざるなり

我日本國前途の目的は先づ東洋の貿易國たるに在り既に自から貿易國と覺悟して目下東洋の貿易に關係の最も洪大なるものは何れの國民なるやと尋るに英國人民と答へざる者はなかる可し之に次ぐは米國人にして而して此英米の兩國は言語文書を同うし其國語は數百年來世界中の貿易國に通用して凡そ地球上船舶の到る處に英語の行はれざる地なし英語とは本と英國の語なるが故に斯くは名けたれども今日に於て之を用るは必しも其本國の人に限らず世界貿易の市上に普通に於ても萬國共同のものなれば或は之を貿易通語又は萬國通語と云ふも可ならん其事實を知らんとらば遠く他の海國に行くを要せず現に我日本の開港場に於て實況を目撃す可し大に輸出入の貿易に關する者は英米の商人に多く銀行も郵便船も大抵は其所轄に屬し居留人民の數の多きのみならず居留地一般に行はるゝ通用の言語文書も皆貿易語（即ち英語）を用ひざるはなし居留地内固より英米外の人も少なからずと雖ども日常便の爲には自國の語を廢して無理にも萬國共同のものを用ひざるを得ず蓋し英語の權力に壓倒せらるゝものと云ふ可し斯く貿易上に争ふ可らざるの權力を得て其餘勢は學問にも工業にも波及して之に靡かざるものなし例へば今我國中に文明の新器械を用ひ又は製作場等を設立するにも其物名其用語共に大抵皆英語に基づき又學問に洋學と云へば十中の八九英書を講讀するが如き自然の勢にして之を駐ること能はざるものゝ如し本來我國には百餘年の久しき蘭學なるものありて能く荷蘭の書を読み之を翻譯する人さへ少なからざりしが故に實際の要用唯學問のみに在れば蘭語を以て不自由なき筈なれども開國以來外國貿易の關係次第に繁多なるに従て英語の流行次第に廣く蘭學は遂に之に掩はれて次第に消滅に屬し舊蘭學先生の如きは殘念ながら多年刻苦の學問を懷にして其所用を見ざるに至れり東洋に於て英語の勢力の盛なること

以て知る可し左れば前に云へる如く我日本も東洋の一國にして今後の目的貿易を以て國を起す可きものと覺悟するときは後進の輩が洋學に従事するに當て身の爲にも又國の爲にも先づ勉む可きものは英語の外にある可らず蓋し内外自然の大勢に順ふて逆はざるの法なればなり

第二

前節に云へる如く我日本國に英語の行はる可きは自然の大勢の然らしむる所にして百年來既成の蘭學の消滅したるを見ても其勢の赴く所を窺ひ知るに足る可し左れば佛蘭西學と云ひ獨逸學と云ひ又露細亞學と云ひ其局部に就て見れば何れも必用ならざるはなし學者たるものゝ應さに勉めて怠る可らざるものにして極めて大切なりと雖ども天下の事は大勢に由て進退するものにして如何に其局部に大切なる效力あるも大勢の許さざる所は結局繁盛の見込ある可らず蓋し其大勢とは何ぞや貿易商賣有形の實利にして實利の制する所は天下に敵なし今東洋の諸國に在て佛語獨語の如きは貿易に關係薄くして實利に遠きものなれば今後我外國貿易の次第に繁盛を致すに隨て次第に勢力を失はざるを得ず現に今日に於ても佛語獨語と英語と相對して其所用の廣狹如何を比較したらば英語の用の廣きこと辨を俟たざる可ならん世に需要少なきものは其供給を謀る者も亦少なく佛語獨語の如きは常に局部の人力を用るに非ざれば我國に持續すること甚だ易からず舊幕府の時に蘭學漸く廢滅して英學代て興らんとするは自然の勢にして佛學は誠に寥々たりし其時に幕府の陸軍騎兵組を佛式に倣ふとか稱して大に金を費して佛學を勧めたるより以來暫時佛語の沙汰を聞きたれども幕府の滅亡と共に佛語も亦滅亡したりしが維新の新政府にて陸軍の式を佛蘭西に取ると定められ又文部省にても語學に佛語の課を設け法律も佛の法を參考に供する等の説も流行してより佛語再興の萌を催し又獨逸學は幕府の時

代に殆ど絶無とも云ふ可き有様なりしが維新の後醫學の起るに當り當時舊蘭學醫師が未だ英語に慣れざるの間に世の後進少年輩は早く既に英語を解し英語とあれば老の醫師先生も少年に道を譲るの勢にして去迎は餘り面白からずと云ふ内情もあり又其時には歐洲にて獨逸が塊地利に勝ち佛蘭西を征服し其國勢旭の昇るが如くなりとて之を欽慕するの痴情もあり夫れ是れ的情實に加ふるに獨逸は學國なり醫學理學は其右に出るものなしとて蘭學醫流が故さらに英を避けて蘭より直に獨に入らんとすれば政府も亦其言を納れて醫學の一社會は獨逸學に歸し是れより世上にも少しく此學流の沙汰を聞くこととは爲れり

右の如く佛語なり獨語なり従前我日本に行はれたるは必ず一局部の原因ありて其力に依頼し以て流行の端を開きしことなれども若しも之を其自然に任して顧る者なきこと舊時の蘭學の如くしたらんには逆も今日の面目はなくして全く英語に壓倒せられたるや疑を容る可らず蘭學は我國に成熟すること既に百年其本國の文物技術決して拙劣ならずして我蘭學者も亦當時の人物なり我醫術物理を蘭に學ぶのみならず航海の法も彼の國人より傳習し我海軍の祖師と稱し又我國にて諸外國と締盟の時には何れの國の條約にも必ず荷蘭文を副へて之を證と爲し公文の往復にも荷蘭の譯文を附するを例とせり斯くまでに由緒もあり又實際の關係も深くして彼我相知るの親密なる荷蘭國にして其國の文書言語共に頓に消滅したるは何ぞや今の我國に於て内外の大勢に縁なくして局處に之を維持保護する者なきが故なり然ば則ち彼の佛語なり又獨語なり當時若し局處の維持保護を得ることなかりせば大勢に於て其流行を許さざること殆ど或は蘭語の如くならんと云ふも不當の評には非ざる可し然りと雖ども我輩は今日に在て佛語獨語を學ぶを無益なりと云ふに非ず之を云はざるのみならず却て常に之を壯年の洋學者に獎勵して怠らざる者なり苟も今の學者たる者が此文明

の世界に居て恰も歐米諸國と比隣接近しながら佛語に通ぜざれば田舎漢として嘲られ獨語を知らざれば不學者として嘖はれんのみ之を勉強して眞成の學者たる可きは壯年當務の業にして決して忘る可らざる所なれども人々個々の身上と社會全體の有様とは自から區別あるものにして前陳の主眼は唯全體に就て論を立たるものゝみ即ち其大意を概して云へば天下の大勢に於て英語は自然の赴く所に任じて益流行せざるを得ず、佛語獨語等は局處の力に依て局處に行はる可し、英語は廣く實利に關係するが故に其區域も亦廣く、佛語獨語は其關係薄きが故に其及ぶ處に限ある可し、世の物事は都て實利に従て進退左右するものなれば今後廣く日本國文化の運動を豫期するに洋學は一般に英語に歸す可しとの次第を述べたるものなり即ち前節の要領第一に洋學に従事せんとする者は日本國と西洋諸國と相對して關係の最も廣くして大切なるものは何事に在るや之に注意せざる可らずと記したるも其意味此に至て稍や明なる可し左に其二項を論ぜん

第三

洋學を學ぶに何れの國の文を擇ぶ可きやとの問題に付き其要領の第二項に人生の學業は中途にして廢するも其中途まで學び得たるものを利用して其勉強の勞力を空うするなからんことに注意せざる可らずとあり抑も人の此世に在るや圖る可らざるものは未來の事なり、禍福來るに常なく、疾病犯すに時を擇ばず、人事天變無常の世界に生々して一身の禍福疾病等を豫知す可らざるのみならず一家親屬一地方の幸不幸をも其身分次第にて多少に分擔せざる可らざるの場合もありて實に今日にして明日を圖る可らず今年にして來年を知る可らず此點より看れば人は偶然に生れて偶然に存へ又偶然に亡る者と云はざるを得ず左れば今少年子弟が學に志を起して大に洋文を學ばんとする其時に當ては固

より自から刻苦勉強を自心に約し三五年若しくは六七年の間に大成して後に大に世に爲す所あらんことを期するは十人は十人、百人は百人皆然らざるはなし然るに實際の成跡に就て之を見れば其十人の中に能く初志を遂るものは誠に僅々計るに足らざるの數あるのみ或は勤學中病に罹り或は家の不幸に逢ひ或は郷里一般の變に際する等種々様々の故障に妨げられて廢業する者比々皆是れなり又或は幸にして學業稍や成り依て以て身を起さんとするに臨でも又其時の事情に従ひ平生學び居たる伎倆をば利用するを得ずして却て自身の豫期せざる所に勞役する者も少なからず例へば天文學を修めんとして算術を學びたる者が天文臺には入らずして銀行の簿記者たることもあらん或は商船學校に蒸氣機關を學びたる者が船に乗らずして鐵道會社に入ることあらん人の言を聞く亞米利加にて醫學校に入る者何百名の中に卒業する者は何十名に過ぎず又其卒業したる者の行く末を探索して數年の後に之を見れば實に開業して醫師の門戸を張る者は僅に數名に過ぎず他は皆其平生の學業に思も寄らぬ事を以て世を渡る者多しと云ふ我日本にても多年來諸學校の生徒を計へて其入校の初より其身の終りまでを踪跡したれば甚だ奇なる事相を呈することならん

前記の次第果して事實に於て相違なきことならば凡そ學問修業の少年は其就業の中途に廢業し又其業成るも必ずしも其平生に専ら學び得たるものゝみを利用するを得ず往々本人の素志にも在らぬ事を爲して世に立つ者多きを知る可し故に天下の少年を平均して其多數の爲に謀れば假令中途に廢業するも其中途までの半業を以て尙實用を爲す可きものを選び或は卒業する者にても其學業たるや少しく之を變易修正すれば廣く社會の用に適す可きものに從事せしむるは甚だ緊要なることならん我輩曾て戯に云へることあり兒童の初學第一著に五十音とイロハと孰れか擇ぶ可きやと尋ればイロハを利益なりと云はざるを得ず如何となれば兩様共に國字を教ふるの方便なれども假に其童子が唯この國

字を學ぶのみにて廢學するものとせんにイロハを學び得たる者は文字を知るに兼て日本普通假名の順序を暗記するが故に他日この童子が成長して人事に當り假令ひ集會所の下足番と爲るも平生所得の學問を利用す可しと雖ども五十音を知るのみにては下足番に必要なイロハの順番に暗くして用に適せざる可ければなりと以上は極めて細事にして唯事情の極端を示したるものなれども其論理は今日の少年洋學生に適用して違ふ所のものなかる可し今の洋學生徒たらん者が佛學に獨學に又露學に始めて其志を立てゝ之に従事するは甚だ可なり十人は十人、百人は百人就學中に不時の故障もなくして約束の如くに業を卒はり卒業の後も果して其學び得たる伎倆を施す可きの地位に就て素志を達することを得ば甚だ妙なりと雖ども是れは前に云へる如く人事の定數に於て萬々行はる可きものに非ず左れば其中途にして廢業したる者、又成業して轉業の事情に迫られたる者は如何して身を立つ可きや半途の學藝固より用る處なし假令ひ成業の者にても日本國中其學業を要するの地位に限ありて苟も偶然に其他位に入るに非ざれば其人の不用なること恰も舊蘭學者に髣髴たるの様な可し不愉快なる次第ならずや之に反して英語の洋學とあれば之に由て高尚の學問を學び得べきは固より佛獨に異ならず不幸にして高尚に達するを得ずして中途に廢學するも尙是れ一種の實用學にして敢て大學者を以て自から居ること難きことならん内地的殖産、外國の貿易、次第に隆盛を致す可き今の時勢に際して苟も英語の嗜あらん者は以て政府の官吏たる可し以て諸會社の役員たる可し或は自立して人に教れば學ぶ者も乏しからず外人に接して事を爲せば其人は英米人ならざるも大抵皆英語を解せざる者なし其便利は既に今日の實際に於て明白なる其上に今後日本國中に鐵道の敷設治ねくして内外の人民自から雜居の姿と爲る可き其時に於ても全國到る處に内外人の交際は英語を以て媒介と爲す可きや又疑を容る可らず旅宿の主人茶屋の下婢に至るまでも多少に

英語に通ぜざれば其渡世に不自由を感ずるの日は遠きに非ざる可し其用法の廣くして下流社會にまでも洽ぬかる可き事情は敢て之を前言して違ふことある可らざるものなれば目下我國の英學は其高下深淺を問はず就學中の廢業、卒業後の轉業を顧慮するに及ばず一字一句も學び得たるものは悉皆後日の實用を爲す可き利益なりと覺悟して之に従事するこそ大切なれ、世間の父兄の學事に不案内なる、又其子弟の熱心なる、或は佛學要用なりと聞き獨學流行なりと教へられ前後を顧みずして直に就學する者なきに非ず敢て不祥を云ふには非ざれども若しも不幸にして人事の定數に洩れず止むを得ざるの事情に逢ふて自から中途に廢業する歟又は其學問が頓に保護力を失ふて中止するが如きあらば假令ひ終身の方向を誤らざるも就學中多少の辛苦と日月とを空うするの恐なきに非ず我輩老婆の一心敢て之に忠告して其思案を促すものなり

「終に又重ねて一言す可きものあり我輩は前條の如く洋學に英語の利を説くと雖ども日本の學者たるものは必ずしも英學に従事して佛獨等の學を顧る勿れと云ふに非ず又必ずしも先づ英學に入て然る後に他國の學を兼ね學ぶ可しと云ふにも非ず佛獨の學問甚だ大切なり唯東洋の貿易國たる我日本に於て佛語獨語等は純然たる學問上の語として通用す可きものなれども男子の心事學問と一決したる上は我輩亦大に之を贊成せざるを得ず即ち就學者の志す所果して學問の一方に傾き果して此業を遂げて一門戸の學者たらんと決心し假令ひ中途にして廢業するも悔ることなしと覺悟を定めたる上は我輩は之を留めざるのみならず眞實我學問の爲に祝して喜悅に堪へざる次第なれども此種の學生に要する所は第一其身體健ならざる可らず第二家族の有様に顧慮する所のある可らず第三家の資産豊にして中途に廢業することあるも衣食の憂なきを要す蓋し世に普通ならざる學問を中途にして廢すれば其半成の伎倆は以て實用を爲さず

して生計を得べからざればなり以上の三者を兼備して純然たる學問に志す者あらば我輩は只管其立志を獎勵して止まずと雖ども其以下の有様に居る少年には先づ英學を勧め幸にして成れば又これに佛學を勧め又隨て獨逸學を勧め又何學を勧めんと欲する者なり即ち俗に所謂大丈夫を取るものにして獨逸佛蘭西英吉利等三ヶ國も四ヶ國も兼備すれば甚だ妙なりと雖ども若しも之を兼ることを得ざるのみか其一ヶ國の學も中途に廢するが如き不幸あらんには寧ろ東洋に於て萬國通語貿易通語たる英語を學ぶことの半にして罷まんと欲するのみ(明治十六年十二月二十六日より同月二十八日に互る)

社會交際

富豪の進歩を妨る勿れ

第一

文明の弊害は貧富不平均より甚しきはなし人民の經濟漸く巧にして政府の法律漸く確實なるに従ひ富者は益富を増して際限なく、貧者は益貧にして出身の路なく貧富の懸隔恰も天淵にして同一の國民中二様の人種を出現するものゝ如しとは西洋諸國普通學者の常に憂慮嘆息する所にして蓋し彼の貧富平均論の如きも此點より生じたるものならん我輩とても此弊害の有様を見て之を悦ぶに非ずと雖も國々の形勢に文明富實の前後もあることなれば今日遽に西洋諸國の事情を聞見して彼の國の學者と共に憂慮を與にするを得ざるものあり抑も西洋人の憂る所は大木の蔭に草を生ぜず

との意味にて富豪獨り其富豪を專にすれば貧者の生息す可き餘地なきを嘆ずることなれども我日本國の如きは決して然らず國中絶へて大木を見ずして雜草亦よく繁茂せり例へば國民の貧者は随分貧なりと雖ども尙よく家に居て日に三度の食を食ひ富者富なりと雖ども其常食は米の飯より外ならず衣食住居の上下に平均したる有様は之を西洋諸國の風に比較して同日の論に非らず假に數を設けて云へば西洋國民中生計の差は千と一との如くにして日本に於ては僅に百と一との差を見るものゝ如し然り而して其一の數たるや西洋も日本も正に同様の地位にして日本の百たるものは其未だ千に達せざる者なり雷に千に達せざるのみならず百たる者も甚だ稀にして國中恰も雜木雜草の繁茂して天與の雨露に浴し相互に害すること能はず亦相互に助ることも能はずして祖先以來僅に露命を繋ぐものと云ふ可し憐む可きの甚しきに非ずや我輩は殘念ながら我國民の貧富平均を見て樂しむを得ず強ひて評を下せば一樣貧困平等難澁の名稱を附せんと欲するものなり

我國民財産の寥々たること斯の如くなるは其原因蓋し一にして足らずと雖ども古來法律の明ならざりしも其原因中に大なるものならん法律不明なるが故に苟も富豪ならんとする者は其富を隱匿して世に富名の顯はれんことを恐れ常に貧寒素朴の風を裝ひ偶ま活潑に事を爲して一拍手の間に大金を得べきの機會あるも世間の外見を憚り又封建政府の威を恐れて坐して其好機會を空うするの習慣を成し世々の相傳次第に人の氣風を蠢爾ならしめたるもの少なからず今日に於ては封建政治の壓制も全く其跡を絶ち恰も青天白日の天下なれば今の法律の下に在て苟も詐偽不正の所業さへあらざれば何業を營み何事を行ふて何程の富を致すも曾て世に憚るに足らざるのみならず却て大に誇る可き功名にして我輩に於ては固より之と富を共にせざるも我同國同胞の兄弟に斯る人物もありて斯る事業を成したりと思へば我軍

人が戰爭に武功を立て學者が學問上に文功を奏したると同様の感を爲して欽慕に堪へず外國人などへ對しては我國の美事榮譽を表する爲に一場の談柄とも爲して愉快なることなれば日本國中誰れ彼れの別なく只管其富福ならんことを祈るものなれども世の中は又一種のものにして數千百年の舊慣人心に浸染して之を脱却すること易からざるにや今日の天下に於て稀には有爲の人物を出し千辛萬苦漸く身を起し業を成して或は一家の主人となり或は一會社の社長と爲りて幸にも其事業の次第に繁昌せんとするものあれば漸く世上の物論を起し其事業を贊成稱譽するに引替へて却て之を攻撃論駁し其正に盛にして進むの商鋒を挫折せんとして至らざる所なし陰に陽に其事業の缺典を枚擧して他の惡聲を鳴らせば世上の人も之に雷同して其實は無緣路傍の輩までも身の損益に拘はらず他の惡を聞て愉快の思を爲すものゝ如し甚しきは商業上の評論を離れて其人の私事に及ぼし曾て憚る所なき者あるに至る實に我國世々の相傳に養成したる固陋嫉妬の惡風習にして金穴は社會の怨府たるを免かれず長大息に堪へざるなり又其金穴なるものも頻りに世上の俗論を恐れて退縮の狀を爲し萬事靜謐を專一にすると慎で其富有を隱匿し百方に彌縫して云はゞ富人にして貧人を裝ひ世に富人と云はるゝを以て一種の恥辱の如くに思ふ者なきに非ず亦奇談ならずや謙退辭讓も事と品に由る可し商人にして富を致したるは武人が戰場に功を立たるものに異ならず一度の功名は又以て再度立功の資たる可し然るに其功名の世に顯はるゝを恐るゝとは果して何の心ぞや畢竟富者其人も亦其富を羨で嫉妬する者も共に舊陋習に醉ふて今の天下に法律あるを知らざる者なり苟も法律のあらん限りは幾萬幾億の富を致すも何の憚る所あらんや又これを羨で之を攻撃するも何の益する所あらんや双方共に徒勞と云ふ可きのみ今日の日本は昔日の日本に非ず富む者は益富で忌憚る所ある可らず又これを攻撃する者も昔日の陋習を脱し貴重なる精神を費して坐して他を羨むよりも自から

奮起して富を求む可きなり

第二

我輩が前節に於て我同胞兄弟中に富豪者を生ぜんことを祈望し世人の漫に他の事業を妨げて其富有を羨むの弊害を論じたるは唯徒に富豪者を保護するのみの旨に非ず又國中貧富の不均を起して之を見るを樂しむにも非ず他に聊か微意の存するものあり其次第は本編の初に日本國民の貧富は大に平均したるが如くなれども其平均たるや富と富と比肩して平均したるに非ずして貧富一様の平均なれば字面のみを見ればこそ平均の主義願はしきが如くなれども貧乏の平均より寧ろ貧富の不均を願ふの趣意なり五十年前の日本にして内は封建の太平に安んじ外は歐米諸國の交際を知らず洞門深く鎖して開花落花の春を樂しむの世なれば萬民鼓腹貧乏の平均も亦安樂なれども今や外交の次第に繁多にして然かも其外國に於て文明の進歩は實に駟馬に鞭て驅けるよりも速なる其最中に立て我日本も共に前後遲速を争はんとするの時勢に當りては百事切迫せざるものなし文學藝術の競争より兵馬武備の強弱に至るまで片時も怠慢す可らざるは無論殊に賣買掛引の競争の如きは兵馬稀有の戦争に異にして月に日に會て休戦の間斷なき損益の争なれば片時も其攻守の謀を忘る可らず例へば今後全國縱横に鐵道の往來を開く可きは時勢に於て必然のことならん、鐵道既に成るときは今の如く外國人の内地旅行に規程を定めんとするも勢に於て能くす可らざることならん、近日東京より高崎迄の鐵道竣功を告るに及で東京より内外の人民打交りて汽車に乗り走ること數里にして外國人は是れより先きに行くを禁ずとて汽車より卸ろして本の道に返すことは随分難きことにして我輩は其實際に行はれざるを前知す即ち外國人の内地旅行は利害を論ずるに遑あらず器械的の實勢に於て止む可らざるものなり、内地の旅行自由なれば止宿も亦自由ならざるを得ず、止宿自由なれば亦暫く内地に滞在することもあらん、暫時の滞在漸く久きに及べば即ち内地に於て内外人民の雜居なり、既に雜居するときは獨り外國人に限りて法律を別にする可とも叶はずして所謂治外法權の沙汰も是に於て止むことならん、内外の人民一様の法の下に在るときは獨り外國人に限りて内地の不動産を買ふを禁じ、公債證書の賣買を禁じ、又は諸會社の株主たるを禁ずる等特別の條例を作るも亦難きことならん、即ち外國人も日本人も同様に内地に在て商賣を營み不動産に論なく如何なる性質のものにても資本のあらん限りは自由自在に之を日本國內に利用す可き時節なり扱この時節の到來我輩の所見にては必ず遠きにあらざること信す此時に當て我國民の財政は如何なる可きや今日の有様にて毫も變動することなく此まゝに日月を消したらば依然たる貧乏平均の人民にして恰も雜草雜木の繁茂したるが如く見るに足るものなき其中に西洋の大木を移して我草木は其蔭に萎絶することならん假に我政府發行公債證書の大數を一億五千萬圓として之を所有すれば元金に對して凡そ一年一割の利子を收領する上に幾年の後には今日の實價に三割四割を増したる元金を取る可し利子の廉なる西洋人の資本には非常なる利益と云ふ可し都鄙の地面を買ふも亦斯の如し諸會社の株主たるも亦斯の如くならん又或は株式取引所、米商會社に行て其相場を上下するも自由ならん諸銀行の株式を專有して其廢立を謀ることも自由ならん我商人等は果して何ものに依頼して苟も生息す可きや唯坐して外人の鼻息を窺ふのみのことならん我輩は之を想像して凄然たらざるを得ざるなり

斯く我國民の慘狀を畫きたる處にて讀者諸君の所望は何ものにも在るや我輩試に君に代て之に答へん西洋の豪商が資本を我國に卸して商權を專にせんとせば我國にも豪商を生じて之と拮抗せしむるの一事のみ之を日本國中の細事に譬るに我郷里より力士を出すときは東京の回向院に於て他郷の力士に勝たしめんことを祈らざるものなし之を相撲の

最良と云ふ内外の商人が金權を争ふは商賣の一大土俵場なり苟も日本人として我最良の商人をして勝を取らしむることを願はざる者あらんや力士に於ては少々にても其體の肥大して腕力の増さんことを祈る商人に向ては細々にても其財産の増して金力の加はらんことを祈る、若しも其商人が一旦の好機會を得て大に出身したることもあらば傍より拍手快と稱すること人情の常のみならず内外の商權を争ふの急に當て依頼して自國の榮譽を維持し又自國の實利を保護す可きものは唯この富豪者あるのみなれば人情より訴るも利益より論ずるも同胞中最上の好友たる可き筈ならずや然るに前に記したる如く今日の世間を見れば豪商の出身を傍より悦ばざるのみならず悠悠々路傍の觀を爲し尙甚しきは其進歩を妨げんとする者あるに至るとは驚く可きに非ずや畢竟古來法律を重んぜざるの舊惡習を脱すること能はずして眼前の喜怒に制せられ情に乘じて他を害せんとし内に熱して外を忘るゝ者にして獨立國の民と云ふ可らざるなり頃日横濱にて外國の一人商人某が不幸にして或は破産することもあらんとの事情にて日本商人等は彼の外商の平生取引上に刻薄なるにも拘はらず只管破産を悲しむの情ありとのことなり今其次第を尋るに同港にて外商へ生絲を賣渡すに當り價の下落に向ふときは商館一同申合せたるが如くに荷物の引取りを遅々して次第に下落の勢を助け日本生絲商の困弊極りて所謂其投資の日を待つを常とするの風習なる其中に於て獨り某は他の外國人の申合せに關係せずして或は不意に高價を命じ即日幾百萬圓の荷物を買取るが如き非常拔群なる舉動を爲すが故に他の商人等も其大膽なるに恐れ無下に日本商を輕侮するを得ず生絲の價をして至當の點に位するを得せしめたるものが今回若しも某が全く破産したれば日本商は恰も據る可き木蔭を失ふて大に不便を感ずることならんと云ふ等しく外國商人の中にも聊か特別な金力を持って獨立する者あれば間接にも我貧弱商の便利を爲すことあり若しも此外國人に引替へて我國人中に金力

膽力共に非常なる者を出し横濱の商賣の如きは單に之を一手にも引受けんと云ふが如きあらば其愉快は如何ばかりなる可きや我輩は其平生商業上に嚴酷なるを咎めず或は時として射利の度に過ることあるも之を罪せず況や其人の私の品行の如き之を論ずるに遑あらず唯獨立國商業の榮譽の爲に其働を賞賛して止むことなかる可きなり(明治十六年三月九日及び十日)

人爲の法則は萬古不易たるの約束なし

時勢の變化は一人の力を以て喚起すべからず左右すべからず制止すべからず嘗に一人の力よく之を如何ともすると能はざるのみならず百千萬人の力と雖ども亦同一様たるべきのみ抑も時勢の變化は人心の變化より來るものなりと雖ども此人心なるものは外物の形狀に従て如何様とも變化すべきものにして周圍の外物其舊狀を改めざるに人心獨り先づ運動すべきにあらざるなり我輩の常に論ずる如く古來天下の人心を刺衝すること最も廣且大なりしものは蒸氣電氣郵便印刷の新發明に優るものあるべからず當代の文明開化なるもの奇は甚だ奇にして固より驚嘆に堪へざるものなりと雖ども其本源に溯りて之を糺せば學問上の結果此等の新發明を成し發明成りて之を人事に實用するに至りて天下の人心は外物の刺衝に揉み立てられて懶惰舊慣に泥むの性を逞ふること能はず、知らず識らず漸次に寸分を變化し遂に今日の如く前後古今の懸隔其相距ること嘗に三十里のみならずの勢を成し今日となりては之を好むと惡むとに關せず最早此大勢を如何ともすること能はざるに至りたるなり

今天下の人事を通觀し五十年乃至百年の昔に溯りて古今を對照するに一事一物として大變化せざりしものなし古は

人爲の法則は萬古不易たるの約束なし

往來運輸陸地に由るものは牛馬駱駝を以て至便至速のものとし海路に由るものは脆弱の帆船を以て貴重の要具とせり
今や陸に鐵道あり海に汽船あり之を取て曩きの牛馬駱駝帆船等に比較するに固より同日同年の論にあらず又古は書籍
を出版して知識見聞を公布せんとするに其困難容易ならず文字を木版に彫刻して之を紙に印し冊を成すに至るまで其
事の遅緩にして勞の大なる今の金屬の活字を編集し蒸汽機關を以て之を運轉印行するものと其差異實に幾許なるを知
らず今の印刷業中に就き最も驚嘆すべきものは新聞紙の發行なり一年三百六十日毎日の新事項を即日即刻に印刷して
幾千萬通と爲し徧く全國全世界の人に報知して遺す所なし古人をして若し此實況を目撃せしめば一見驚死すべきや疑
なかるべし或は各自の思想交換通信等のためには廉價郵便法在るあり上は王侯の宮殿より下は貧民の茅屋に至るまで
一國の内外を通じて書翰の往復自在なるが如き昔日の社會に於て更に其比を見ざる所なり又古は海陸の軍事活潑なら
ず、兵は神速を貴ぶと云ひながら其兵機の遲鈍緩漫なる慙笑するに堪へたり弓矢槍劍を以て時に相挑戰するに十數年
を経るも一軍を終らざるの例あり今より見れば唯是れ小兒の戯のみ故に敵の襲來を聞て初めて矢を作ぎ壘を築くも護
國の用に不足なかりしことならんと雖ども今の軍事は決して然らず陸に鐵道あり海に軍艦あり電信一報軍令を傳れば
十萬の貔貅忽ち敵城一焦點に集合し轉瞬の間に一國の存亡を決すべし而して其軍器の如き百噸砲の實彈は數里の外に
三尺の鐵壁を貫くべく一擔の爆裂藥は隻手以て三軍連城を虚空に飛散せしむべし其他醫學化學物理學等學問上の變化
の如きも古今を對照して其相違の大なるに驚かざる者なし人間萬事都て斯の如し然るに此變化改進の眞最中に於て依
然舊體を變ぜず五十年は勿論五百年の昔より今日に至るまで其趣の全く相同じき一物の存在するあり其物とは何ぞや
今日世界中政府の仕組即是なり世に君主政治なるものあり又共和政治なるものありて其仕組も一樣ならず隨て又時勢

に連れて變化改進するもの、如しと雖ども其實は決して然らず君主共和其名相異なりと雖ども其實は相同じく政府に
強大の權力を掌握し無限の榮譽を集合し人爲の舊慣古法を繼續して方圓柄鑿の憂を顧みざるの一事に至りては古今萬
國同一轍なり然るに此政府の仕組たるや何れも皆當代文明の發生前に創起したるものにして當初に在りては甚だ時勢
適合のものなりしならんと雖ども蒸氣電氣を人事に實用するの以後人間社會を改造して些の舊樣を存せず權力榮譽政
府の專有にあらずして匹夫匹婦も一たび其志を決するときは滿天下を震恐せしむること甚だ容易なる今日に當りて其
功用の舊に異なるならんこと欲するは寧ろ無理の願望に屬す可きのみ亞國の共和政治甚だ自由にして美なりと云ひ
英國の代議政體頗る寛大にして巧なりと稱するも其美は百年前に在て美なりしのみ文明の利器未だ働を現はさずして
人間社會の遲鈍なる恰も芋蠅の如くなる時代に於て巧なりしのみ之を譬へば百年の昔英國の海軍將「ネルソン」が「タ
ラフハルガル」に戦ひし戰艦は其堅牢神速無比のものなりしならんと雖ども今日より之を見れば脆弱遲鈍なる風帆船
たるに過ぎざるが如し古は君主兵權を握りて九門の内に坐するときは安全磐石も嘗ならず國に何様の兇民ありと雖ど
も毫も意とするに足らざりしなり然るに今や大に然らず一夫其欲する所を得ざれば忽ち亂を思ひ萬乘の君を弑し金殿
玉樓を焚燬するに之を能く禦ぐことなし甚しきは社會黨虛無黨共產黨など、唱へ公然黨衆を集て出沒往來するに政府
の威武も屈すること能はず政海の榮利も羈すること能はず其狀恰も羣兒の遊嬉場裏に狂犬を放ちたると一般なり然に
社會黨虛無黨員に限りて獨り狂犬たるを得るにあらず一たび其志を決する以上は匹夫匹婦天下一人として狂犬たるこ
と能はざるものなし我輩靜かに之を思へば悚然毛髮の豎つを覺へざるなり近日歐洲よりの電報に魯獨英佛の政府は破
壞黨鎮壓のため會合議する所あらんとすとあり此等諸國の政府が破壞黨鎮壓の策を議するや甚だ好しと雖ども畢竟す

るに此破壊黨なるものは文明開化に伴ふ所の附産物にして其趣は火酒の製造を發明して以來世に酔倒人を生じたるが如し火酒の製造廢せざれば酔倒人の跡を絶たず、文明開化止まざれば破壊黨も亦滅せざるや明なりと雖ども火酒禁す可らず文明開化停む可らず然ば則ち之に處する如何にして可ならん人爲法則の一部分たる政府の仕組をして文明の風潮と併行せしめ隨時に變化改進するが如き火酒を飲で酔はず文明に浴して狂するなきの一法ならん乎知らず今歐洲諸國の各政府は何の方策を以て此當面の國難に應ぜんとするか（明治十六年四月二十六日）

人間の權力は一二人の專有にあらず

當代文明の未だ起らざる時代に當りては人間社會に權力を有する者は一國の君主若しくは統領と其下に奉仕隨屬する百官有司の上に出る者なし之を主治者と稱して晉に其上に出る者なきのみならず主治者を除くの外は悉皆被治者の部分に屬し國內地を拂て寸分の權力を有する者をも見ざりしなり然るに蒸氣電氣印刷郵便の發明を以て今の文明を創造せし以來は國內忽ち無數の權力者を現出して主治者獨り社會の治亂盛衰を主どること能はず其狀恰も三千の燭影相反照し二三蠟燭の明滅を以て一樓の暗明を左右すべからざるが如し學者發明者の如き社會を動かすの力は甚だ強大なるものありと雖ども多くは間接に其影響を及ぼすものにて主治者が把持する直接即效の權力と併べ稱すべきものにあらず又彼の宗教家の如き中等以下の人心を籠絡して俗間の榮利を受用し其權力頗る強大なるものなりと雖ども來世幽冥の道を説く者なりと稱するが故に直接に社會の人事に立入ること少なく殊に文明の風潮は宗教の伸張と逆行し僧侶をして其力を逞くすることを得せしめず今日の僧侶は昔日の僧侶にあらず後日の僧侶は又今日の僧侶にあらざるや明

白の事實なるを以て之を文明社會の權力者中に算入せんは其當を得たるものと云ふべからず彼の學者發明者が文明の進行と共に其勢力を増加するものとは固より同日の論にあらざるなり依て今文明社會に現出したる權力者を求めるに左の數者を得べし

鐵道の人事に大關係あるは人の熟知する所にして其效力如何の如きは今更之を論ずるも無用なる程のものなり然るに此鐵道布設の如き人事に大關係を有する重要な事件は主治者の外之を理する者あらざりしに今や然らず民間一鐵道會社長の意見を以て其線路を左右し其工事を遅速し其運賃を増減し其列車發著の時限を伸縮して之を制止する者あるなし而して其意見の社會に影響する所は天變地變も言ならざるべし假りに之を我日本に例へんに東京大阪間に鐵道を布設せんとするに東海道に由らずして中仙道に由りたりとせんか此鐵道の流域中に在る各地の農工商業は俄然其面目を改め社會の變動測知すべからざるべし然れども其初社長をして此鐵道を東海道に布設せしめば此變動は中仙道に起らずして東海道に始まるなるべし或は又社長をして此鐵道を布設するに明治十八年を待たず十六年に竣功せしめたりとせんか此變動の期を早むる事正しく二年の前に在て其有様は恰も王政維新の大改革を爲すに明治元年戊辰を待たず慶應二年丙寅に當て舉行したるが如き者と一般なるべし斯の如く小は一地方の盛衰大は一國の變革に關する大事業にして其權柄は一社長的手中に在り實に古來未聞の新事像と云ふべきなり又海運の人事に大關係あること鐵道に譲らず或は某々兩國の間或は某々兩港の間に汽船の往復あるとなきと又其往復の繁きと疎なるとは兩國或は兩港間の貿易交通上より隨て双方人民一般の休戚上に大關係あるや論を俟たず而して此汽船の往復を命令する者は汽船會社の社長にして社長の一令東西數十百萬の人民をして明に其力を感じしむるなり其權力實に偉大なりと云ふべし例へば我國にて

三菱會社の汽船が東京を發して陸前仙臺に至るに従前は同所野蒜港に碇泊せしものが風浪の險あるを知て更に東して荻の濱に碇泊することとなりてより野蒜の景況一變し折角新築の市街船渠も人の之を顧みるなく永く蘆荻の裡に埋没すべき勢なりしに近日三菱會社が野蒜新市街の一區を借地したりとのこと世上に發露するや否斯くては三菱會社の汽船が再び此新港に來泊するの日あるべしとて人氣忽ち回復し大に市街の借地料を競り上げたりと云へり此一地方の小事以て他の無數大事を推し汽船會社が掌握する權力の大なるを證すべし又西洋人の言に今の世界は新聞紙の世界なりと云ふに違はず凡そ文明國人にして新聞紙の便益の廣きと其權力の強大なるを知らざる者なし新聞紙曰く軍勢を催促して敵國を攻めざるべからず宰相曰く攻むべからず新聞紙曰く工業を起して國の富源を開かざるべからず宰相曰く開くべからずと斯の如く新聞紙と宰相と各其意見を異にするに當り宰相は斷乎として其持説を變ぜず永く攻めず開かずの政策を實行することもあれども其新聞紙が實に中正無偏の新聞紙にして其主義正に社會の輿論を寫出するもの歟又は之に由て輿論の方向を左右するに足る可きものなれば宰相も亦これに耳を傾けざるを得ず嘗に耳を傾るのみならず枉げて新聞紙の主義を取るか然らざれば身退き職を讓りて局を結ぶことある可し歐洲諸國其例日に多し新聞紙の權力強大なりと云ふべし又彼の電信事務の如き之を政府の管理に屬するの國もあれども中には人民の私業と爲すの國もあり米國の如き是なり電信線の在る所は其無き所に比して人事の活潑なる幾倍の差あるを知らず而して此人事の活動を左右するは電信會社長の手中に在り是れ亦た大權力者と稱すべきなり以上記す所は唯其一二例を擧て古今の變化を示し文明の始まりし以來人間社會の權力は單に政事と兵事とに止まらず所謂主治者の專任する所にあらずして他に其分任者を生じたるの實を明かにするのみ文明開化は活物にして其動て次第に進むに従ひ人間の有權者は主治者以下僧

侶にも學者にも又工業家新聞記者にも限るべからざるは無論のことにして商人農民の資力ある者は云ふに及ばず匹夫匹婦と雖ども人の幸不幸を其掌中に制すること甚だ難からず二千年前古聖人が臆定したる所の秩序の變改も是に至て亦極れりと云ふべし故に我輩は經國の志士に忠告す文明社會の人事を處するは文明社會の法則に依り又新に之を工夫すべし若しも之れに依るを欲せず又工夫もなくば先づ此文明を中止するの工夫を運らす可きなり(明治十六年五月四日)

日本人は今の日本に満足せんとするか

第一

西洋當代の文明開化尙ほ幼稚にして世界各處に桃源洞民の殘存するを許すの時勢に在ては一國內の事を處するも甚だ簡單容易にして無事太平決して難事にあらざり殊に我日本の如き絶海の孤島に在ては外より來る者もなく外へ行く者もなく國外世界萬國の事一として國內人民の利害休戚に關するものなかりしを以て仰で青天を望み俯て蒼海を眺め時に郷黨の小毀譽小利害のために奔走するの外他の人事なかりしと雖ども西洋文明の風潮一たび孤島の天地を撼揺せし以來は一朝にして數百年來の面目を改革し鎖港閉居の舊日本國は忽ちにして萬國交際の新日本國と爲り政治兵事學術技藝農工商業百般の人事にして一も變革を要せざるもなく煩雜紛擾極りなきの際王政維新の一舉大に變革の速力を増し其根據を固くし破竹の勢以て百弊を一掃したるは實に目覺しき有様なりし日本人が進取の勇氣の盛なるは世界古今其比類を見ず萬國の人をして喫驚感嘆に迫あらしめしは實に我々日本人の榮譽と稱すべきなり

日本人は今の日本に満足せんとするか

日本人が進取の勇氣の絶倫なりしは炳然蔽ふべからざるの事實なり而して斯く絶倫なりし其原由に關しては世上種の議論ありて未だ一定する所なきが如し或人の説に曰く日本人が進取の勇氣は實に驚くべき強大のものなり然るに日本人とて元と是れ世界の一人種にして格別特異の性格あるものにあざれば此人種に限り進取の勇氣特り強大なりと申す理由もあるまじ察するに日本人は數百年來絶海の孤島に閉ざして世界の風波を知らず外國のために侵略せられたることもなく外國を侵略したることもなく唯我獨尊にして國內に安居したり北條の世に元兵筑紫に來寇し彈丸の數島嶼を一呑せず氣込みなりしかども幸にして風雨天變のため十萬の師日本に殲したるの後は再度の來寇もなければ日本より彼れに攻入ることもなかりし次に豊臣太閤の盛時に朝鮮出師の事ありて雞林八道を蹂躪したりと雖ども其志を達すること能はずして一旦該國を退去の後は國事の有様舊時に異ならず爲めに支那朝鮮との關係を困難ならしめたりと云ふ程の事蹟もなく日本の外交上には何等の影響をも遺さざるものなりし斯の如く元兵の來寇と云ひ朝鮮出師と云ひ日本人をして外國を知らしむるの功用甚だ少なかりしがために日本人の唯我獨尊心は日に益増長固結し滿天下に己れを除くの外個の畏るべき者なしと信ぜしめたり其狀恰も貴介公子等が世間風浪の艱難を知らず己れを以て全能全力全智の人なりと心得一朝世に出で愛すべく羨むべきものを見るに至りて直ちにこれを得んとして自家の身上を顧みざるが如し卒然これを見れば無双の大勇者なれども靜にこれを察すれば世間知らずの無頓著者なり日本人が西洋文明國の政治の美なるを見其兵備の強大なるを見其農工商業の盛なるを見學術技藝の高尙なるを見てこれを愛しこれを羨むこと甚だしく直ちに取て己れの有に歸せんと欲して野猪一般の勢を以て突進し一たびは世界の耳目を驚かしたりと雖ども今や靜に其舉動を諦視すれば炳然火を觀るが如く其虚實眞偽蔽ふべからず近來は既に猪突の進歩に倦

むの色を顯はし漸く其分に安んずるの退守策を講求する者の如し實に人をして捧腹絶倒せしむるに餘ありと云ふべきなりと以上或人の説を察するに其中一理の取るべきものなしと云ふべからずと雖ども要するに日本人が進取の勇氣の盛なりしは己れを知らず世間を知らず盲人が蛇を畏れざるの所爲と一般なる者なりとの論定は我輩其當を失するの甚だしきを信するなり我輩の所見は大に或人の説に反對し日本人が進取の勇氣は不明の妄勇にあらずして智者の大勇なりと信ぜり抑も我日本國は元和偃武以來徳川政府の治世二百五十年の間武斷壓制の政治を以て専ら武事を獎勵し社會の榮譽は唯武一邊に存するが如くなりしと雖ども文事の勢力も亦決して薄弱ならず支那流の鴻儒碩學輩出の傍に和蘭の書籍を講じて西洋の學術に通ずるの志士を出し武家世襲の勇氣を鼓してこれを文事に適用したるを以て其進歩の速かなるは實に尋常人の想像し得る所にあらず一旦港を開きて世界萬國と交通することを始むるに至りて往來の便利増加したると共に世界を知ること益深く日本人の慧眼早く既に西洋文明の愛すべく羨むべきを明知したるを以て斷然意を決して其方向に直行し止まることを知らざりしなり左れば日本人が進取の勇氣の強大なりしは決して盲人の勇にあらず祖先以來教育素ありて固有の知識に乏しからざりしがために一旦善に従ふの明快に加ふるに國の爲め身を顧みざるの勇氣に富みしに因るのみ實に我日本人が進取の勇氣は愛すべく又敬すべきなり

第二

我日本人が進取の勇氣の盛なりしは實に前段に論ずるが如し此勇氣は我々日本國人の名譽にして日本國の至寶なり然るに一兩年以來我日本人は何等の思考する所あり何等の原因するものありてか漸く此貴重敬愛すべき勇氣を失はんとするの傾向あるが如く社會百般の事物頓に停滯不流甚しきは退守却行の實相を呈出するに至りたるは我輩の不審に

堪えざる所なり今の日本人は三四年乃至八九年前の日本人と別人ならざる者必ず多數なるべし前日に在ては西洋文明の慕ふべきを知て其輸入に日も亦足らざりしもの今日は則ち時ありて文明の自家に不利なるを疑てこれに遠ざからんとするが如し何ぞ其始に勇にして後に怯なる或は又強ひて説を爲す者ありて我々は徳川二百五十年の武斷政府を仆して代ふるに明治文明の政府を以てしたり我々は海陸軍備の模範を世界の文明國に求め大に國を護るの基礎を定めたり我々は國民に上下の區別なきを許し自由權理の貴重すべきを論じたり我々は西洋文明の學術を講習して他年大成の緒を開きたり我々は農産改良の要を説きたり我々は諸般の工業に著手したり我々は商業の盛大なることを希望したり我々は運輸交通書往復の良法を採用したり我々の爲せし所既に斯の如し我々は必ずしも文明開化の我々に不利ならんことを恐るゝ者にあらずと雖ども我々として木石の身にあらざれば時に疲勞退屈を感ずることなきにあらず殊に僅々二十年の間我々の一生涯中に於て文明の下點より發足して其上點の一部に達したり其迅速長大實に自分ながら驚くに堪えたり人間は足るを知ることを要す我々明治人士の勳功斯の如く偉大壯烈なり尙ほ此上に齷齪として文明の進歩を計り政治を改革し國權を擴張し農工商業を奨勵して國の富強を増さんとするは西施面上に燕脂を點するが如く其美を加ふるに足らずして却てこれを損ぜんのみ且つ進取は危險多し退守は獲る所なきも既に有する者を失ふの恐なし兎角退て今日の日本を守るに如かざるなりと云ひ強ひて自から安心して人をも安心せしめんとする者あらんか我輩は其説の奇恠なるに驚かざるを得ざるなり今の日本人は果して今の日本に満足して更に欲望する所なきか國會を開設し立憲政體を定むるは今の日本人の願望する所にして其期今より七年の後に在りと雖ども國會開設即ち今の日本人の目的なりと云ふにはあらで日本人たる者の大目的を達するの用に國會を要するなりと云ふの意に止まるが故に國會開設の事

確定したりとて決して目的を達したるにはあらざるなり殊に其開設の期は今より七年の後に在り國の命期より云へば短き日月の様なれども人間の生涯に比較すれば甚だ長き日月と云はざるを得ず此長日月の間政治上に文明の進歩を停止することを能くすべし又これを停止するも後害なかるべしと云ふ者あらんも我輩は信ずること能はざるなり

今の萬國交際は弱肉強食禽獸の道を以て相接するのみ決して道徳を守り道理を説て相親睦するにあらざるなり國を護るの法は唯兵備を嚴にするの一事あるのみ今の日本陸軍は軍人七萬人海軍は軍艦三十艘なりこれを外國の兵備に比するに朝鮮安南等東洋未開の小弱國を除くの外歐米各國に於て斯る薄弱の兵備を見ること極めて稀なり古へ文明の技術未だ明かならざるの時に當ては我日本の如き絶海の孤島に僻在する者は水波萬里敵國と攻戦するの便なく隨て外に對するの兵備を要せざりしと雖ども今や然らず宣戰旬日にして面あたり敵の兵艦を日本海に見るべく陸に海に一點の罅隙あらんには忽ちにして國を失ふの憂あるべし今の日本人は今の兵備に満足し枕を高くして眠に就くの決心ありと云はんとするか我輩の信ずること能はざる所なり

國を富すの術は全國の農工商業を盛にし大に外國貿易を開くの外他の妙策あるべからず今の日本の海運は船舶少なくて全國の需用に應ずるに足らず鐵道は線路短くして未だ運送の便利中に位するに至らず農業未だ改良せず工業未だ起らず隨て外國貿易の如き一年の輸出入金額五六千萬圓全國人民に分頭して一人二圓に足らずこれを歐米文明國の每人數百圓の貿易に比すれば實に同年同日の論にあらざるなり然るに今の日本人は今の國力に満足し今の生活に満足し今より文明の進行を停止して悔いざる者なりと云んとするか我輩決して信ずること能はざるなり

必竟するに今の日本人は決して文明の進行に退屈せざるなり今の日本に満足する者にあらざるなり唯其數年前に顯

はしたる進取の大勇氣を卒然今日に失ひたるが如き變相ある所以は察するに今の日本にて上流の士人中至て少數の部分が種々の事情よりして退守却行を希望するの餘日本全國人民を誣ひて卑怯老朽一時の客氣に文明を採用して却て今日に後悔する者なりと吹聴するのみ一個人の却行は自家の自由にして我輩の關する所にあらずと雖ども併せて全國人民の却行を勸むるが如きの所爲あらんには我輩は國のためにこれを默すること能はざるべし（明治十六年八月二日及び三日）

人事停滯の毒恐るべし

第一

戰爭の毒惡は人を殺し財を費し人間社會に莫大の不幸なること勿論の次第なれども去迎太平無事延て百年に及び二百年に渉るも亦左程望ましきことにあらず何となれば太平の常として人心動もすれば停滯倦厭に落入りて其社會一足の進歩をもなす能はざるに至るは往々之あることなればなり故に望ましからざるの一點に至ては戰爭の毒惡も太平の弊害も與に同一様なれば戰爭に人を殺し財を費すの禍の少ならずも其人心を刺激し停滯を除くの功用を加減乗除して考ふれば亦必ずしも價の貴きものに非ず戰爭必ずしも恐るゝに足らざるなり徳川幕府の太平は二百七十年の久きを保ち其外觀頗る善きが如く其實も亦善きもの少なからずと雖ども二百七十年非常の太平に準じて非常の功德なかりしは是れ亦掩ふ可らざるの事實なり歐洲にて一世ナポレオン帝の騷亂始めて休みたるは千八百十五年の事にして爾後四五十年の太平に各國開明の進歩は實に世界の耳目を驚かしたり四五十年の太平尙斯の如くなれば二百七十年は正に

その五六倍の進歩を爲すべき筈なれども獨り徳川の太平に於て然らざるは何ぞや太平長久の功德は意外に大ならざるの證として見る可きなり我輩爰に想像の案を立て、徳川幕府が保ちたる二百七十年打ち通しの太平の代りに先づ之を五期に分ち一期五十年毎に平均一度の戰爭ありたる者と假定し然る上當時の社會は如何なる進歩をなしたる歟を推測したらば二百七十年の太平よりも一期五十年間に社會の進歩の多々なりしこと誠に相違ある可らず五十年にして日本文明の一面目を改め二百七十年の後には五回の段落に各々其文明を進めて以て今今日の天地に至らば日本文明の進歩は遙に既に高所に達せしなるべし徳川元和の僣武以來五六十年の其間には賢明有爲の役人多く世に出で、幕府の政權も大に振張し學者輩も頗る興起し社會の全面を通じて活潑進動の有様なりしに百年と過ぎ二百年と立ち太平の日月進むに従て社會の停滯次第に甚しく二百七十年後の末造に至ては其の停滯愈々極まりて復た之を刺激すること能はず社會の状態は寧ろ元和の其昔に若かざるの想あり我輩が徳川の五十年目に戰爭の刺激を假想して二百七十年後の今日に文明上等の社會を見るなるべしと言ふも強ち無稽の言に非ざるなり

王政一新明治の天地となりし以來天下の人心は戦後の刺激にて爲めに活動の働きを生じ西洋と交通して大に彼の文明を採用し舊弊を矯め日新を事とし社會全面の活動進行は其速かにして且大なること昔の元和間の比に非ず僅々の歳月に格別の文明を進めたるは人も許し自からも誇る所なりしに時運近年に至て少しく趣きを變じ云はゞ開國卅年來社會の稍や老大したる者とも云べきか頃る其事實に現はれたる世相を竊に視察するに古學流行して五行說燃立ち古醫再興して傷寒論行はれ書も古を尙び畫も古を尙び骨董亦古なり道德も古にすべし智識も古にすべし天下社會の事皆古を善とするの傾きあるが如し固より之を以て文明の大勢に抗せんとするは螳螂の龍車に當るの喩にして能くすべきに非

されども又如何なれば社會の人心斯の如く停滯を生じて苟且の風に安んずるに至りし歟我輩は之を人心の倦厭して刺激を感じざるの致す所なりと認めざるを得ず人心果して倦厭を生じたるか之を刺激するの術甚だ多し何ぞ之を勉めざるや全體戰爭は好むべきに非ず兇事の至りなれども猶ほ之を人心倦厭社會停滯の結果に比すれば時としては憚る可らざるの場合なきに非ず即ち我輩が徳川の時代に五十年目の戰爭あらざりしを惜みたる假想も畢竟は人心活動の氣象を失ふの結果を恐れたればなり五十年目の戰爭を以て人心を刺激したるの結果は二百七十年太平打ち通しの結果に優ること幾倍なりしを臆測したればなり停滯倦厭の陋風徳川時代の如きに至て之を除くの窮策には寧ろ戰爭の毒惡をも忍ぶ可しとまで記して讀者も其意を了解せられたることならん然るに戰爭は古代の事なり今や人心を刺激するに何ぞ戰爭の窮策を要せんや一毛の毒惡なく善盡し美盡すの良策あるにその之を使用せざるとは亦た思はざるの至りと謂ふべし試に看るべし隔洋對岸の邦國に於ては孰れも文明の事に忙はしく世界到る處として活劇場ならざるはなく商賣兵備より學藝工業、日新又新を加へて際限ある所を見ず然るに此多忙なる世界に立て之と競争を試んとする我日本國に限り倦厭停滯の傾きを生じて百事古に復せんとするとは實に舌頭に懸け難き次第ならずや今日の社會は決して戰爭を以て刺激をなすを要せず一足海を隔れば外國との關係片時も忽せになすべきに非ず至大至急の刺激果々として前に在り之を如何して倦厭停滯に迫あるべき刺激の種子は眼前咫尺にありながら其種子を取て人心の興起を圖らざるとは抑々又何の意ぞや決して刺激なきに非ず大にあれども之を受くることを勉めざるの咎なり文明の歡樂は音樂を聞き美花を見るが如く心神の快活なる亦た倦厭に迫ある可らず外國には曉々たる音樂あり我人民の進で之を聞ざるは聾なり外國には爛漫たる美花あり我人民の進で之を見ざるは盲なり今日の刺激はこれなきに非ず只だ己れの盲且聾にして之を感

ぜざるが爲なり我日本人民早く其盲と聾とを攪破し進で外國の刺激を利用することをなさず依然として停滯に安んじ苟且を事とせば其弊惡の生ずる正に旦夕に在るべし社會の事は一日も忽がせにすべきに非ざるなり

第二

人心刺激を失ふが爲めに停滯に落入るの弊害は實に恐るべき甚しきものなり如何なる智力も如何なる勇力も一朝の偷安より頓に消滅して復た之を回復する能はざるに至るのみならず遂には己れの成立ちをも保ち難き次第となるは古今に珍らしからぬ例なり我國にて元龜天正より文祿慶長に至るの其間當時戰國の習ひとして一日も油斷すべきの時節ならず苟も小機會あれば敵を窺ひ又敵に窺はれ一家の存亡盛衰は實に己れの腕前に係ることにして威勢を得るも得ざるも皆な眞劍の勝負如何にありと云ふ世の中なれば外部の刺激に寸暇もなく隨て諸侯伯の腕前も十分慥かにして決して無力に非ず若し無力とあれば敵に窺はれて己れの成立ちを保つ可らず畢竟の勝敗は力の有無に由ることにて猶ほ相撲の負け勝ちに贗せ偽りのなきが如し左れば當時の大名侯伯は眞實に智力あり勇力ありたる者なりしが二百七十年太平の功德は實に恐ろしきものにして其昔文祿慶長の頃智勇兼備の大名旗本が今は見る影もなき懦弱柔軟の人となり一旦の急變に臨めば果して徳川幕府に馬上の奉公をなすことその祖先の如くなることを得たりしや生首を槍串に爲したる者の後裔が芋蟲をも殺し得ざるに至るとは太平の逸樂に乗じて刺激を失却したる結果として見るべき者なり又元龜より慶長に至るの間參河の徳川がその隣敵と競争して大に勝利を得、遂に全國の覇主と迄になりたるは參河武士の智勇に由ること多しと云へり參河武士とあれば死を視ること塵芥の如く君の爲めに戰場に臨んでは未だ曾て敵に背を見せたることもなく威風凛々なる武臣なりしは今に隠れなき事實なりと雖どもこの參河武士が徳川の全勝と與に八萬

羽林の麾下となり股肱となり二百七十年の太平に世とともに休息したる其成迹を見れば羽林八萬如何に成行きしか敵に背を見せざることとは借措き世上に隻影だに留めず幕府の末造迄は八萬騎の空名はあれども參河武士の實なかりしに今日は其名も實も存在する所を見ず是れ二百七十年無刺激の閑天地に晏然空日月を送りたるがためならん油斷大敵の俚言此に至て甚だ明白なるを覺るなり人或は二百七十年は長日月なり徳川の大名若くは參河武士が今日の有様に落入りたるは全く永年の油斷苟且に由ることなりと云ふ者あらんと雖ども人心停滯の弊害は瞬息の間に來る者なり徳川時代の停滯は永年の結果なりしを以て其毒大なりしと雖ども短年月間の停滯は憂ふるに足らずと安心するは是既に油斷にしてその弊害は正に其間に發せんとするなり

人心の刺激を失ふて直に停滯に陥るは實に瞬息の間にある者なり今、史に據て之を證せんに平家一門の如き乃ち是れなるべし彼れ源平とて互に比肩したる武門なれば其勇剛智略も左迄源氏に劣るべき者にはあらず特に清盛の如きは爲義を滅ぼし義朝を誅し頼政を討ち一手を以て源家に聞えたる三將を打滅ぼしたり勝敗は運なりと云ふも決して偶然にあらず畢竟智勇ある者にあらざれば勝つこと能ざるなり然るに清盛既に強敵を平げて安心の地を得、平家の一門は遽に刺激を失ふて心神の安樂を得るとともに忽ち停滯を生じ武門武士にして公家縉紳に擬し一族の朝官六十餘人虚を飾り美を粧し花月の遊嬉の外の人事を知らず文弱も亦是に至て極まると云ふべし然るに清盛太政大臣となりてより十六年死してより二年平家の智勇忽ちにして消滅し義仲京に攻入て宗盛南海に出奔し越て二年平家遂に西海に滅亡す十六年の以前には源氏を討滅して威勢を振ひながら一旦刺激を失ふの後僅に十六年にして一門の士氣頓に萎靡して亦爲す可らず剩へ嚮きの討殘しの餘孽より攻撃を受け敗滅を取るに終はりしを見れば倫安苟且の人心を停滯する實に急且

つ甚しと謂ふべきなり保元平治の亂には清盛重盛の智勇能く敵を滅したりとは言ふものゝ畢竟平家一門の士氣振作活動して大に刺激を受くるの境遇に立ちたればこそ源氏の三首領を討滅するを得たるなれ爾後僅に十六年の停滯は遂に平家を西海の底に沈ましめしを見れば亦以て刺激の功用の緊要なるを知るべきなり平治の亂に勇猛の聞え高き悪源太義平その勇臣十六騎と與に重盛を逐撃し大に紫宸殿の前に戦ひ重盛之と相争ひ櫻橋樹を七匝し且戦ひ且卻き敵を誘て其第に至らしめたることあり義平の勇力なるに十六騎の勇士を従へて一の重盛を逐ひ櫻橋樹を七匝して遂に獲る能はず却て其術中に陥る平將の智勇實に嘆賞に堪へず隨て一門の士氣其勇烈想ふべきなり然るに其後二十二年養和元年に至り此重盛の子維盛勅を奉じて義平の弟なる頼朝を征するとて大軍を引率して東に下り頓て富士川に至り鵝鴨の群飛するに逢て敵兵の來攻なりと驚き人馬踏藉して逃げたることあり頼朝義平は同じ義朝の子にして神人の別あるに非ず然るに父の重盛は勇猛の義平と目覺しき鬭争をなし子の維盛は未だ頼朝の面を見ざるに先づ鵝鴨の羽音に驚き戈を交ふるに及ばずして逃走したり名將を父に持ちて其庭訓に薰陶したる者にして斯の如し父子勇怯を相懸隔する斯く迄に至らんとは實に人の豫期せざる恠事と云ふべし是れ二十二年のその前後に一は刺激ありて人心振作し一は刺激なくて人心懦弱に落入たるが其原因をなせしなるべし平家没落の其時にも知盛教經の如き一門の勇將あり又家臣にて勇力を顯はせし者も少からず孰れも二十年前には源氏討滅に大功ありし者なれども平家全門の懦弱に蔽はれて徒らに涅齒白粉を粧ひ一朝事敗れて臍を噬むも及ぶべからず實に二十年間の平家は全體より見るも一人に就て見るも其前後の懸隔案外千萬なる次第なり是に由て觀れば刺激なくして停滯に落入るの弊害は決して永年を待て來る者に非ず半月の油斷にても其來るは必然なりと知るべきなり蓋し停滯の弊害は今も昔も異なる所ある可らず乃今日の海外諸國

は我と競争を爲すべき者なり我に刺激を與ふるの國なり我より進んで之に勝つことを勉めざる可らず既に勝ちたる平家にては僅々二十年間の油斷に源氏の討滅を免れず我の西洋諸國に對する日夜勉勵して尙且つ及ばざる處なるに之に加へて倦滯古を喜ぶの風あるが如きは果して何の心ぞや一年二年の油斷なりとて決してこれを許すべきに非ざるなり實に目下の世界は其多忙繁劇元龜天正の昔よりも甚し外國に對して今明日に兵馬の競争はあらずとも商賣の競争も工藝の競争も亦學問の競争も何れも急緊切迫のものにして一日の油斷あるも直に敵に背る星を指されんとする今日ならずや斯る刺激の眞中に立ちながら盲となり聾となり偷安停滯して古を慕ふとは豈に言語の限りならずや我國民たる者早く進で競争の刺激を外國に求めざる可らざるなり（明治十六年八月十七日及び十八日）

我文明は退歩するものには非ずや

第一

別離三年偶然に舊相識を見れば其容貌自から昔時に異なる所あるを覺ふ殊に身體方に發育する少年の如きは三年の久しきを待たず相見ざること僅に半年一年にして別人の如くなるものあり人身の變遷斯の如く速なりと雖ども家族團樂朝夕一處に起居眠食する者は互に相見て互に相異なるを覺へず今日の父母は昨日の父母に同じく昨日の子供は今日の子供に異ならず日一月一月同一様の父母兄弟にして其老衰も見へず其成長も覺へずして偶ま久々の來客などが子供の成長を評するの言を聞き不圖一兩年前の事を回顧して成る程子供も成長したり吾れも老衰したらんと自から心附くのみ蓋し人身體の變遷發育は其機極めて微妙にして圓滑なるが故に時を刻して之を目に見る可らず其趣は時計の時

針動かさるが如くして毎晝毎夜十二時の間に盤面を一周するものゝ如し

左れば一國文明の進退も猶一身體の變遷發育の如きものにして其進むも又退くも日を刻し月を期して之を見る可らず現に我輩が日本に居て日本の文明は昨日と今日と如何前月より今月に至るまで如何と問はるゝも唯變ることなしと答るの外ある可らず（各地の人が相互に書翰を贈答するに當地相替ることもなしとは殆ど定文言なるが如し各地の實際に於ては固より替ることあるも人情これを覺へざるのみ）故に人事の運動文明の進退を知らんとするには之を一日一月に求めずして數年を経過し、時に眼を轉じて既往を回顧し以て其變遷の共計を算す可きなりつら／＼維新以來我日本國の變遷を考るに政治に於ては廢藩置縣、地租の改正、法律の頒布、内國の治法、外國の交際法、事業に於ては商工會社の設立、蒸氣船車電信郵便等運輸交通の便利、教育に於ては洋學の獎勵著書新聞紙の發行等何れも皆日本古來の慣習を破て文明開進の風に移りたるものにして百事皆未熟幼稚にして見るに足る可きもの少なしと雖ども數千年來閉鎖したる此日本國にして此改革を實行したるは之を我國人の勇氣と稱して聊か海外の人に對しても愧る所なきが如し殊に我内治の正に緒に就かんとする其際に早く既に國の勢力を外面に顯はし臺灣の征討朝鮮の締盟又隨て琉球の廢藩等何れも皆外人の目を驚かさざるはなし以上は凡そ明治十二三年の頃に至るまでの事にして其間には内亂の戦争もあり又は商賣殖産上の變化もありて時勢一様ならずと雖ども概して之を計算すれば日本國の開明進歩と云はざるを得ず即ち今日より回顧して分明に其事跡を見る可きものなり

然るに兩三年以來國事全般の有様を視察するに進歩の状を示すもの甚だ少なし政治に事業に又教育に於て一も活潑なるものを見ざるのみならず如何なる社會の風潮にや人々相互に猜疑の念を抱て相互に安んずるを得ず進で他に怪訝

我文明は退歩するものには非ずや

せらるゝよりも寧ろ退て自から守るの安全なるに若かずと云ふの意味か前年は有爲の資を抱て現に事を爲したる其人にても今日は頓に老練著實の風を装ひ一事一物將さに起らんとするものあれば是れも尙早し夫れも輕躁なりとて唯止まるを以て得策とするものゝ如し政治の事に就て少年輩が漫に狂奔するが如きは之を制して之を沈著せしめんとするも至極尤なる考にして自から其方便もある可し且人間社會は唯政治を以て組織するものに非ざれば國中時に政治上の議論に穩かならざるものあるを見て頻りに之を苦慮し百方に術を盡して遂によく其議論の方向を改るも其成績は唯政治の一方に止まりて社會の全般を改良したるものに非ず況や唯政治の一方に熱して其議論を左右せんが爲に様々に方略を施し、其方略に忙はしくして社會全般の大計を怠り或は甚しきは方略に熱心して輕々手を下だし地上波を起して却て穩かならざるの樣を増長せしむるが如きに於てをや畢竟長者の事に非ず其實は長者少者と争ふものにして長者の爲に謀て聊か愧づ可き次第なりと云ふ可し、政治論は姑く聞き全國事業の不活潑なる實に驚くに堪へたり紙幣亂高下の爲に商工失敗の慘狀は普く人の知る所にして之に隨て國立銀行の零落を致し銀行の信用地を拂ふて之に代る者も起らず資本一方に偏して融通の路を斷絶し有爲の商工は唯手を拱して自から衰微を待つのみ富商大賈は唯公債證書を買ふの窮策に出で、只管退守を事とし全國の工場は戸を閉ちて許多の資本を閑却せしめ職工は手を空うして衣食の缺乏を訴へ商家は唯賣るの一方を勉めて仕入れの謀を爲さず甚しきは農民が肥料を買ふの資本を得ず又これを借用するの信なくして空しく其田地を餓へしむるの慘狀に迫るとは殖産の財政上に憐む可き事相にして維新以來事業の澁滯する今日より甚しきものはなかる可し

第二

右商賣上の不活潑は一時財政の變常より來る所にして其回復には自から定期もあることなれば必ずしも之を目して文明開化の退歩とも目し難からんと雖ども開明の基礎たる教育上の事に就ても近日は漸く困難を生じて或は退歩の情あるが如し維新以來文明の學問を獎勵して近年は漸く業を卒る者を生じ又年々歳々に生ず可き割合なるに此卒業生を用ゆ可き事業なし化學卒業して化學の用なし土木學び得て土木の事なし或は政治經濟文學を心掛けて社會の事務に當らんとする者の如きは當に其事なきのみならず假令ひ之を採用す可き地位あるも其本人の履歷と出處とに妨げらるゝ者少なからず加之今の教育の氣風は自から古に復するものゝ如くにして世間往々徳川時代の陳腐固陋説を唱る者なきに非ず蓋し教育家の意は唯名を文明に假りて其實の輕躁なるものを防がんとするに在りと云ふと雖ども實際に於ては然るを得ず例へば從來諸學校に於て洋學漢學交へ教へたるものも近來の氣風にては漢を先にして洋を後にし漢書教授の時間一なるものは之を三にし洋書の三なりしものは之を一にし且學校の主監をも從前の洋學者を擯けて漢儒流を用るが如きは自然の勢にして世間既に其實例を見るもの多し是等は明に文明退歩の實況として指點す可きものなり我輩切に案するに洋學の弊甚だ多し其多きは百學の通弊にして和漢古學の弊に異なることなしも雖ども維新以來我日本の國是を開國と決斷したる上は此國を維持するに果して何等の主義に依頼す可きや今の世に當り萬卷の古書を読むも此國の面目を何様に開進す可きや假に我少年輩に漢書を教授し其輩が成長して國事の表面に當るとせん歟其志願成就の點は我國をして漢儒流が師とて崇る所の支那國に達せしむるを以て限とすることならん我輩の固より甘んずる所に非ず元來古學の主義は開明を助けざるのみならず常に之を妨げたるものにして其事實は遠きに在らず三十年來親く我國情を視察せよ嘉永年間亞國船の渡來より次で王政維新の前後我外交を妨げて我内治を困難ならしめ甚しきは我國命を

我文明は退歩するものには非ずや

も危くしたるものは獨り古學頹陋の主義に非ずや當時若し此主義をして十分の勢力を得せしめたらんには吾人は實に今日の日本國を見るを得ざりしことならんに幸にして西洋文明の説を以て萬古の固陋を破り外にしては世界各國の侮を防ぎ内にしては維新の大業をも其首尾を全ふするを得たることなり然るを今日に於て古學を獎勵するとは現に開明の淹滞のみならず今後の結果に其退歩を用意するものと云ふ可し斯る淹滞の氣風にして其實際に現はれたるものを云へば上流の社會に漸く茶の湯の流行するあり古風馬術の再興するあり書畫を弄ぶ者あり珍器を集る者あり其盛なる部分に就て見れば徳川の末造文恭院殿の盛時に彷彿たるものありと云ふ茶の湯書畫等風韻の點より論すれば頗る高尚なるものにして人生の無用物に非ず苟も社會の人事に猶豫あらば此邊に心を用るも大切なりと雖ども今日の日本國が頓に國を開て西洋諸國の文明に接し之と鋒を争はんとする其繁雜多事は未だ消防の具を備へずして近火に逢ふものゝ如し有爲の男子にして如何なる遁辭を設ればとて風韻の事に日月を消するの閑ある可らず我輩は此有様を見て開進世界の慘状なりと評せざるを得ず

以上是我輩が今日目撃して心に感ずる所の一二事實を擧げたるものにして之を既往兩三年前の世相に比較すれば淹滞して動かざるが如く又退歩したるが如くにして更に進歩の見可きものなし兩三年前より日本に居り現に事物の動靜を目撃して之に慣れたる我輩の眼に於ても尙且斯の如し若しも此兩三年の間、山居して頓に今日の社會を見る歟又は一步を進め兩三年前より日本を去て海外文明の國に至り其國勢の喧嘩騷擾を聞見したる者が今日歸朝して今日の有様を視察したらば前後の異同更に分明なることならん文明の進歩は童兒少年の方に發育するものに異ならず然るに別離三年其發育を見ずして却て文明の老衰に逢ふが如きは驚く可き次第ならずや過般或る西洋人が我輩に書を贈り來り

其文中に日本の文明は日本相應に其達す可き頂上に達したれば今後は定めて退歩の氣運に向ふことならん云々の言を記したり誠に残念に堪へず我輩は唯この言の當らざるを祈る者なり(明治十六年八月二十一日及び二十二日)

政談の熱畏るゝに足らず

第一

三曲合奏して音樂の調子頗る好く五味鹽梅の都合にて食物美味を生ず此は是れ普通の定則にして何人も不同意ある可らず然るに音樂は獨り三絃のみにして只だ亂引きに之を引き節制變化もなく又合奏の調子なくんはその耳に聽て或は噪がしきこともあるべし然るに琴あり鼓弓あり互に其節を合はせ抑揚變化の間に微妙の聲音を出すときは音樂の調子更に一段の好境を増して其人心を樂ましむること極めて巨大ならん食物の如きは五味鹽梅の大切なること實に的の結果にて知るを得べし獨り甘き者は如何程に甘しとも旨しとするに足らず獨り辛き者は如何程に辛しとて珍重なす能はず酸味もなかる可らず苦味も鹹味も亦入用なり但し此中に就て彼此互に調理し甘鹹相和し尙ほ足らざれば其他の諸味皆な適宜の加減を以て巧に鹽梅をなし然る後ち太牢の美食成るを得べし尤も音樂の調和、食物の調理の理は誠に普通の定則なれば三尺未滿の童兒も尙ほ詳に合點し得ることならんと雖ども爰に社會の事に當る六尺の大男兒にして猶ほ此尋常の定則に心附かざる人あらば我輩不肖ながら一言の忠告を試むるの勞を辭せざるなり

昨今日本國にて政談の流行専らにして頗る喧擾に堪えず如何してか之を鎮めて靜謐ならしめ度しと心中頻りに苦慮を催ふし政談撲滅の策を案する者頗るこれあるが如し蓋し其人々の考案は一向我輩の解する能はざる所なれども事

の原因を人の薄徳に歸し支那風の道徳を以て少年子弟の輕躁を矯め説諭懇々周旋奔々以て其狂激を制し以て其喧擾を除き去らんとの豫算なりと云へり勿論日本國の少年子弟とて政治思想ある者に於ては好んで政談をなし往々過激の演説に政府の小官と末路の小波瀾を生じ其筋の煩を來すこと少なからず隨分厄介の至りなれども是れ小波瀾のみ汪々たる大海の水面には何程の感動もある可らず寧ろ心を寛くして之を見たらば大海一碧の片隅に波躍り水動くの却て奇觀なることもあるべし今日の政談決して靜謐に非ず既に演説する所あれば大なり小なり社會の人心を刺激し心波更に心波を傳へて全國に感染することあるべきの理なり政談の波瀾或は片隅に止まらずして全面に普及するも亦勢ひならんと雖ども之を憂へて何の方策もなく唯眞正面より之を差止めんとするときは未だ效を見ずして却て豫期外の害惡を生ずるも知る可らず一體政談とて社會の一具なればこれも亦入用の者なるべし然るに其喧擾を憂へて之を鎮めんが爲め併て社會の一具を除かんとするが如きは智者の考に不似合なりと謂ふべし元來社會の人事とは種々様々の者にして宗教なり學藝なり或は商賣なり孰れも社會の一部局なり政談も亦た社會の一部局即ち一具には相違ある可らず既に一具とあれば其喧擾を憂へてこれを除去せんよりは政談をば政談として社會の爲に之を保存し獨り政談にのみ其喧擾を専らにせしめざるの策こそ誠に長久の銘案と云ふべきなれ末路の小波瀾決して憂ふるに足らざるなり前節音樂の調和に三曲合奏の能く妙を致すを説き食物の調理に五味鹽梅の必要なるを述べたるも畢竟甘味のみにては食物の良品となす可らず三絃の一曲未だ其妙を盡さざればなり然のみならず辛味の一食實に其辛に堪え難く三絃の一器却て人をして倦ましむることあるべしと雖ども去迎其倦と辛の爲に兩者を斥けんとする者あらば我輩はその無智不學を笑はざるを得ざるなり苟も分別あらば甘味を和して辛味を薄ふする可なり然るときは其風味益々美を極て食物の調理を全ふすべし三

絃倦み易ければ合奏の作用に由て其倦み易きを制すべし然るに今日世上にて政談の噪がしきを憂へ之を憂ふるの餘りに政談を鎮遏せんとするは是れ社會の一具を殺ぐ者にして其様は猶ほ辛味の辛に苦んで直に辛味を廢せんと欲し三絃の噪がしきを厭て復た三絃を絶たんとすが如く其無分別も亦極れりと謂ふべし政談果して噪がしき歟之を處するの術甚だ難からず畢竟その噪がしき所以は他に合奏を共にすべきの樂器なく又鹽梅すべきの食品なく獨り政談のみ世上に成立つを以てなり宗教なり學藝なり又商賣なり孰れも社會必要の部局なるに此諸部局は寂寞蕭條恰も無人迹の谿間に均しき折柄、政談の一物のみ稍々運動を生じ少しく其足を動せば登音四方に響き渡りて日本の社會獨り政談の聲あるに似たれども其實際は政談外の人事總て寂寞なるが爲なり熱鬧の市街にて大抵の音聲は四方に徹し難し若しも政談外の人事總て熱鬧を極め四周皆噪がしき眞中にありなば日本國の政談も其聲に蔽はれて喧擾の憂なからんこと必然なり左れば此上の良策は他なし唯だ日本社會の人事を一體に繁劇ならしめ宗教學藝及び商賣を盛んにし以て政談の噪がしきを奪ふに在るのみ

第二

前條の次第なれば政談の噪がしきを制するの良策は唯だ政談外の人事を繁劇にして政談の鳴りを奪ふのみにて事足るべしと雖ども爰に残念なるは日本國に於て政談外の人事は孰れも寂寞無聊を極むるの次第なり今その例證として見るべきは第一宗教の現状なり宗教は固より社會の一要件にして我國にては古來佛教なる者行はれ今日も株式の遷り來りにて佛教の信者國中に少しとせず又僧侶輩にも乏しからずと雖どもその寂寞無聊は實に甚しと謂ふべし宗教の本體果して改良せし所ある歟弘教の方便昔日に劣らざる歟幾種の宗派能く衆くの信向者を感化するの法力を有する歟外國

の宗教次第に内漸すれども果して内教を以て之に應ずるに足る歟此等の事には一として充分の力を致せし者あることなく或は十中一二其力を致す者なきにしも非ざれども此逆も又獨立有爲の氣力なく僅に當路の人に依て以て事を行ひ俗の庇蔭に立て己れの職を保続するのみ西洋諸國にては宗教の有様實に繁劇を極め或は他宗と相競ひなどし其喧擾は能く宗教外の人事をして獨り其力を恣にすることを得ざらしむるに日本にては之と相反し宗教ありと雖ども闕然として聞ゆるなく寂寞の至りなるは實に悦ぶべきこと云ふべからざるなり又學藝の事に至ても世人は殆ど之に無頓著にして如何なる工夫あるも如何なる新説あるも皆な之を方外に看捨て去り或は精神を凝らして一著述をなす者ありと雖ども世人は嘗て其書を反顧せず尙ほ甚しきは其人の姓名をも記憶せず何某の學者が何等の功績をなし又如何なる學力を有するともその聲聞毫も世上に達すること能はず維新以來西洋の學問技藝を講習して一家専門の業を遂げし者ありと雖ども恰も世上の厄介者同然たるの觀なきにあらず蓋し學藝の點より今の日本を視察せば恰も是れ無人迹の谿間に於て政談の小音聲も四方の草木に響き渡るに殊ならず全國獨り政談の噪がしき敢て怪しむに足らざるなり次に商賣のことを見るも海外諸國には内外の貿易繁劇熱鬧にして其騒々しきこと一方ならざるに引換て本國の有様はその蕭條たること亂後の村落も音ならず先づ日本人の風として商人を賤むの弊は今に尙ほ消滅することなし尤も維新以來商人の地位の従前より高まりたるには相違あらざれども一概に商人とあれば兎角人の尊敬を受くること能はず又實際その商人なる者も多くは無學無識にして僅に疎漏の經驗あるに過ぎず其身代は随分大ならざるに非ずと雖ども大に進で貿易の市場に馳驅するの能なきを常とす間々紳商とて有爲の商人あるが如くなれども是も又政府の餘蔭を仰で僅に事を營む者にて敢て獨立獨行して活潑なる商賣をなす者に非ざるなり全體今日の世界は商賣最盛の時節にして海外諸國が

繁劇辛苦を厭はず無上の熱鬧中に奔走するも其實商賣の爲ならざるはなし故に商賣は最も人心を刺激し世界熱鬧の原種をなす者なりと云ふ可き程の事實なるに獨り日本國の商賣に至ては何の活氣もなく亦熱心もなく世人は商人を賤み商人も自から其無活氣に頓著せず今其例證を掲げんに本年一月の頃迄は七十圓内外の公債證書が僅に七八ヶ月の間に變を生じて昨今既に九十圓代に登り七十に付き二十の變は實に商賣上の大變なりと雖ども世人は之に關して一毛も痛痒を感じるなく公債證書取引値段の高下を見ること猶ほ寒暖計の昇降と一般の思をなし暑氣の高度と共に公債の價格もその度を引上げたることならんと云はぬ計りの有様なり或は公債の騰貴は商賣の不景氣に起りたる者にて一時理財の變常より來ることなれば之を推して日本總體の商賣も亦然りとす可らざるは勿論なれども別に洋銀相場の高下に關しても日本人の無頓著は同様に分明なり乃ち昨年七八月の頃は一圓七十錢以上にまでも昇りし者が幾何もなく今は一圓二十錢の低きに下り其差異五十實に大下落と云ふべし若しも龍動の市場にて通貨の相場に變を生じ三五日に一割餘の高下もあらば如何ん必ずや市場の大變動を起し銀行家諸商人の驚駭は無論、政府にても大藏卿を始め一省の吏人上を下への混雜を起しその影響は遠く米佛の市場に迄波及すべし然るに日本にては百に五十の大下落あるにも拘らず市上何の混雜もなく世人は通常之を見ること又彼寒暖計の昇降に殊ならず商賣世界の無感覺にして且寂寞なること既に此の如し學問の世界亦此の如し宗教の世界亦此の如し寂々寥々の中唯鳴るものは政談のみ其鳴るや喧すしとて之を止めんとする者も亦共に鳴る、結局鳴る者も止むる者も共に政談の聲より外ならず是れ其聲の高きが故に非ず他に其聲を和して合奏の調和をなすもの無ければなり歐米諸國にて政談の流行頗る盛んに政治上の集會東西相望み中には過激粗暴の壯年が罵詈譏の演説をなす者も多く其部中實に喧擾を極むることなれども全體の社會より見るときは

商賣は最も活潑に學藝は最も盛大に宗教も亦能く運動し一切の人事皆な壯快にして政談獨り其喧擾を恣にする能はざるなり若し彼國の社會より宗教を除き學藝を除き又商賣を去り獨り其政談のみを聞きたらばその噪がしきこと日本國の比に非ざるべきも各種の運動一様に盛んなるが故に政談の噪がしきも獨り社會を蔽ふこと能はざるなり日本にても政談果して噪がしき敷敢て之を鎮遏するに及ばず唯だ宗教の働き學藝の力を擴充し商賣の刺激を盛んにし政談外の人事を進めて以て政談の喧擾を蔽ふべきのみ然るを計算此に出でず宗教學藝商賣の事は依然として其寂寞に任せ政談獨り噪がしとて之を鎮遏せんとする如きは老練著實家の策とも思はれず獨り政談の味をのみ嘗むるが故に苦きなり其聲をのみ聞くが故に噪がしきなり苟も鹽梅を巧にし合奏を妙にしその苦き者、噪がしき者を調和せば政談の味も政談の聲も共に將に快樂の種子たらんとす世人蓋ぞ此の常道に従はざるや（明治十六年八月二十四日及び二十五日）

保守の文字は復古の義に解す可らず

保守とは既に有るものを保存して守護するの義なり人間社會一日も此主義なかる可らず若し然らざる時は日に事物を破壊するのみにして秩序を得るの路ある可らざればなり唯一國の騒亂政府の更迭等の時に當ては或は破壊して保存せざるの日もある可しと雖ども其日は甚だ少なくして漸く新事物の舊事物に交代するありて又これを保守すること緊要なり我明治政府が始めて其基礎を立るときに當り廣く宇内の形勢を視察して國是を開國と一決してより以來日本の舊事物を以ては此開國を維持するに足らざるを悟り舊を棄て、新を取り政治法律武備文學より税法曆數に至るまでも悉皆舊物を破壊して新様に從ひ政府は恰も西洋文明の木鐸を爲し國民の之に靡くは艸に風を以てするの勢にして新

様の向ふ所天下に敵を見ず郵便電信は以て飛脚屋を破壊し、汽船の運用は以て舊廻船の慣行を破壊し、西洋學者の論説は以て皇漢學者を擯斥し、新著書新聞紙は以て和漢の古書を閣上に束ねしめ、國中殆ど舊物の見る可きものを存せず即ち文明開化の駁々然たるものにして明に舊日本と新日本との分界を畫したるは獨り吾々日本國民の知るのみならず西洋の著書にも今の日本を目して「モデルン、ジャツパン」と稱し新舊全く別異の觀察を下だして我國を重んずるの情は昔時に十倍するに至れり加之我政策の如きは内治の改良を以て足れりとせず支那に向けては臺灣の征討隨て琉球の廢藩置縣を行ひ又世界文明の諸國に率先して朝鮮國を開き去年の事變に際しては轉禍爲福の略に怠らずして内地通行の規程を増し既開三港の外に新に楊華鎮を開かしたるが如きは武斷文略の極意にして我人民の満足は無論、海外諸國の人に於ても聊か我日本國を憚るの情を催ふしたることならんと信す畢竟我一定の國是を擴張したるものにして新日本の榮名萬世不朽なりと云ふ可し

右の如く我日本國人は舊物を棄るに吝ならずして巧に新様を取り以て世界萬國に對して我國の體面を高くし我國權を昔日に比して九鼎大呂よりも重からしめたりと雖ども其新舊交代の際に當り新物未だ備はらずして舊物早く既に破壊したるの弊なきに非ず例へば古俗舊慣既に廢して人民尙未だ新法律の精神を解せず、封建門閥の制は既に破壊して人民尙未だ政治の思想に乏しく、古風の商工既に失敗したれども文明の殖産法尙未だ足らざるもの多し、古學の教育既に無用に屬したれども後進の學者尙未だ洋學の眞味を嘗むるに至らず蓋し我日本社會の秩序尙未だ緒に就かずして今日の外面騒然たるが如きも新陳交代の際に免かる可らざるの數ならんのみ之を譬へば舊宅を去て新宅に轉するが如し其移轉の際に多少の混雜は豫期の中に在て存す可し毫も驚くに足らざるなり然りと雖ども家にしては既に移轉と決

したり國にしては既に開國と斷じたり既に之を決斷して進取敢行と覺悟したる上にて或は其中道にして騒然たる混雜もあらんには唯其既に決斷したる進取敢行の主義を保存して之を守るの一法ある可きのみ即ち國民をして新法律の精神を知らしむ可し、人々政治の思想を發育して國法を遵奉し國權を重んずるの義務を負はしむ可し、文明の工業を起し世界の商法に通じ殖産の區域を擴張するの旨を勸む可し、益西洋の學問を獎勵して古學の陋風を除去し後進の學者をして洋學の佳境に入ること勤めしむ可し、又政府の方略に至ては既に舉行したる琉球の處分を守て屹然動くことなかる可し、既に開たる朝鮮國の事に就ては世界各國に對しても我率先の功を全ふして益力を盡し有始有終の榮名を汚損するなきを期す可し以上枚擧する所は今日に於て決して新奇なる説に非ず十數年前既に一決したる國是なれば此國是を保存して之を維持守護するは誠に尋常一様の道にして所謂老練著實の思案を以て社會の秩序を維持するの法を求るも他に方便なきことならん家にしては新宅の秩序を保存し國にしては開國の秩序を守護するものなり今の開國たる新日本の爲に謀り此老練の方策を外にして他に維持の奇法ありと云ふ者あるも我輩は之を信ぜざるなり然るに我上流社會の一部分には文字の義を誤解したるにや又は人事の形勢を誤認したるにや口に保守と唱へながら現在の秩序を保存し又隨て之を改良して既決の國是を維持することをば勉めずして遙に古に遡り古風を呼返して今の人事に當らんとする者なきに非ず斯の如きは則ち秩序の保存には非ずして今方さに緒に就き又將さに緒に就かんとする秩序を破りて古に復る者と云ふ可し保守の文字を復古の義に解したる者と云ふ可し是も内國のみの事なれば尙忍ぶ可しと雖ども十數年來吾人が他に向て聊か得色を示し海外の諸國に迄榮名を博したる此新日本國の體面を如何せん、今にして古に復るとは即ち退て守るの工夫なり退守の主義果して我國に恰合するとせん歟、内に恰合するも外に恰合せざるを如何

せん、眼を開て宇内の大勢を看よ日本國は果して如何なる地位に在るものなるや歐米諸國との關係日に益密接し電信瞬間に消息を通じ汽船日に著發往來し名は五千里外の遠國なりと云ふも其實は維新以前薩摩と加賀と土佐と仙臺と相去るの距離に比して近きを加ふるも遠きを増すことなし彼の一動一靜は我一喜一憂たる可し彼れは日に進で取り我れは月に退て守る可きや其動靜進退は彼此五千里外の事に非ずして正に吾人が頭上に懸るの急なり近くは今回清佛安南の葛藤の如き當に當局三國の事に非ず世界萬國の觀望者に至るまでも日本の舉動に注目せざるものはなかる可し又朝鮮の交際の如き其獨立を認めて締盟したるものは日本と米國とのみ世界の觀望者は果して如何の評を下だす可きや内治の細目は外人の知る所に非ず内治云々は以て外交を緩急するの辭柄たる可らず斯る繁雜切迫の時勢に當ても尙退て守らんと欲する歟我輩其可なるを知らず轉居の途中にして舊宅に歸らんとし開國の半にして古に復らんとす我輩其可なるを知らざるなり（明治十六年八月三十一日）

憂世家の手段

當時、世を憂ふる者の言を聞くに青年の政談家動もすれば過激の説を吐き又粗暴の行をなし靜かなる人民を教唆し或は政府の官吏に抵抗しその心術は平地に波瀾を起すを喜ぶ者にして苟も機會あれば世を煽動せんと欲す誠に日本國の爲に有害なることなれば早く之を防ぐの策を設けざる可らず而して其策とは専ら今の青年輩を古風の學問に導き又は厳しく折檻を加へて之を懲らすより外に名案ある可らず青年の政談家を始末するの良法は此に過ぐる者ある可らずと自ら此方策を信じて疑を容れざる者あるが如し我輩熟ら〜此憂世家の人物を視るに強ち世事人情に暗き者とは思

はれず随分に道理を辨へて勘辨もある人々なれば徒らに政談を敵視し之を憎み之を嫌ふの餘りに又これを一網に打盡さんとするが如きの心算なきは我輩も亦た知る所なり故に此人々は一切の政談を嫌ふ者かと云ふに決して然らざるのみならず高尙の政事談なれば大に世を益すべしとのことも充分に知悉し又自からも之を聞かんと欲するに相違ある可らず唯だ其政談の多く過激なる青年輩の口より出で、遂には實著なる世人までも粗暴に誘引せられんと懸念あるより凡そ青年の政談とあれば却て胸悪く之を感じ、感ずるの餘り又之れを防がんとす其心事は實に尤なる次第にして我輩は一も批難の點を見出す能はざるなり事實青年過激の演説が世の爲めにならざるの理は明白の次第なれば世に之を絶たんと思ふの心は我輩とても憂世家とても更に變りある可らず憂世家の目には獨り青年過激の政談の有害なるを發明したるは此天下中、唯だ己れあるのみと見ゆることならんと雖ども是れは大の僻見にして記者の如きも既に己にその害あるを覺悟したるや久し、寧ろ憂世家の新發明とあるは僅かに四五年來世上に政談の流行始まりて間々粗暴家を生出せしより突然に驚駭を喫し遽に之を防ぐの妙計を悟りたる心地して斯くは政談防禦の一事に汲々する者に非ざるなきを得んや過激の政談固より世上に害あり豫め之を覺悟せしは獨り憂世家の専有物ならず我輩實に同情同感にして深く彼人々の心中をも察せりと雖ども社會大勢の實際に於て到底その目的を達すべきの機會なきを如何せん、獨りそれのみか若し一步を誤るに於ては其計畫も最初の希望外に奔出して思はざる極度に至り百計運らし盡て進退維れ谷まの難所に陥るなきも期す可らず憂世家の心事は兎も角、其心事を行ふの手段は果して能く將來の見通しあつて後ち爲せしことなるや我輩は餘所ながら實に憂懼に堪えざるなり

右の如く憂世家の心事は一應の理あるに似たれども其手段に至ての一大困難と云ふは働きの結果豫想の外に出で、最初に防がんとしたる者を防ぐには足らず却て自ら作爲せし者を防ぐに追なきに及ぶことは是なり始めの計算にては專ら過激の政談家を根絶やしにして其害の社會に及ぶを防がんと欲し既に其業に著手して青年輩をのみ抑制せんとすれども俚言に云ふ狐、社に寄れば之を薫ぶ可らず鼠、器に托すれば之を打つこと難しとの道理にて彼の過激なる政談家も身を社會に寄托するものなれば今彼等を防がんとせば勢ひ社會を擾すあるを免れず過激政談家の社會に害あるを除かんとするは好けれども元來彼等は社會に寄托する狐鼠同様の者なれば其之を驅除するの際、誤て家を焚き器を毀つは必然なり斯ては廣き社會の災害たること小政談家の害よりも甚しく寧ろ始めより放棄して問はざるの優れるに若かざるべきなり喩へて之を言はゞ社會に過激政談家の存在するは猶ほ廣野に惡草の生ずるに異ならず惡草の害固より多し願くは野に惡草なからんこと實に希望の至りなれどもその之を燒拂はんと欲して野に火を放ち少しく烈風に逢ひ又は野枯れの節なるに於ては火勢四方に燃え廣がりてその烟燄忽ちに天を衝き火炎の向ふ所は良材惡草の嫌ひなく悉く燒き靡びかせて今は消防の術に苦み始めには己が手を以て火を放て後には又之を消さんとし百万焦熱の中に奔走すれども火氣烈しくして當り難く、思はざるの珍事を引き出して遂には唯だ茫然たる計りなるべし野に惡草あるは良材の爲に誠に有害なるべしと雖ども去逆無分別に火を懸てその惡草を燒かんとせば假令ひ最初の目的は如何なりとも後には自から放ちたる其火の始末に苦んで之を消防するにも術なく可惜、良材をして惡草と共に灰燼たらしむるとは亦殘念至極のことなりと云ふべし左れば今の憂世家が青年の政事談を憂懼して之を鎮むるの策を考へ其策は唯此の如しと事もなげにその手始めを爲し期する所は此社會より惡草同然の政事家を燒拂はんとし既に中途まで其策を行ひ若し萬一の事よりして烈風火を吹きその火勢意外の場所に燃出だして社會の全面に火移りせば今は又小政事家の燒拂に盡力

す可らざるのみならず却て己れの手より懸けたる火災を消防するに忙はしく或は其火災を鎮むるを得ば偶然の事實なれども遂には之を消すの術に盡き烟燄瀰漫して社會の人も我も共に火中の鬼となることなしとも保證す可らず即ち自から火事を出だして又自からその始末に困むものと云ふべしこの有様は決して想像上の空理にあらず若し一步を誤れば往々これに陥る者なり憂世家の心事は我輩も之を知らざるにあらずと雖どもその手段に至ては實際その計算に的中して曾て誤りなきを期すべきや否や憂世家更に之を再思する可なり（明治十六年十月十五日）

文明進歩の速力は思議すべからず

今の西洋の文明開化は蒸氣電氣の二元素より成立ちたるものなることは我輩の常に論辨する所にして世人が認知する所の事實なり此二元素の發明は西洋に起り西洋人先づ此二氣に觸れて其征服する所となり政治なり兵事なり農工商事なり人間の事一も此二氣に向て降を納れざるものなし實に人間古今未曾有の強大力なりと云ふべきなり人若し電氣の力を假りて音信を通ずるときは五千里外の人も同室に異ならず又これを假りて夜陰を照らすときは光明日月を欺き人其業を執るに夜を以て日に繼ぐべく暮夜必ずしも睡眠するの要なし蒸氣の力を假りて船車を駆れば萬里の絶海風濤の險も人をして行路の難きを感じしむるに足らず峻山窮谷天然の險阻も人の往來を阻むに足らず又これを假りて工事に使用するときには山も抜くべく海も涸らすべく鐵艦堅城を作るには紙張子を製するよりも容易なるべし實に此二氣は古來人爲の法則を撼して其基本より顛覆するのみならず人間を煽して天を凌がしむるの自在力なりと云ふべきなり西洋人は先づ此自在力に採立てられ慌忙狼狽の中にも漸く此力の使用に慣れ心に欲して成らざる事なく心に欲して

行ふべからざる所なく縦横奮迅遂に世界を小なりとするの氣概を生ずるに至りたり世人或は西洋人の跋扈甚だしきを見て後來の世相を豫想し他年一日東洋西洋兩人種の間を衝突を來し優勝劣敗の大紛争を起すの時あるべしとの説を爲す者あれども此説未だ世界の實狀を審かにせず唯東西洋兩人種の人口の多少を比較して卒然其争を想像するものに過ぎず若し人口のみを以てせば東洋の西洋に超過するは二倍よりも尙ほ多し故に往古の戦争の如く一人一騎、手と手と相搏つ様のものならんには東洋人も亦西洋人の好敵手なるべしと雖ども今日の文明世界の實況はこれに異なり西洋人の向ふ所天下に敵なく其跋扈凌辱を恣にして敢てこれを支え得る者なきは其人口の多きにもあらず又其智力筋力の大なるにもあらず唯其人の乗駕する當代文明の元素たる蒸氣電氣の二力強且大にしてこれを能く支るものなきのみ即ち西洋人の向ふ所天下に敵なきにあらずして蒸氣電氣の向ふ所天下に敵なきのみ然るに今全世界中に於て西洋人獨り此二力を使用して天下を横行し東洋人の如きは茫然唯他が自在力の大きなるを傍觀して禍の將に己れに及ばんとするを知らざるなり甲乙二者の力相等しきものならばこそ衝突の恐もあるべし鐵槌を以て豆腐を叩き磐石を以て鳥卵を壓す何の衝突かあらん何の紛争かあらん西洋人が東洋人の中を驅廻はるは鳥の空中を翔り魚の水中を行くと一般にして進退自在尋常の知覺にては其抵抗を感ずること難き程のものなるべし果して然らば他日東西兩洋人種の間を衝突を起すこともあらんと云ふは唯己れの力を測らざる東洋人の勝手論のみ決して道理ある言にあらざるなり然れども文明の元素たる蒸氣電氣は西洋人の專有品にあらず東洋人も亦これを使用して大に彼れと對峙するに妨なしと雖ども如何せん西洋人は其使用に慣熟すると共に益其用を廣大にすることを勉め日進月歩、丸の坂を下るの勢も嘗ならず願みて東洋人を見れば文明紀元前の舊夢未だ全く覺めず僅かに蒸氣電氣を使用することを學び得て忽ち又疑懼躊躇して其背後を顧

み進むが如く退くが如く日進月退車の坂を上るの勢に異ならず今の有様を以てこれを視るに東洋西洋文明の懸隔は日に益甚だしくして到底相近接するの期なきものゝ如く然り今にして考れば東洋人にして西洋人と比肩し文明の通路に馳せんとするは其志の壯なるや嘉すべしと雖ども實際の大勢より察するときは時機既に去て追ふべからざるものなりとの感情なきを得ず唯鋭意奮進して怠ることなくば幾分か人後に逡巡するの汚辱を減じ得るの幸福あらんと云ふに過ぎざるのみ

今や文明進歩の迅速なる實に驚くに堪えたり海に航するの汽船は日に其速力を増し陸に横はるの鐵道は日に其延長を加へ電信線は益其蛛網を張り軍艦砲銃は益其堅牢精銳を加へ「スエス」の運河は一道にして不足なれば二道にせんと云ひ「パナマ」の運河は來る明治二十一年を期して其工を竣るべしと云ひ日本の國會に先だつこと二年なり思ふに太平洋を横斷して米國より日本に達する海底電信線も必ず亦明治二十三年を俟たずして布設成功の日あるなるべし實に文明は隅田川の水の如く晝夜を舍てず人を俟たざるものと云ふべきなり我輩數日前時事新報停止の閑を幸に篋底の故紙を理するに際し中に在香港の或る外交に通達したる知友の寄贈に係はる明治十四年一月認めの一書あるを見出し一讀する中に安南事件を論じて「彼の安南事件は其後如何の模様なるや一向に分らず始と天上の事を聞くの感あり佛國の策略も格別念入りたるものにてはあるまじ察するに該地方も今より三四十年間は先づ無事平穩の仙境なるべし云々」とあり我輩今日の眼を以てこれを一讀すれば其言の不當なる固より論を俟たずと雖ども今より二年半前に在て當時此書翰を讀みたる時は我輩決して此言を以て時勢を知らざるものと爲さざりしなり然るに何ぞ圖らん明治十六年の今月今日此無事の仙境は早く既に佛蘭西共和國の屬地と變じ了らんとは但し此事必ずしも安南に限るべからず支

那朝鮮何ぞ安南と擇ばん文明の進歩は朝夕を謀るべからず油斷の禍は身を亡ぼし家を亡ぼし又國を亡ぼすべきものと承知せざるべからざるなり（明治十六年十一月十六日）

饑饉の用意

第一

饑饉凶年は一身一家の大事なるのみならず一郷一郡續きては一國の大事なるを以て豫めこれに備ふるの用意を爲すことの甚だ肝要なるは固より論辨を俟たず我日本の如き徳川幕政の古より大に凶荒豫備に心を用ひ人民をして饑饉の慘毒を免かれしめんとするの工風甚だ多く其精神は傳へて以て今日に至りたるの跡歴々聞見すべし凶荒豫備の大切なる古今の異同なしと云ふべきなり

凶荒豫備の大切なるは固より古今の異同なしと雖ども其方法如何の一事に於ては時の古今によりて其適否に大差異なきを得ず其方法にして宜しきを得ざらんか假令其意の何様に善美なるも事實に益する所極めて少なく甚だしきは善果を豫期して却て惡果を收むるの恐あるが故に必ず先づ其方法の適否如何を講究するは此事を實行するに當りて第一の緊要事なるべし

從來我日本にて饑饉豫備の方法を見るに唯米穀を蓄積して凶年を待つを以て最上の良法と爲すもの全國を擧げて皆然るが如し昔日時運否塞鎖港孤立の際に於ては饑饉の用意にとては唯現物の食料を儲蓄するの外に安全の方策なかりしは當然の理にして今日決して其非を尤むべからず然れども此米穀儲蓄の費用の大なる決して尋常一様のものにあら

ざるが故に今日にして苟くも此費用を減じ或はこれを避くるの方策あらば直ちにこれに依頼せんと欲するは固より我の本心なるべし今米穀を儲蓄するの失費を擧ぐるに先づ多量の米穀を買入れんとするときは大に時の相場を引上げ高き價を拂はざるを得ず次にこれを圍ひ入るべき倉庫の用意なかるべからず次に米穀の性質純良ならざるか或は圍ひ入れの方法宜しからざれば腐化米と爲るの憂あり次に十分の注意を以て首尾よく買入れ首尾よく圍ひ置きたりとて今年を米を來年に持越し更に其處置を了るまでには案外澤山に升目を減少するの憂あり次に米穀の買入れよりこれを圍ひ入れて又これを處置する時に至るまで勞力と費用とを要すること決して少なからず次に又米穀買入れの元金より一切の諸入費に拂出したる金員は一文の利足をも生ずることなし此等の事を勘考して一切其勞力と費用とを合計すれば米穀儲蓄に關するの失費は極めて洪大なるものたるや明白なり不幸にして儲蓄の翌年忽ち饑饉の襲來に遇へば其功能の洪大を以て其費用の洪大を償却し尙ほ餘りあること固よりなりと雖ども幸にして饑饉凶荒は度々此世界に襲來するものにあらず我日本に於て數百年來の實驗によれば大饑饉は五十年に一度位のものなりと云へり此間兩三度の小饑饉あるものとするも十五年乃至二十年に一度米價の騰貴あるに過ぎざるなり然るに不幸にして人間に饑饉を前知するの明なき以上は一度の儲蓄を以て一度の饑饉に當たること能はず二十年乃至五十年間一度の手柄を目的として年々歳々多量の米穀を儲蓄して又これを散ぜざるべからず一年の儲蓄其失費業に已に甚だ大なりこれに二十乃至五十を加乘すれば饑饉豫備の費用實に莫大なりと云ふべきなり

然るに今は古と替はり明治昭代の難有さは外國貿易年に月に盛んにして前年鎖港時代の不便を套襲するを須ひず日本内地の米穀不作にして米價漸く騰貴し一石の價正金七圓内外に達することあらんか世界中にて米の本場と稱せらる

る安南以西の熱國地方より續々食料の米を輸送し來りて其分量を限らず終に吾人をして饑饉の艱難を實驗すること能はざらしむべし故に簡單に云へば日本の大饑饉とは一石の米を買ふに七圓金を投ぜざるべからずと云ふに止まりて米價最下落と唱ふる今今日よりも一石に付僅かに二三圓を増すに過ぎず其廉にして簡なるこれを開港以前の饑饉騒動に對照すれば實に同國同世紀の談ならじと思はるゝなり今に始めぬ事ながら外國貿易の德澤の洪大なる人をして天を凌がしむるの思ひあるものと云ふべきなり斯る次第なるが故に今の日本國に住居して饑饉の豫備を爲さんとするには唯金を貯へ置き一旦凶年に當りて内國の食料不足するときは此金を以て世界中最便の地に就きて穀類を買入れ來るより外に妙工風あるべからず而して又此金を貯ふるの法も正金を取て庫中に埋藏するが如き古人の愚を學ぶに及ばず或は公債證書を買入れ置き或は確實なる銀行等に預け置き利倍増長の法を計るときは二十年乃至五十年目に襲來する饑饉を防禦せんとするには格別の勞を要せず一度小額の元金を備へ置くのみにして綽々餘裕あるべしこれを開港以前現物の米穀を儲蓄したるの勞力と費用とに比すれば實に雲泥の相違ならん公債又は預け金の年々に利倍増長する有様は庫中の米俵が年々子を産み孫を産みて増殖するに異ならず今一家の食料を用意せんとて公債又は預け金の法に由るに今年十俵の米代を圍ひ置けば來年は十一俵となり又其來年は十二俵一分となり年々歳々増長して彌々饑饉の襲來する二十年目には早く既に六十七俵の巨額に達し居り少しく辛抱して五十年目の大饑饉を待てば千百七十三俵の米となるべし之を彼の正物の米を圍ひ置きて年々歳々新舊を取替へ最初元入れの十俵は來年も十俵又其來年も十俵二十年五十年の後に至るも依然十俵の米に止まるものに比すれば公債を所持するの利多くして正米を儲蓄するの損多きは三歳の童子と雖ども一目これを辨知するなるべし

第二

明治十六年の天地は天保弘化の天地に異なり天保弘化の天地に於て絶妙の思案は明治十六年の天地に於て絶不妙の思案たるを免かれざること世上往々其例證に乏しからず饑饉の用意の如きも亦其一に居るものなるべし天保弘化の日本國に於ては凶年饑歳の慘毒を免かれんとするには都鄙藩縣公私の別なく唯正物の米を儲蓄するを以て最上安全の策と心得たりと雖ども明治十六年の日本國に於ては決して然らず平日唯金銀を用意し置き一旦饑饉の不幸に遇へば此用意の金銀を以て世界萬國の市場より米なり麥なり好の儘の食料を買入るべきのみ彼の正米を儲蓄するには年々歳々莫大の勞力と費用とを要するのみならず其儲蓄の米は幾十年の後に至るまで一粒を増さず一錢の利を生ぜずと雖ども米代の金銀を儲蓄し公債證書を買入れ預け金を爲して利倍増長の法に従ふときは饑饉の襲來する二十年乃至五十年目には最初積み置きたる元金の六倍乃至百十七倍の巨額に達すべし米を積むと金を積むと損益利害雲泥の相違なりとの事は我輩が既に前章に論ずる所なり

然るに世上一種の論者ありて只管正米を儲蓄するの利を説きて曰く米を積むと金を積むと後の金を積むの方に利多きこと固より論を俟たずと雖ども如何せん目下我日本國の文化未だ十分の程度に達せず海に汽船ありと云ふも三菱の一家と共同運輸會社の纜かに其芽を現はしたるとに過ぎず陸に鐵道ありと云ふも其短きものは七八里長きものは二三十里全國の各線路を合計するも百里に満たず馬車人力車以て其缺を補はんとするも山に坂路ありて河に橋梁なく小日本島内東西南北の隔絶管に秦越のみならず斯る交通不便の國に在りては尋常金を積みて饑饉に備ふるの法に由るべからず必ずや天保弘化の古法を因襲し正米を積むの外に妙策なきなりと此説一理なきにあらざる又言外の味なきにあらざる

と雖ども此説にして眞實に正米儲蓄を賛成するのみの意ならんには我輩は大に不同意を唱へざるを得ず目下日本國內運輸交通の不十分なるは固より論者の言の如し早く國內に鐵道を布設して縱横蛛網を施すと大に造船航海の業を勵まして海國の民たるに愧ぢざらんとするとは常に我輩の希望する所にして論者も亦嘗て聞知する所ならん然れども汽船鐵道の用意尙ほ未だ我々が希望する所の點に達せざるの一事を以て直ちに饑饉の用意に正米を儲蓄するの理由と爲すを得ず何となれば正米を儲蓄するの損は金銀を儲蓄するの損より二十年乃至五十年の間に六倍乃至百十七倍の多きに達するものにして假りにこれを全國人民に配當し三ヶ月の食料を用意せしむるとして七百萬石の米を要すとせんか七百萬石を儲蓄して二十年乃至五十年間繼續するは米代の金銀を儲蓄すると比較して四千五百萬石乃至八億二千萬石の米を取りて一炬烟焰に附するに等しく目下日本の運輸何様に不十分なりと雖ども二十年乃至五十年の間に一度襲來する饑饉を防禦せんがために四千萬乃至八億の米を空しく火中に投ずるの要なければなり試みに目下内國各地の米價を比較して運輸の實況を視察すべし東京は内國海外運輸交通最便の土地なり然るに東京の米價を取りて全国各地の相場に比較するに奥羽北越米穀最廉の土地と雖ども東京の相場より廉なること一石に付僅かに一圓内外に過ぎず全國の米價平準を得ずして何故此一圓内外の差異あるやと云ふに奥羽北越の市場より東京の市場に米を輸送するには一石一圓内外の費用を要すと云ふがためのみ果して然らば目下日本の運輸は東京を中心として全國各市場に往來するに一石一圓内外に過ぎざるものと知るべきなり不幸にして他日全國の大饑饉に際し東京の米價一石正金七圓に上騰し俗に南京米と唱ふる印度地方の米穀續々東京に入津する場合あらんには東京は又此米穀を全國一般奥羽北越の地方にまでも運送して奥羽北越の米價は一石八圓に上るなるべし或は其山間僻陬の地方に在りては更に市場より運送の費用を要し

て一石九圓内外に上るの恐もあるべしと雖ども既に用意の金銀さへある以上は一石九圓の米價のために饑饉の慘毒を嘗むるの憂なかるべし然らば則ち目下日本の運輸甚だ不十分なりと云ふと雖ども凶年饑饉の米價をして全國東西南北を通じ一石正金七八九圓を超過することを許さず七八九圓の米價のために慌忙、正米を儲蓄して四千萬乃至八億の米を殄滅することを愛まず是れ我輩が論者の説に同意すること能はざる所以なり

論者又曰く正米を儲蓄するの損多くして公債預け金の法に由るの利多きに如かざること、運輸の便未だ十分ならずと雖ども既に文明の器具を採用するの端緒を開きたるの今日幕政の昔と同日に語るべき者ならずとの事は必ず時事新報の論の通りなるべし然ども饑饉の憂は國民が油斷睡眠の中に卒然襲來するに在り人々凶年の評判を聞くも敢て俄に戒むることを知らず尙ほ悠々春風の中に笑樂して供給の乏しき米を多く費消し一旦食料の將さに盡きんとするを覺るに至りて兼て用意の金銀を携て世界の市場に奔走し首尾よく廉價の米穀を購ひ來りたりとて此間少なくとも三四ヶ月を費さざるを得ず米船東京灣到着の上更に又各地方に分配するため又半月乃至一ヶ月を費さざるを得ず前後四五ヶ月にして前きの金銀を米に變じ又飯に炊き始めて饑者の口に入るを得べし饑者は一日の生命を争ふものなり四五ヶ月の後に富士の山ほど米を積むも既に絶へたる玉の緒をば再び續ぐの工風なかるべしと此説亦誠に一理あり國民が未來の出來事を豫算し能はず卒然盛夏より嚴冬に移り嚴冬を出で、盛夏に入るが如き極端の變化に遭遇するは一身のため一家一國のため其不幸これより大なるはなし況や凶年饑饉の時の如き其饑饉たるを知らしめず故らに米價を廉にして其浪費を勵ましたるの後卒然米既に盡きたりと告知して顧みざるが如きは其不仁罪を國中に作るより甚しかるべし論者の杞憂亦決して謂はれなきにあらざるなり然りと雖ども明治十六年の今日に於ては日本國民をして未來の事を豫算

し極端の變化に苦ましめざること甚だ易し他なし全國各地の米相場所をして其働を自由ならしめ管に二三ヶ月後の賣買を豫約せしむるのみならず五六ヶ月乃至七八ヶ月の後をも賣買せしむること、すれば農商民の自家の損益に敏捷なる一雨一風も等閑に看過せず五六ヶ月乃至七八ヶ月の後までも巨細に計算し一絲一毫の變化をも遺さずこれを相場所の賣買豫約相場表面に現はして全國人民に明告すべし人民は此指針を見て未來の計畫に従事し豊年饑饉これに應ずるの策に狼狽せざるべきなり七八ヶ月の未來既に明細に豫算すべし何ぞ金銀を懐にして饑死するを要せんや
 以上は我輩が信じて以て饑饉用意の最便法と爲すものなり其主意唯三つ曰く米代として金銀を積むべし曰く道路の便を盛んにすべし曰く米相場所の働を自由ならしむべし以上是なり饑饉の用意亦甚だ容易なるのみ（明治十六年十二月十五日及び十七日）

宗教道德

道德の議論は輕躁に判斷す可らず

善を善とし惡を惡とす即ち道德の主義なりと雖ども其善惡とは何を標準に立たるもの歟これを斷する甚だ易からず唯其一世に在て多數の善とする所のもの即ち善にして其惡とする所のもの即ち惡なりと云ふ可きのみ而して文明開化の程度略相等しき人民に於ては自から其標準を一にして大なる差違を見ざれば善惡の標準は時代の前後と人文の開否とに従ひ民情風俗の中に在て存するものと云て可ならん故に開明其度を等ふすれば道德の標準も亦其度を共にして差

違なしと雖ども各國の古俗舊慣に従て重軽する所全く一樣なるを得ず例へば慈愛孝行の如き親子たるもの、徳義として之を重んぜざるものなし西洋東洋の諸國正に同一様にして其所謂國教の書に記す所も嘗て異なるなしと雖ども實際に行はるゝ所を見れば少しく趣を變じて彼に重んずるものを此に輕んじ、此に輕んずる所を彼に重んずるの差違あるが如し蓋し世の論者が道德の事を語り東西主義を殊にすと云ひ東洋の道德主義は西洋に優ると云ふが如きも唯彼此の習慣に於て輕重の差違あるを知らず、己が習慣の眼に怪しきものを見て之を怪しむに過ぎず、一方の極端を見て一方の極端を忘れたるものに過ぎざるなり

極端を論ずれば論ず可きもの甚だ多し西洋は不孝の國なり心身の獨立を尊ぶの旨を擴張して親子の間にも波及し、苟も丁年以上の子は子にして子に非ず親子既に財産を分離すれば互に相依らず互に相助けず父子財を争ふて法廷に訴るが如きは尋常のことにして怪しむ者もなし男子身を起して一家を成すときは其家は即ち其主人の家にして父母は其富貴の餘澤に與かるを得ず甚しきは子は車馬に乗り大厦高樓に住居しながら老父は普通の役夫傭丁にして日の賃錢以て自から養ふに足らざるも捨てゝ之を顧みず世間に於ても大に之を咎る者少なし某家の老人眼盲足跛起居不自由なり其子其妻と之を遇する甚だ殘酷にして衣食さへ十分ならず食事の度びに給仕も面倒なりとて粗大なる木の器に蒸餅も汁も一處に掻き交ぜて之を與へ盲老人の勝手に之を喰ふに任ずること豚犬を畜ふに異ならず然るに無心なるは小兒なり此家の一子三歳計りなる者が或日物置の邊より古き木片を拾ひ來り小刀もて何か細工して餘念なき様なれば夫婦の者は之を怪み何事をするぞと尋ねけるに小兒は父母を顧みて笑ひながら阿爺も追々年老すれば盲目と爲り足も跛ることならん其時には食物を與るに穢き器なる可らず今より之を用意するものなりとの返答にて夫婦も之に落膽したり

との話あり是れ或は一場の奇談にして人を警る爲に假に設けたるものならんと雖ども亦以て不孝薄情の極端を窺ひ見るに足る可し

右は西洋の事なれども東洋の道德に就ても其極端を論ずれば論ず可きもの亦多し即ち東洋は無慈悲の國にして子は孝なるも父母は慈ならざるものと云ふ可し子を育するに其口腹を養ふて其精神を教へず犬馬を飼ひ草木を植るによく費して子女の教育には錢を愛しむ或は其子漸く成長して自から志を起し學問に従事せんとするも父母に妨げられて其志を遂るを得ず、強ひて奮發する者あれば之を不孝と稱す、凡そ我日本にても今日社會の表面に立て事を爲す人物にして昔年純孝の子なりしものは甚だ稀なることならん幸にして其父たる者が少しく事理を辨するの人のして子の志願を許すことあるも母の心に背きたるものは甚だ多からん、學に志す尙且不孝の一個條たり況や其他の事に於てをや生涯父母の爲に羈束せらるゝもの枚擧に遑あらざるなり尙これよりも甚しきものあり良家に生れたる女子が其家の衰勢に逢ひ老父母を養ふの爲にとて處女の身を汚がして娼妓と爲れば親戚故舊これを稱譽して世上の學者論客に至るまでも其美德を感心するものあるが如し貧家に老父母を養ふ固より其手段に窮することなりと雖ども貧に處するの道必ずしも賣淫の一法に限らず之をも忍ぶ其一念を以て他に生計を求めたらんには父母を養ふ亦難きに非ざる可し然るに之を求めずして容易に其身を汚がし處女の一大德義を壞て意に介せざるは何ぞや天下の輿論これを許すが故なり嘗に之を許すのみならず又隨て之を稱感する者ありて娼妓の醜中却て美を存するの意味あればなり西洋諸國にも娼妓甚だ少なからざれども其業たるや最も世に賤しめらるゝものにして良家の門に出でざるは無論、悉皆自暴自棄の無頼婦人のみなれども日本國に於ては孝子の門より娼妓を出だして往々泥中の蓮なるものあるは東西習慣の異同を見るに足る可

し畢竟我國道德の習慣に孝を重んじて慈を輕んじ其輕重の思想極端に陥りたるの弊にして本來無辜の女子輩が自から知らずして身を傷ふものより外ならず尙又これよりも甚しきものあり父母の年齢尙未だ勞役に堪へざるの極老に非ずして其男子は正に働く可きの壯年なれども家甚だ貧なり然るに一女子の顔色美なるものありて或る富豪か又外國人の外妾に雇はんとの談を聞き女子は唯父母の命是れ從ひ、過分の月給に身を代てより以來一家俄かに面目を改め父母は則ち樂隱居にして家兄も亦必ずしも勞役するを要せず五口の家族一女子の肉體に依て生活する者あり、世論會て之を怪まず、偶ま之を聞見する者あれば唯其娘の神妙なるを感ずるのみ我輩獨り驚かざるを得ざるなり此女子孝は則ち孝ならんと雖ども其孝徳は女子一人の徳にして父母兄弟の徳義は何と評す可きや蓋し阿非利加洲の内地には人の肉を喰ふ人種あり洋語に之を「カニバル」と云ふ會て之を聞て悚然に堪へざりしが何ぞ料らん文明開化の上流に位する我日本國內に於て今日殊愛の女子の孝徳を喰ふて其身を喪さしむる者あり悚然たらざるを得ず凄然たらざるを得ず且此事たるや一家の徳義を壞るのみならず廣く一國殖産の上より論ずるも之を許す可らず其父母兄弟尙勞役に堪へ正に之に服す可き心身ありながら特に一女子の爲に却て其懶惰を促すが如きは女子の美德は徒に他の惡徳を招ぐの媒介にして天下の富源たる勞力の一部を減却するものと云ふ可し

以上二様に開陳する所は我輩が殊更に東西道德の極端を示したるものにして固より以て其全般を判斷するに非ず西洋の人決して孝徳を重んぜざるに非ず日本の人固より慈愛の旨を貴ばざるに非ずと雖ども古俗舊慣に浸潤して判斷の明を失ふは學者も往々免かれざる所なれば苟も一國百年の計を爲さんと思ふ者は身を萬有の外に置いて眼中無一物の地位より全世界を通覽し道德の議論の如きも諸國の一利一弊を加減乗除して偏重偏輕の輕躁を慎み以て笑を後世に遺す

なきを勉む可きものなり(明治十六年五月十日)

文明の風を導くには取捨する所あるを要す

日本の文明開化は少しく急進に過ぎたりとて近來世間に一種の議論を生じ其主張する所を聞けば新様の廢す可きは之を廢し舊物の復す可きは之を復し漫に輕躁浮薄に走らざるを以て旨とするもの、如し又其實際に現はれたる所を見れば舊き漢學も廢す可きに非ずとて儒教主義を再興し漢學再興すれば古學醫流の死灰も亦再燃し洋食洋服以て洋風の家に入るも殺風景なりとて漸く舊時の日本流に復り琴棋書畫骨董の遊樂は朝野上流の社會に行はれて家庭の教訓には仁義忠孝を語り春風秋月には詩歌の清會を催ふす等人間萬事古雅にして然かも其情の優しきは安樂太平の世に至極神妙のことにして見苦しからず亦是れ文明の微なれば我輩固より異議なしと雖ども一利あれば之に伴ふ一害を見るも人事の常にして漢學再興と云へば不學無術の古學者流が漢字を教ふるの傍に奇妙なる支那主義を説て直接間接に文明開化の妨を爲し春風秋月の樂に乗すれば物理の實數を忘却して琴棋書畫の風韻は器械學の元素と全く相反對し開明多事の日には有爲の少年輩を誤るもの甚だ多し事物の弊害を免るゝの難き以て知る可し

左れば急進の新様を棄て、舊物の復す可きを復するは我輩の賛成する所なれども之を棄て之を復するの際に全く弊害なきものを選ぶは我輩の最も賛成して之を聞見するも欣喜に堪へざるものなり今この種の事を求めて我輩は爰に先づ其一項を得たり即ち葬式の法是れなり抑も我日本國にて太古の事は知らず百千年來人を葬るの法は一に佛者に任じて上は至尊の帝室より下庶民に至るまで死して佛に歸せざるはなし然るに維新以來人事の急變劇進の際葬式の法

文明の風を導くには取捨する所あるを要す

も亦其變進中の一箇條にして神葬なるものを始め其式全く新奇にして大に俗間の耳目を驚かし俗人は之を聞見して是れも文明開化の一箇條ならんと驚きながら今日まで見送りしことなれども今や社會上流の或る部分にては我文明は行過ぎたり、進むに過急なりき、廢す可きは廢せん、止む可きは止めんとて大に發明したる上は兎に角に之を廢止して差支なきものは彼の新奇なる神葬ならずや之を廢止すればとて人民忠孝の心を薄くするに非ず、文明開進の路を妨るに非ず、奇怪の主義を弘むるに非ず、人事を輕疎ならしむるに非ず、唯却て風俗の驚駭を除去するに足る可きのみ人或は云く宗教は人々の自由に任ず葬式の法即ち宗教の事なれば他の喙を容る可き所に非ずとの説あれども是は所謂西洋説の寫眞にして我日本上流の心事を解せざる者の言のみ我日本の士人は宗教を蔑視せざれども之に頓著する者なし其葬式の神たり佛たり何ぞ之を心に關するものあらんや死者若し靈あらば神に祭らるゝも佛に葬らるゝも一樣に地下に瞑す可きのみ是即ち日本人たる所以にして其心事の洒落なる西洋人の得て知る所に非ず數年前我文明の變々乎として進歩したる其時に葬式の法に至るまで變革して無頓著なりしも我士人の本色なれば強ち之を咎るには非ざれども今や此士人に何か所見を生じて文明の進歩にも取捨する所のものありと聞くからには寧ろ宗教に無頓著なる其本色を再現して舊佛法に復するこそ經世の爲に聊か益する所あらんと信するなり若しも然らずして百千年の舊慣行にも拘はらず又自家の信心如何にも拘はらず神葬は新奇なるが故に之を執行するとあれば夫子自から著實を主張して自から著實ならず風俗の輕浮を厭ひながら其凡俗を驚破するものと云ふ可きなり（明治十六年七月二十三日）

雜 說

雪 之 說

本月二日の雪も相應の雪なりしが又候一昨夜より昨日に掛けて頻りに降り積り吹寄の處は三尺餘にも及びたり實に近年の稀有のみならず今の東京の人には生來未曾遇の大雪と云て可ならん都て人の知見を開くの法は珍らしき事に當て注意の盛なるときに之を説けば説くにも易く又其説を聽て記憶することも固くして甚だ便利なるものなれば昨今大雪の機會に乗じて少しく雪の事を説かんとす但し此説は決して新説に非ず我輩が曾て少年の時に讀たる西洋書中の記を荒増し爰に掲るまでの事なり讀者これを新奇視する勿れ

空中の氣寒して氷點以下に降るときは空に懸る濕氣の分子氷の如く固まりて結晶するもの之を雪と名づく（氷點とは華氏の寒暖計にて三十二度の處なり）此結晶したるものが相互に結合する其分子の位地方向の有様に由り光線を反射して人の眼に感觸を起す即ち雪の白色なり雪は素と清水なるが故に先づ無色なる可き筈なれども斯く太白の色を呈するは全く其分子結合の様に由るものにして譬へば無色なる水も風に吹かれて波瀾を生ずるときは水の分子の方向を様々にして所謂白波の感觸を眼に引起すに異ならず

雪の將さに降らんとするときは氣候却て寒からず蓋し物理に於て氣狀體の凝りて流動體と爲り又凝りて固形體に變ずるときは其氣體流動中に含む所の濕氣を放つを原則とす降雪の現象は氣狀體なる空中の濕氣が凝りて流動體となり

又結晶して固形體と爲るものなれば空氣中に濕氣を放つこと夥しく之が爲に氣候の寒きを覺へざるなり之に反して雪解けのときに寒の甚しきは即ち固形體なる雪を溶解するが爲に熱を要し云はゞ空氣中の濕氣を奪ひ去るが故に人間世界を寒冷ならしむることなり

顯微鏡を以て吟味すれば雪の結晶に其種類甚だ多くして凡そ九十六種もありと云ふ但し其結晶必ず六瓣にして支那人が花を五出雪を六出と云ひしは無學無器械ながらも肉眼にて其大形を見たるものならん雪の結晶は其形動もすれば破壊して正しきものを見る可らず蓋し降雪の際に空氣極めて穩靜にして寒氣極めて嚴なるに非ざれば形を全ふするを得ざるなり故に地球南北の寒帯を去て中和帯に入るときは正眞の結晶を見ること甚稀なりとす又雪の色の白くして透明ならざるは其質の氣孔中に空氣を含むが故なり若しも空氣なくば其透明なること氷の如く又硝子の如くなる可き管なり例へば人造の氷に出來の良からずして其質中に氣孔多きものは泡を束ねたるが如くにして色の白きを覺るも同様の譯けと知る可し又南北極に近き地方には時として雪の紅色綠色なるものあり是れは雪のみに限らず氷海の氷に見ることあり其原由は他なし動植物の混合して然るものゝみ紅雪を降らすなどて決して怪しむに足らざるなり

又時としては風雪に光を生じて之に映するの萬物火の如くなることあり蓋し雪中に含有する「エレキトル」は常に積極にして又之を化學上に分析するに雪の水に酸素を含むの割合は雨水河水よりも多し蓋し其光を生ずるも「エレキトル」の作用ならん又雪の水に鐵の酸化して錆を生ずるの速なる理由も其酸素の多き事實を以て之を解く可し又造化の經濟に於て雪の功用甚だ少なからず千山萬嶽に降り積りて其解ること急劇ならず地面を濕すこと徐々なるが故に急雨の滂沱たるものが萬物を荒らすの比に非ず、極熱の地方に於ては雪山より吹き卸す風を以て防暑の用を爲す可し、

寒國に於ては雪は恰も動植物の蒲團にして穀類野菜草木の苗をして其生を積雪の下に保存せしめ牧獸野獸百禽をして積雪の蔭に身を潜むるを得せしむ可し三冬枯寒にして雪なくんば假令ひ中和帯の地方に於ても禽獸草木は殆ど孑遺なきに至らんのみ高山に生じたる草木を里に下して之を植へ氣候は里の方遙に暖なるも冬天雪なきが爲に枯るゝもの多し雪の功用大なるを知る可し

海面を平線として之を去ること愈高きに從て氣候も亦愈寒く高き山に四時雪の解けざる處を雪際と云ふ印度の「ヒメレヤ」山の北側に於ては雪際の高さ一萬七千尺とす但し地球の南北に偏するに從て全體の氣候自から寒きが故に雪際も亦低し「アルペン」山中北緯四十六度の處にては僅に八千八百六十尺を登て常に雪を見る可し日本の富士山の如きは其高さ一萬四千七百七十尺其他白山立山等何れも高山にして雪際に達するもの少なからず但し雪際の高低は緯度の遠近に關するのみならず其地形に從ひ或は山陰山陽等の別もあるが故に一定の規則は記す可らざるものなり（明治十六年二月九日）

時事新報の一周年日

明治十五年の今日今日是我時事新報の第一號を發兌したるの日にして爾來匆匆早く既に一年の日月を經過したり顧みて昨年の今日を見るに日本全國政黨團結の風潮其盛大を極むるの時にして苟くも政治を論議する者にして政黨員たざらざるは無く政黨員外に政治家なしと信するものから世人は我輩が明言して無偏無黨獨立不羈の心を以て時事を判ずる者なりと告知せしにも拘はらず必ずや一個の政黨新聞ならんと疑ひ疑念の頂上は陽に無偏無黨の獨立新聞と稱すと

雖ども内實は在野某政黨の機關なり否其内實は其筋の保護に露命を繋ぐ官權新聞なりなど公然紙上に記して憚らざる者あるに至れり然れども我輩は我真成の本業に多忙なるを以て此等の世評に耳を傾るに遑あらず一意社會の耳目たる義務を盡して怠ることなかりき我輩は去年三月以來官民の調和を切論し此事今の日本の國情に於て極めて急務を要するの緊務たる理由を反覆説明の際其枝葉の一言一句に付或は民權論者の怨を招き或は當局官吏の怒に觸れ停止禁錮の罪に陥りたることなきにしもあらずと雖ども我輩は依然我輩の信する所を吐露して改むることを知らざる折柄早くも一年を経過して明治十六年の三月とはなりたり斯の如く既に一年の日月を閲すと雖ども世間未だ我輩の論を是非する者あるを聞かず官民の不調和は憂ふるに足らずと爲して意に介せざるが故か或は官民調和は望むべくして行ふ可らずと爲して放擲したるが故か更に知る可らず殊に此調和策實行の當局者にして其主人の位に立つ在朝諸君の意見の如きも未だ其如何を聞知すること能はざるは我輩が大に遺憾とする所なり併しながら我輩は官民調和を以て國の最大事なりと爲して之に汲々たるにあらず唯我輩が畢生の大望たる日本國の獨立富強の其目的に達するの進路に一時多少の障礙を與ふる事たるが故に先づ此不調和を除去せんことを希望したるのみ然れども官民共に此調和に意なくば夫迄の事として暫らく之を舍き我輩は更に清道の論を捨てて目的に直進するの工夫を爲すべし終歳の辛苦遂に水中の牛溺たらしむるに忍びざればなり

抑も一國の獨立富強は兵備のみに依頼すべきにあらず商業工業農藝學藝共に併立進行して始めて之を期すべきのみ今や歐米諸國文明進歩の急速なる古來人間の豫想せざる所にして我日本の如き其時機既に大に後るゝの日に當て突然長夜の眠を覺され疾足して他の驥尾に攀らんとして未だ能はざる者には日夜惴々一旦忽ち落後の人たらんことをのみ

恐れて他を顧るに遑あらざるなり日本の開港以來既に三十年貿易も次第に盛大を致して退歩の兆なし日本商人も既に貿易の何たるを解して銳意之に従事する者たるや疑ひなかるべし然るに其實際を顧みれば終年國內に閉居して外事を知らず時に外商の來て價を問ふを待て彼我の物品を交換し以て貿易者の本色なりと心得るものゝ如し近來漸く直輪貿易の談を聞くと雖ども實際に外國の市場に立て取引賣込の業を營む者は實に寥々として晨星の如し斯の如き有様にし果して能く日本の貿易を維持し得べきや、貿易は維持し得べし、然れども其貿易の生出する利益は日本人の手中に歸せざるべし利益なきの貿易は貿易にあらず國に貿易なくして其富強ならんことを希ふは木に縁て魚を求むるの類のみ日本は古來農を以て國を成すと稱し到る處として稻田麥畝ならざるはなし然るに貿易の門戸を開て國外を一望するに米は印度産、麥は米國産の廉價なるに如かず自今以後往來交通の便利年に月に益々増進すると同時に耕作改良法の新發明にてもあらんには日本の農業は忽ち廢滅に歸するの憂なしと云ふ可らず工業の如きも二三手藝に屬すべきものを除くの外日本全國未だ一業の見るに足るべきものなし船舶兵器鐵道等は勿論衣服家具の類に至るまで其用の便にして價の廉なるものは悉皆外國の工場より來らざるはなし斯の如き勢のまゝにして進行せんには遠からず我日本人は身體髮膚のみ日本人にして身外に屬するものは衣食住居を始め一物として外國産ならざるはなき慘澹たる悲境に遭遇するの日あるを期すべし此時に及びて往日を回顧し其怠慢を悔ひて後來を戒め國を富強に復して再び獨立國の榮譽を享有せんとするも蓋し時機既に去て駟も及ばざるべし

日本をして果して富強の獨立國たらしめんとするか今の時は寸分の光陰をも空過せしむ可らざる緊要至極なる千載の機會なり此機一度去て復逐ふ可らず決して油斷す可らざるなり然るに井蛙と量見の大小を競ひ官は官たり民は民た

り紛争軌轍他の一事を顧みるに遑あらず一步を退けば一步の權利を曲ぐるなり一著を輸すれば一著の威權を損ずるなりとて眼を瞋らし腕を扼し井中の攻戰防守に暇なき折柄井外の天地は春過ぎ夏來り何時か既に秋風白露の候に在るを知らざるなり試に一考すべし兵備擴張固より一國の急務たり然れども一片の空紙直ちに擴張の實を得べきにあらず必ずや之を買ふの財なかる可らず而して此財は何れの處に就て之を得んとするか是に至て彼の官民の不調和意に介するに足らずと云ふの論も始めて其根底の固からざるを悟ることなるべし我輩は日本の獨立富強を祈る者なり左ればこそ絮々官民に忠告して速かに調和せんことを希望したるなり然るに今日忽ち一週年日に逢ひ回て官民の間柄を顧みれば我輩が一年間忠告の言論は水中の牛溺たる悲觀なきにあらず是將た我輩の不幸乎抑も亦日本國の不幸乎（明治十六年三月一日）

首府改造と皇居御造營と

第一

東京改造の要甚だ急なり然れども其急なるは全府改造の結果を見るに急なるにあらず改造の地圖を計畫するに急なるのみ唯だ其れ改造の地圖にして速に計畫を竣らば則ち全府改造の結果は明治千百年を期するも可なり蓋し牛の歩みの果敢取らざるも終に善光寺に賽し膝行者の足の立たざるも能く箱根山を越すべし最微の數も終年終月之を積みて止まざれば亦た最大の數たるを得るは實に算術の理にして物の數なり故に改造の地圖にして一たび成るを告ぐるの日は眞に是れ全府改造の成るを告ぐべきの端緒を開くの日にして其端緒より結果に至るの日は今より十年を經過すべき歟

將た百年を經過すべき歟抑も亦た千年を經過すべき歟素より未だ俄に論じ易からずと雖ども十百千年の間、時ありて其竣工の結果を見るに至るべきは亦た此日を以て卜知するを得べきなり聞く米國の民人が其建國の英雄華盛頓氏の爲めに建つる所の記念碑は年に石段一段を積みて成功を十數年の後に期せりと人或は其工業の遅々たるを笑ふものあるも若し年に一段の石段すの尙ほ積むことなくば將た何れの年を期してか全碑の成功を見るべき惟だ米國の民人能く數學の理を解せり故に年々歳々階々段々積み又た積み而して終に堂々たる英雄華盛頓氏の記念全碑を成就し來れり又日耳曼國「ライン」河畔の「コロオン」府に千二百四十八年以來建築中の一寺院あり歐洲第一の壯觀たるを期するものにして建物の長さ五百一十一尺幅二百三十一尺百本の圓柱を以て屋根を支ふ圓柱の大なるものは直徑十尺に近し千八百四十二年以來は其落成を急ぎ工事も大に果敢取りたり建築著手以來既に六百三十餘年の星霜を閱す歐洲に遊ぶ者をして一見喫驚せしむるも由縁あるなり蓋し人間の事業は必ずしも自家の一生涯中に其落成を期するに及ばず否之を期せんとするも期すべからざるなり況や一個吏人の在職中に其落成を見んとするをや數理の許さざる所なり左れば我東京の前途を思ふ者は速に其改造の地圖を製して以て全府改造成るあるの緒を開かざるべからざるなり

然れども我が東京府の當局者は此改造の急を見ざるものゝ如くにして今日に至るまで我々市民に向て改造地圖製出の事を告す而して一方に於ては水道造らざるべからず瓦斯管理めざるべからず鐵道も敷くべく石橋も架すべしとて凡そ事業は永久のものにして急の目下に迫るもの皆な之を執行し來らんとす然れども若し永久の事業にして一たび礎を東京に置かん歟乃ち他年改造の事を妨碍するもの實に此點にあるるべし試に見よ夫の東京府會の決議によりて施行する所の防火線路屋上制限及神田日本橋の兩區に跨る所の新川開鑿の如きは二三者が改造計畫の意匠に従て成る所に

して多少學術上の算用を経ざるにはあらざるべしと雖ども要するに皆な眞個の東京改造圖の計畫に従ふ者にあらざるを以て或は地圖製出の後不幸にして俱に其圖の計畫する所に適合せずして終に其線路を改め制限を解き新川を埋むる等の事を生ずるに至らんも亦未だ知るべからず況や彼の屋上制限の如き改造市區の計畫に従はずして施政上の區分に從ふを以て九段坂上公園地内綠蔭深き處に置く所の四阿屋も又た皇城の廓蔭土手番町の片た邊り茶畑廣き地に立つる所の茶の湯座敷も其麴町區の管轄内に在る以上は屋上を不燃質にして草葺き板屋根の風致を掩殺し去ざるべからざるの不都合あるに於てをや且つ夫れ改造地圖製出の前に於て永久の工事を起すは獨り改造の事を實行するの日に於て之を廢止せざるべからざるの不都合あるのみにあらず更にまた之を廢止するの費用を拂はざるべからざるものあるべし彼の十數萬圓を費して開鑿する所の新川の如き一朝之を廢止するの日に遇はゞ亦た幾萬の金を要することなるべし然らば則ち今日東京府内に起す所の永久の土工建物は素より其已むを得ざるに出づる者たりとは云へ不幸にして從來再び市内の改正に遇ふの日あるときは無益の費用を二重にすることなきを必し難し

今や永久の土工建物の起るもの甚だ尠からず而して後來に於て其特に起らんとするもの亦甚だ多きが如し東京府前知事松田君は曩に東京灣築港の事を主張し又た世の論者中一大政廳を起すこと華盛頓府の政事堂の如くならんことを謂ふ者あり其他親王宮方の宮殿や貴紳富豪の邸宅や集會所や會議場や新聞社や學校や皆な漸次に礎を東京に起さんとする者なりと雖ども要するに其事の急にして其工の大にまた其性質の永久なるは蓋し我大日本 天皇陛下が天長地久に渡らせらるべき皇居の御造營に過ぐるものはあらず聞く皇居御造營は議を明治の初年に起して事漸く近年に熟し終に頃日に至り地を某々の所に卜せんとすと而して皇居の計畫一たび成りて巍然たる宮闕の東京城頭に聳ゆるを見るの

後は假令ひ其所在の地にして改造首府の圖に妨碍を生ずるもよも之を取崩し之を建直すことは爲し得べからざるべし其れ既に之を取崩さず又た之を建直すべし則ち如何に不便利なるも如何に不都合なるも唯だ皇居所在の地に沿襲して改造首府の計畫をなさざるを得ざるべし然らば則ち皇居御造營の計畫あるの日に當りて晏然として首府改造の議を高閣に束ね去るは他年改造の事を妨碍するの端緒を坐視する者なり故に東京府の局に當る者皇居御造營の事あるを好機とし進前して首府改造の計畫に著手し速に測量の精圖を製出して之を皇居御造營の當局者に示し又た皇居御造營の當局者は其精圖を製して之を首府改造の當局者に示し彼此の計畫を斟酌して以て眞個東京城の地圖を作り之をして明治千百年に永續すべからしめざるべからざるなり

第二

且つ首府改造と皇居御造營と彼此相須て其計畫をなすべきは獨り首府改造の妨碍たらざらんが爲のみにあらず首府改造と其計畫を共にせずんば皇居御造營も亦た完全を得難きものあるが爲なり蓋し此回御造營の皇居は申すも憚り多きことながら明治當代 天皇陛下下の假殿にあらず天長地久日本歴代 天皇陛下下の禁闕たるべきものなり我神州の天子が萬國の帝王及び大統領と交際の典を行はせらるべき所なり其れ然り故にこの御造營の際に於ては我が國力に應じて宮室の美を盡し又た善を盡し以て完全を得んと欲するは人民の情に於て免れ難き所なり若し苟も國力に應じて宮室を善美にせんと欲せば則ち單に宮中を善美にするのみに止らず宮外の地宮門の外をも善美にせざるべからず試に思へ吾人が家を造り室を營するに當り必ず重も屋の普請と共に先づ門戸を建て、玄關前を聳し溝渠を通じて掃溜を掃除す固より是れ尋常家屋を普請するの法のみ若し苟も斯の如きを爲さずんば假令ひ其堂を金玉にして其室を朱碧にするも

亦た終に完全の家屋と云ふべからざるべし況んや我日本帝國の皇居をや而して我國皇居の門戸は横濱神戸の諸港にして其支關は東京なり故に若し東京にして未だ市區改造の計畫をなさず日本橋通りの豪家も煮込屋と戸を接し煉瓦通りの物干架上にも犢鼻褌の翩翩たるを見るが如きの失體を顯すあらば是れ誠に皇居の玄關前に掃溜の堆きを見るものにして其宮殿樓閣の美麗如何を問はず終に完全の御造營を得たりと云ふべからざるなり且つ方今は四海交通萬國一家の時なり故に萬國の人探奇の客、文學の士、工藝技術商賈の徒とを論せず來朝して我國光を見んと欲するもの年に月に其踵を接す而して此等萬國の人横濱神戸の諸港よりして直に進んで東京に來り萬世一系皇統連綿の 聖天子が天長地久に渡らせらるべき皇居の御造營を仰ぎ見て其建築の美を稱するも若し市街の結構今日の如きを見れば則ち如何の觀察を下すべきや想ふに彼れ國に歸るの日朋友故舊に話し著書新聞に記すに獨り皇居建築の美のみを以てせず亦た市街の醜を以てし而して日本京城第一の街路に煮込賣りの臭氣芬々として犢鼻褌翩翩たりと云はゞ我日本帝國國威の輕重と人民の榮辱とに關する寧ろ大ならずや況んや各國の帝王及び大統領來遊の日に於て皇居の完全を得ざるは實に禮の缺くる所たるを免れざるをや然らば則ち皇居所在の市街を改造して輦轂の下を美にするは國威の輕重と外交の親疎とに關係を有するものにして國權の重んずべく帝室の尊むべきを知る者の一日も忽諸にすべからざる者たるや明なり人或は曰く茹茨剪らず土階三等にし又た宮室の壞れたるを修めずして三年民を休養せるは俱に帝王の美德と稱すべきものなり古人は唯だ善以て寶とすと云へり豈に市街を飾り皇居を完美にして以て世界の人に誇ることを爲すべけんやと是れ誠に實際の情況と文明の進歩とを解せざるの言なり彼の堯の世の草昧未開にして文化の何物たるを知らざるは固より論なく仁徳の御宇と雖ども尙ほ未開の時世たるを免るゝ能はず況んや神后征韓の後に於て民力疲弊し非常の

節儉を行ふて休養の道を求めざるべからざるや亦た疑を容れざるをや然れども今の時は堯の世の如く草昧未開なるにあらず又た仁徳御宇の時の如く民力疲弊したるにあらず而して萬國の帝王大統領相互に親交するの時なり然らば則ち我が三千六百萬人の帝國は之に相當するの完美を皇居の御造營に盡すべし豈に草昧ならざるに草昧の世を學び疲弊せざるに疲弊の事をなし以て帝室をして萬國對等實際の禮を失せしむべけんや

皇居を造營するの要は首府を改造するの要の如し先づ圖を作るを急にすべし而して圖を作るの法最も鄭重を貴まざるべからず近年外國の新聞紙に伊太利國が其先王「ヴィクトル、エマニユール」の爲めに記念碑を建てんと欲し千萬金の賞金を掲げて最好の製圖を工學者中に募るの文を載せたるが東洋一小居留地の新聞紙なる横濱の二三外國新聞も亦た此文を以て廣告欄内を填充するを見たり左れば伊國は記念碑を造るすら其製圖を獨り自國に求めずして廣く歐米の諸邦に求め又た廣く東洋の片端にも求む圖を作るの鄭重なる知るべし然れども我國に於ては製圖の法を鄭重にせんと欲すればとて必ずしも伊國製圖募集の法を用るを要せず何となれば我國今日の有様に於ては募集に應じて出る所幾十百の製圖中に就て學術上より善惡適否の判斷を下すべきの工學士を得るに容易ならざればなり或は此判斷を下すべき工學士を海外に招聘すべしとの説あれども海外招聘の技術家の往々にして金錢の爲めに判斷を左右するは免れ難き所なるを以てこれ亦た不都合なりと云ふべし然らば則ち唯だ一個學術經驗に卓絶する所の工學士を海外に招聘し之をして専ら製圖の業に従事せしむべきなり左れば彼の古學者流を集め來りて古への大内は斯くありしなどゝ穿鑿し又た卒業上りの少年學士を招き寄せて學校本理の製圖を寫出せしめ又た歐米在勤歸りの官吏杯に就きて何々の建物は何ありしや杯相談し生ま相談に生ま穿鑿を加へて終に完全の製圖を得る能はず昨日の決議する所は今日の廢止と變る

習ひの飛鳥川主義を以てするは決して皇居を造營するの法にあらざるなり

右の次第なるを以て首府改造と皇居御造營と相須て速に製圖に著手せんこと我輩の希望する所なり然れども其結果を得るの日は必ずしも今日にあるを要せず或は大成する所に至りては千百年を期するも可なりとするのみ(明治十六年六月七日及び八日)

時事新報解停

時事新報は去月三十一日警視廳より發行停止の命を蒙り明治十六年十月三十一日發行時事新報第五百五號は治安を妨害するものと認め候條自今發行停止候旨其筋より達有之候に付此旨相達候事との御達に従ひ昨日まで停刊致し居たる處昨六日夜九時前幸にして解停の命を得たるに付即ち本日より舊の如く發兌す可けれども數日間、中絶のため看官に時事を報ずるを得ずして便利を缺きたるは深く謝する所なり

抑も今回の停止は五百五號の時事新報が治安を妨害するものと認められたるが故なれども其五百五號中の何れの文が治安妨害の媒介たるや社説にあるか内國雜報に在るか將た外報の部に在るか固より知るに由なしと雖ども何れにしても妨害の罪は五百五號の紙面中に在て存するや明白なれば我輩に於ては唯一面に恐縮して以後を慎む可しと覺悟するのみ從來新聞社に困難の個條は一にして足らず記者の學識容易に得べからず、筆者の文才容易に得べからず、内國の報道誤り易く、外國の通信常に速かならず、種々難澁の多き中に就て最も難澁至極と申すは會計の一事にて動もすれば出入相償はざるのみならず大抵は不足勝にして眞に利益を得たるものあるを聞かず故に從來世間の各新聞社に

ても或は結社して多人數より資本を募る歟又は二三の富で志ある人が金を出す歟又は好き都合にて好き處より保護を受る歟何れにも資金の生ずる源を得て始めて出入相償ふと稱するのみなれども其實は新聞紙發兌を一種の營業として見れば利益を得るものとは絶てなきことならん本社時事新報の如きは其創立の時より廣く社員を募りたるに非ず二三の有志富豪が金を出したるにも非ず又好き都合を求めて好き保護を得たるにも非ず唯二三四五の學者が信用を以て僅に些少の金を暫時借用し又は私産の一部分を抛ち或は各自の勞力を無代價に棄る等様々に工風して辛うじて獨立に存在するものなれば會計出入の最も困難なる新聞紙にして獨立獨行の貧社と云ふも可なり然るに今回の如き停止の命を蒙りて休業するときは其難澁や實に名狀す可らず十月三十一日より昨六日まで祝日と日曜日と二日を除き休刊の日數正味五日なり此五日の損失を日に百五十圓とするも七百五十圓の數なり貧書生の身には大金と云ふ可し加之この日數間は印刷の職工、活字拾ひの貧兒、府下配達の人足等百餘名の者共は不意に業に離れて活路を斷ち都鄙不景氣の極たる今日に在て迎も他の業を見出すを得ず唯手足を空うして茫然たるのみ憐む可き次第なりと申す可し畢竟其原因は何れに在るやと尋るに時事新報の記者が其社説歟又は雜報等に治安を妨害するものと認めらるゝが如き文を記したるが故なり實に記者の如きは政府に對して政治上の公罪を犯し職工貧兒人足等に向ては生活上の罪業を作りたる者と云ふ可し

記者も斯る事と知らば何ぞ故らに宜しからざる文章を作て之を紙面に掲載することを爲んや唯機轉に乏しく其罪たる可きを知らずして罪を犯したるものなり今更これを云ふも甲斐なきことなれば爰に之を擱き今後記者の心事の方向を明にして之を江湖の士君子に告げんとす抑も時事新報の記者は日本の國事に於て一點の私心を挾むものに非ず眼中

唯日本國あるのみ商賣の事を論ずるは日本國の商賣をして盛ならしめんと欲するものなり、學問の事を争ふは日本國の學事をして近事文明の正に歸せしめんと願ふものなり、兵論も日本國軍の強盛を祈るものなり、政論も日本政府の強大を目的とするものなり、而して其商賣を行ひ其學問に従事する人は何人たるも之を問はず其兵權政權を執る人は何れの種族にても之を論ぜず唯日本國人が日本國に居て日本國の商賣學問兵事政事等を盛にして外國に愧ることなく平時は飽くまでも情誼を盡して外人に交り不幸にして事あるの日には相對して曲直を争ふの國權を維持すれば我輩の冀望は爰に達したるものにして秋毫も不平あることなし世間或は其事を論ずれば身躬から其事を執らんと欲する者なりと臆測推量する輩もあらんれども事を論ずる者必ずしも事を執る可き者に非ず例へば我輩が商賣工業の事を言へばとて其實際に當りては果して失敗することも多からん學問とても我輩敢て學者を以て自から居る者なれども唯其一部分を勤むるのみ況や兵事政事に於てをや學者の直に關係す可き事柄に非ざれば我輩は終始これに直接するを好まずと雖ども直接の關係なき事に就て局外より論ずる者あれば當局者は其論を取捨して之を實際に施す可きのみ國の爲に大利益ならずや讀者尙茲に不審ある歟近く喩を取て俗様に之を示さん男子が婦人の事を論ずるも婦人の服飾を剝取りて自ら婦人の服を服し婦人の言を言ひ婦人に代て婦人の事を行はんと欲するに非ず老者が小兒の事を評するも小兒の玩弄物を横奪して自から小兒の獨樂を弄び小兒の竹馬に乗り小兒に代て小兒の戲を爲さんと欲するに非ざれども爰に婦人論あり又小兒論あれば婦人小兒は之を聞いて身に益するあるも損するなきや必せり婦人小兒たる者が世の中に婦人小兒論の多きを以て自から利することを得るものならば我輩が商賣工業の事に就き又學事兵事政事等に就て論ずることあるも自から其局に當る者を利することある可きや疑を容る可らず唯我輩に於て他人の事を我手に執り躬から之を

專にせんとするが如きは本意に非ざるなり江湖は誠に廣きものにて人生の事業も亦誠に多し事業多ければ各其好む所に從て快樂を取る可し是ぞ所謂人間の自由にして目出度き世相と申す可きなり諺に河豚クワメ人ニハ知レジ河豚ノ味とは之を食はざるものは其味を知らず相互に味を知らざるものは亦相互に羨むこともある可らずとの意ならん商工には商工の味あり學者には學者の味あり兵事の味、政事の味、各々自家固有の旨味を含み此旨味は當局者にして始めて眞を知る可きなれば唯應さに自から之を嘗めて可なり自から嘗めて旨きを覺へ他人も必ず之に垂涎するならん臆測するが如きは自家の嗜好を以て他人の口腹を測る者と云ふ可きのみ人生各其地位を殊にして各其精神を養ふときは嘗て他人の事に垂涎せざるのみか却て他を憫笑して他の己れを羨まざるを怪しむの境界に達す可し斯の如くして始めて心事の高尙なる者と云ふ可し在昔和漢の政府專制の世に人間社會を唯政事の一元素にて支配したる時代に在ても尙且琴書風流を以て王公に傲るなどの語あり畢竟其情實を糺せば時の有志輩が不平の餘りに奇妙に身を處して俗に所謂負け惜みの言なる可しと雖ども是れは古代不文の世に在て然るのみ今や文明開化世務の事項甚だ少なからず政事の一元素を以て社會の全般を掩ふ可らざるのみか政治其物も亦唯人事中の一項目にして政治なり兵事なり又商工學事なり百般の世務各一世界を成して富貴功名各其中に在て存せり何ぞ必ずしも其一に偏して汲々たるを須たんや願くは天下の士君子も其眼界を濶くし其膽力を大にし大膽大度以て小節目に貴重なる精神と日月を費すなからんこと我輩の冀ふ所なり

我輩の心事は斯の如し嘗に今後改めて斯の如くならんと欲するに非ず従前多年の心事斯の如くにして眼中唯日本國あるのみ而して其日本國を重ずるの情に至ては敢て自から之を専らにせず日本國民一人として我輩に同意を表せざる

者は莫る可し況や政府の當局者に於てをや萬々我輩と同意同主義にして毫厘の差違ある可らず然るに此記者にして時事新報に記したるものが日本國の治安を妨害するものと政府の當局者に認められて罪を得たるは不可思議に似たれども是亦社會の事相に珍らしからぬ事なり其次第は政府は當局にして時事新報は局外なり局外の所論は何程に意を用ひて故障を避けんとするも實際に關係ある所少なきが故に其趣旨淡泊にして獨歩直行に偏するの弊なきを期す可らず之に反して政府は日夜萬般の衝に當て前後左右關係の中心と爲り其政機の緻密なること精細微妙の器械の如く此に突て彼に揚り彼に揚りて此に鳴り或は今日之を突て明日の揚るを留め或は前月に鳴りたるもの今月に其響を覺ることもあらん精々細々妙々なる其趣は人に語る可きに非ず人の問ふ可きに非ず固より局外の眼を以て窺見る可きに非ず所謂政事の樞密にして至極大切なるものなれば此政機と新聞紙と相對するときは假令ひ其紙面に記しあるものが記者の眼に何と見へ又如何なる心事を以て記載するとも時として政機に齟齬することある可きや謂れなきに非ず蓋し時事新報が今回罪を得たるも其由縁は此邊に在て存することならん唯我輩は一度び罪を得たればとて容易に不平を抱く者に非ず如何となれば今後とても如何に注意謹慎するも政機は我輩の測量す可き限にあらざればなり故に一度の罰に不平なきのみならず幾回とても同様にして遂に不平を抱くことなかる可しと雖ども我輩の持論に一點の私心を挟むことなく眼中唯日本國を見て其文明進歩を祈るの情は日本國人として政府の當局者も我輩も正に同一様にして毫も輕重の別ある可きに非ざれば我輩は唯筆鋒に謹慎を加ふるのみにして本來文明の大主義に至ては政府と共に之を擴張し秋毫の末も枉るなきを期するものなり(明治十六年十一月七日)

註 十月三十一日發行「時事新報」第五百五號の社説は「西洋人と日本國」と題して「福澤全集」第八卷に載つてゐる。其説は上

下篇に分れてをり、第五百五號は其下篇の方である。(編者)

學者と政治家との區分

學問の種類を大別すれば既に我日本にも其名義ある如く法學理學文學醫學とて凡そ四類と爲し法學とは古今各國の法律を吟味して其法理を論ずる學なり理學とは物の數と時と區域とを根本にして萬物有形の性質と其働とを研究する學なり文學とは詩文章より史學哲學修身學經濟學等を云ひ醫學は則ち人身の衛生治病に關する學なり尙これを精密に論ずれば或は區分々明ならずして相互に關係し二様の名を命ずるも其實は一に歸するものある可く或は一科學の中に幾類を包羅するものもある可し故に學種の論は姑く擱き爰に其學問の用は如何と尋るに元來人類ありて然る後に起りたるものなれば一切諸學人生の幸福を進むる爲の用なりと云て可なり社會生々の人物各天賦の智愚あり又其能力に所長所短あり各其才智を盡し其所長に任じて知る所を究むる者これを學者と云ふ而して其學者にも亦二様の別ありて其一は専ら先人の所論を研究して尙未發の事を發明し以て學問界の材料を増加して以て當世の缺を補ひ以て後進に教ゆ即ち専任の學者なり又其二は先人の書を読み今人の教を受け其學び得たるものを社會の實際に施す即ち實業の學者なり例へば醫學校に於て醫書を読み醫事を研究し先人未發の醫理を求めて之を新に書に著はし又人に教ふるは所謂醫學の事にして醫學は必ずしも病床に臨で治病の術を本務とせず之に反して開業醫は學校に醫學を學び得て直に之を實際に施し唯世の人の當病を治することを司どる即ち實業の醫師なり又或は化學器械學に於ても斯の如し一室に閉居して頻りに其理を案じ試験場に於て其當否を糺し之を書に著はし口に演説して唯其學の材料を富ますことを勉る者あれ

ば其書を読み其説を聽て之を實際の工業に施し以て直に殖産を利するものあり蓋し人文今日の有様にして其進歩の途中に在らん限りは學問上に右二様の區分を缺くべからず二様共に學者の事にして社會中人以上の應さに勉む可き本分なれども一は學問の地位を次第に高尚緻密に進むことを主とし、一は目下達し得たる學問を實地に施行して直に民利國益を増すことを司る或は之を學問の分業と云ふも可ならん

右は近頃ろ新奇なる説にも非ず大抵世人の知る所なれども獨り政治の事に至ては或は之を解せざる者もあるが如し元來政治も一種の學問にして其區域甚だ廣し日本の名義に従へば法理文醫諸學の大意を辨知し世界古今文明の進退、民情風俗の異同を視察するには勉めて之を數と形とに顯はして其實證を求め、古を鑑みて今を謀り、今を處して後を慮り、先人の實驗を取捨して之を當世に施し尙後進の爲に材料を遺して益其地位を高尚に進めんとするものなれば固より學問として視る可きのみならず其目的は直に活物の人類を適とするが故に諸學の中にも最も穎敏を要するの學問なり我輩嘗て言へることあり政治學に於て民情を視察するの要訣は彼の俗に所謂小本人情本の戯作者が花柳社會の情態を寫し出すが如き緻密に至て始めて眞を得たるものなりと此言鄙俚に似たれども或は當ることあらん、政治の學問の穎敏を要して其難きこと斯の如し然ば則ち此學問部内の人を二様に區分して其一を專任の學者と爲し其二を實業の學者と爲すこと彼の醫學化學又器械學等に於けるが如くなる可き固より當然のことにして又實際に於ても必ず然らざるを得ず是即ち今日の通語に學者と政治家との名稱を生じたる由縁ならん其實は所謂學者も政治家も共に學問の事を事とするものにして等しく學問部内の人なれども姑く通用の名稱に従て學者政治家の字を用れば學者は前に云へる諸學課の一二を専門とし又其他の大意を明にして自から社會學の一門を成し目下社會の文明を論じて頻に向後の進歩

を謀り或は書を著はし或は新聞雜誌に記して世の耳目を聞かんことを勉る者にして政治家は其平生學び得たる學問を根本にして實際の經驗を重ね或は學者の書を読み或は其言を聽き自家の材料を富まして之を實地に施行し以て直に人民に接する者なり即ち其實行の地位に在る者は政府の當局者にして、未だ地位を得ざれども時を得て事を行はんと欲する者は在野の政治家是れなり之を建築に譬ふれば學者は圖を製する者にして政治家は家屋を建築する者なり製圖者の圖は建築家より見て實際に施し難き場合もあらん尙甚しきは架空の趣向なりとて擯斥するものもあらんと雖ども家屋の全體に於て或は「カラシツク」と云ひ「ゴシツク」と稱し又は日本風西洋形など、其體裁を一定して兎に角に家を毀つに非ずして家を建てるものなれば製圖者の事は甚だ大切にして之を建築の實業に比して毫も輕重あることなし建築家素より無學ならず又實地の經驗にも富みて其働は甚だ活潑なりと雖ども其活潑なる程に自から亦疎漏の患を免かれ難し圖面を一目して實施し難しと云ひ又架空なりと棄たるものが何ぞ料らん甚だ今日の實用に適して後年の大利益たる可きものも少なからざる可きを政治學の部内に於て學者と政治家の二様の大切なること亦以て知る可きなり

左れば學者と政治家と各其事を殊にすれども兩様共に大切にして其功用に大小の別なく其地位に輕重の差なきは製圖者と建築家と並立して各其事を別にするものに異ならずと雖ども爰に俗間の耳目に聞見する所にては學者が往々政治論を論ずるが故に其論者を目して政治家ならんと誤認し云く政を行ひ政を行はんと欲する者は政治家なり政治家は政を論ず故に政を論ずる者は政治家なりと理論らしく喋々する者なきに非ず畢竟するに世人の思想尙未だ精密ならず字義に於て行ふと論ずるとの別を知らずして學問部内の區分を等閑に附すると又一には古來日本國の習慣に浴し漢學者流を見るの眼を以て今日の學者を評するの罪なり前節に云へる如く學者も政治家も等しく政治學部内の人物にして

等しく政治の進歩を願ふ者なれば其所論固より一國の政事に及ぶ可きは當然のことにして毫も怪しむに足らず唯其相異なる所は一は局外に身を安んじて斷じて事を執るの念なく一は現に局に當り又其局に當るを以て畢生の心事とするの點に在るのみ其心念相異なるれば其發して外に顯はるゝ立論に於ても自から精神の相同じからざるを見る可し即ち學者と政治家との區分なれども俗眼或は之を識別するの明なし又漢學なるものは道德と政治と相混じたる一種の古學にして其流の學者に志を言はしむれば歸する所治國平天下に在らざるはなし然も其治國平天下は自から國家の政權を執り又政權に依て事を實施するの謂にして富貴功名は唯政權實施の域内のみに在るものなれば天下古今無數の漢學者にして苟も官途に地位を得ざれば宿昔の志を達したる者に非ず即ち漢學者流一般の風にして會て怪しむ者もなく世間も亦この風習に従て人事を判斷するが故に爰に政治を論ずる人物を出して其人は唯これを論ずるのみにして自から政治に當るの念なしと云ふも容易に其意味を解すること能はずして去り迎は萬人の嗜しむ富貴功名は何處に在るや、政治に當るを好まずして局外に安んずるとは人情に戻る者なり、慾を知らざる者なりと評し甚しきは偽ならんと猜疑するものあるに至るは我輩の常に遺憾に堪へざる所なり蓋し我國社會の發達尙未だ廣大ならずして人事の區別分明ならず學醫と開業醫と相混じ化學者器械學者と製造家と業を同うし製圖者をして直に家屋を建築せしめんとするが如き妄想を脱すること能はずして之が爲に商賣工業學問に至るまでも百般の事業其地位甚だ高からず地位高からざれば之を重んずるの念も乏しく自から政治外の佳境を見出して其富貴功名に安んずるの氣風を成さざるが故ならん唯我輩は我輩の道を獨歩して時節到來を待つのみ（明治十六年十一月八日）

漫 言

空 念 佛 講

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌、南無阿彌、南無、南無、嗚呼、難有や、おありがたやと云ひながら脇を向て欠伸するもあり燈明の蔭に居眠るもあり是は名主様の座鋪に村中老若男女の念佛講なり蓋し名主様は數百年來念佛宗にてありしが十五年前より文明門に改宗し駸々乎として文明の御説法あらせらるゝに付き村中も其風に靡き文々明々と進歩して彌陀の本尊も河原に持出して燒棄て釋迦の木像も敲割て下駄の齒と爲したる其曉に折しも儒教無量の國より一陣の古風吹來り忽ち文明の迷夢を醒ましてうしと見し世ぞ今は戀しく俄に佛壇の再建を企つれば又其幸便に任せて鼻の下の建立も流行し南無阿彌陀佛の稱名は低聲ながら各地方のちよんまげ糞だわしの連中を呼び起し儒教無量の聲は高らかに年少の小理窟輩を叱り付け急進變じて急退を裝ふは今日の世態なるが如くなれども此時に當り漫翁が江湖の諸君に一言を呈して近日の念佛決して眞實の念佛に非ざるを密告せんとするは蓋し翁が一片の微衷なり彼の名主様の座鋪に於て稱名の聲盛なるも座中二三名を除くの外は悉皆空念佛たるに過ぎず十五年の文明門は徹骨の新宗教にして決して忘る可きものに非ず況や西洋の大風は實物と共に吹き來りて日に老若男女の實利を左右するに於てをや念佛宗決して再興す可らざるなり村民にても少しく勘辨あるものは之を知らざるに非ず或は名主様も内實は御存じの事なれども不圖した拍子より一寸空念佛を唱出し空より空を生じて今更引くにも引かれず去迎此方に南無阿彌と

云へば一方に南無妙と云ふも自然の人情にして南無阿彌、南無妙、念佛と題目とゴツチャマゼの軋轢不調和如何に歳末年首の時節柄とは云ひながら空念佛と空題目を餅に搗て困るとは扱々目出度からぬお正月かな(明治十六年一月八日)

牛にひかれて善光寺参り

昔く大和の國に一人の老婆あり平日唯齋一方にて後世を願ふことも忘れ居けるが一日己が古ゆもじの洗濯を爲し竿に懸けて乾し置きけるに如何したりけん通り懸りの牛の角に此ゆもじの紐纏はりけるを大牛は何の用捨もなくゆもじを頭に冠ぶりしまゝ表の街道を東の方へと歩み行きけり主の老婆はこれを見て大に驚きそれ持て行かれて溜るものかと取る物も取り敢えず矢庭に我家を飛出だし牛の跡を追ひ行きけるが老の歩みの募取らざるにや牛の足並み速きにや漸くに追付き今一二間と云ふ所になりたれども未だゆもじに手が届かずハテめんようなと腹立ちまぎれ杖も折れよと突立てく此方が走れば彼方も走り頓に果てしはつかざりし斯くて道の程二三里も来りしと思ふ頃流石の大牛も歩み草臥れたるにや踏止まりて此方を振り向きたるに老婆は得たりと抱き付きやうくゆもじを取り返したるが餘りの嬉しさに腰打ち抜き起きも得上らず居たりしが不圖彼方を見上るに樓門巍々として雲中に聳え聳を並べし堂塔伽藍は目を驚かすばかりなり老婆は不審に堪えず此處はいづくぞと道行く人に問ひければ大和の國よりは二百餘里信州の善光寺なりと云ふを開き流石の老婆も忽ち菩提の心を起し厚く如來に回向して歸りたりと云へりこれを「牛にひかれて善光寺参り」とか云ふとなり

今一國の政を爲すに當り此大和の國の老婆に倣ひ心にも期せざる事ながら牛にひかれて寺詣で、仕様ことなしの大

英斷、行きなりべつたりの政略主義に由ることあらんには國の不幸これより大なるはなかるべしこれを日本に譬へて申せば支那朝鮮に對する外交政略官民軋轢に處する内治政略の如き篤と臍の下の了簡を定めて早く其用意を爲さざるべからず然るをナニ未だ焦眉の急務ではなしとて何時迄も油斷すれば遂に又大和の國の老婆たることを免かれざるべし「牛にひかれて善光寺参り」の縁起即ち斯の如し(明治十六年一月十一日)

儒教豈唯道德のみならんや

周公孔子の徳教爰に再興して人倫の大道更に新なりとは吾々の傳聞する所にして道德品行の一件に限りては支那の右に出るものなく花は櫻木、道は儒者、徳は豚尾に留さすと申して無理ながらも道德の一方だけ專賣の趣意ならんと存じの外近來は儒流の餘波を様々の處に持ち廻はり守舊一變して尊古の風を吹起し漢家古法の醫者先生が醫は意なり意を以て物理外に病を摸索すべしとて神農仲景流の御講釋あれば老儒先生は四千年前中華の「アダム、スミス」より經濟論を直傳して利用厚生の一義を語らんとす、生者必滅會者定離文明開化の惡縁も十六年の日を重ねれば何時しか起る秋風に枯木の枝の返咲、古老先生も本年は得意の春を迎へ給ひしことならん就て先生方へ御相談は斯る目出度き尊古の御代に逢ふからには勉めて其趣旨を實際の事業に及ぼして近來最も國家の急須なる航海には北海廻りの船頭を聘して運用の講釋を依頼し、山鹿流の古先生を引出して兵法の傳授などは如何、黒鉄は以て工學の教授たるべし賣藥師は以て製藥所の長たる可し或は諸葛孔明の末孫は木牛流馬を製作して蒸氣車に易ふの便法もあらん古風亦至便なりと云ふ可し吾々は木牛流馬に跨り北海廻りの親船に乗り利用厚生主義を以て商賣を營み一身の病氣には賣藥を嘗め

國家の大事には山鹿流を以て戦ひ難有く此瑞穂の國に蟄伏せんこと亦目出度き春と可申なり(明治十六年一月十八日)

主義の傳染は病の傳染に異なり

虎列刺病の流行するや其初期に在ては病勢殊に劇しくして十中の八九斃れざるものなしと雖ども其次第に蔓延して次第に時日を経過するに従て病勢も亦次第に衰へ當初の死亡十中に八九なりしものも中頃にして五六の割合に落ち終には三四の數と爲り假令ひ患者の數は舊の如くなるも死亡の慘狀は次第に減却するを常とす蓋し該病毒は次第に傳染し又傳染する其間に次第に稀薄と爲ることならん歟未だ今日の醫學を以て其理を詳明す可らずと雖ども醫師の實驗に於ては此事實を知らざるものなし梅毒も亦或は類を同ふするものゝ如し都會の地にて其傳染の繁く速かにして患者の夥多しき處に於ては其毒性稍や緩にして田舎の地方にて梅毒と云へば必ず骨痛、腐骨、楊梅瘡の如くなるものに比すれば同日の論に非ず又彼の牛痘の傳種久しきものは之を棄て、更に新鮮の種を求るも其理相同じ之を要するに傳染の毒は其傳ふる所の廣くして速きに從て次第に效力を殺ぐものと知る可し

然るに爰に此事實に反し傳染の廣遠なるに從て次第に勢力を増し又隨て性質をも變ずるものあり即ち今世に流行する政論の主義是なり抑も政論の主義とは所謂政治の針路なるものにして當初二三四五の發起人が世の中の有様を見て是れは大變なりと思ひ、底で吾々は斯の如く政治の針路を定るぞよと觸込みたるは心事常を變じたるものにして生力變常の病の如し然るに半年を過ぎ一年を経るの間によく、眼を明にして更に世の中の有様を見れば最前の大變必ずしも大變ならず其實は風聲鶴唳小變もなき程のことにして去逆は針路も斯くと定るに及ばずとて本人は漸く舊時の平

に回復せんとすれども如何せん一度觸込みたる主義は次第に人に傳へて又傳へ終に取て返へす道のなきのみか其主義の性質をも次第に變じて日々に窮窟面倒、何とも始末の付き兼ねたる有様に陥り顧て當初の發起人を見れば早く既に病み抜けて今は却て他人の看病に忙はしきものゝ如し蓋し此他人等は素と生理の法則に從て發起人の主義に感染し一生懸命に煩ひ居る者にして今日の病勢は發起の病より重きこと幾倍にして之に加ふるに種々様々の餘症を以てし中々以て鎮靜の徵候あることなし誠に困り果たることにこそ去年の夏横町の源兵衛が虎列刺に斃れたるとき看病したる店子共に傳染したれども看病人は先づ無事にて目出度かりしが今日の有様は感染したる店子共が大病變症にして源兵衛殿は病み抜けて却て看病に苦しむとは病の傳染と主義の傳染とは全く別のものなりと診斷して可ならんのみ(明治十六年一月二十日)

つがもない

自慢高慢馬鹿の中とは云ひながら己惚れの大法螺も時と場所との都合に寄りては無害無毒(今一ツ無効と云ふを加ふれば賣藥に紛らはし)座興の一種として面白きものなれども一年三百六十日朝から晩まで本氣に自慢を並らべ立つること彼の支那人の如くなるも随分厄介なる座興といふべし支那人云く我は中國中華仁義の國なり東夷南蠻北狄西戎の蛆蟲めら謹んで我徳に歸し我威に怖れ稽顙頓首百拜して下に居ると自分免許の鼻高天狗、禮儀も作法もあらばこそ勝手次第に御託を並らべ是にて世間は濟むものと落付き拂ふも笑止千萬彼の前欽差大臣如璋どんが日本紀行の詩文中に畏多くも我日本の兩陛下を指し奉りて「日本王及び其妃」と申せしが如きは豚尾漢の地金を丸出しにしたるものに

主義の傳染は病の傳染に異なり つがもない

て實に亂暴極まると云ふべし己れ其國の駐劄欽差大臣として尙其廷に勤仕の最中斯る文書を刊行するとは無鐵砲とや云はん無神經とや云はん實に人をして一驚を喫せしむるに餘りあるなり支那人の習癖常に斯の如し然るに近日は又朝鮮爲中國之屬邦とか唱へて例の手前勝手の意味論に忙はしき様子なるが朝鮮の屬國たらざる理由は時事新報が常に論辨する通りにして如何に中國の大法螺先生にても是にては一本閉口したるならんと云ふ傍より一老漢儒否な新報の議論大に誤まれり中國の所謂屬邦とは附庸屬國の屬にあらずして接屬の屬なり即ち朝鮮は中國と土壤を接屬したる隣國にして我日本の如き單獨海表に峙立したる獨立の隣國にはあらずとの意味なりと屬の字の講釋ありたるが何様は是もなる論にて支那が朝鮮に對する屬邦論は斯くなくては叶はぬ筈なり左すれば朝鮮は支那の屬國にして支那は朝鮮の屬國なり魯西亞なり日耳曼なり佛蘭西なり國を大陸に定めて土壤を接したる隣國を持つたが因果、屬國になりたりなられたりする其中にて英吉利日本ズツト離れた布哇國の如きは無類飛切の獨立國威名を天下に専らにするものにやあるべし嗚呼つがもない屬邦論判(明治十六年一月二十六日)

註 某新聞がかゝる言を成したるに對して。(編者)

新聞記者の敗北

被告新聞記者に於ては酒は人生の健康に有害なりと云へり苟も文を以て社會の耳目たる者が斯る妄言を吐くとは畢竟被告が天下の酒屋を害せんとするの惡意に出でたるものより外ならず我々酒屋の總代は記者より誤證文を捻取らざる可らずと其悶著最中に現はれ出たる者は青樓の主人で御座る記者は筆に任せ娼妓を譏毀して云く娼妓なるものは動

もすれば梅毒あり用心す可しとて天下の遊治郎を警めて以て青樓の營業を毀損したり原告總代に於ては決して承知はならぬぞと云はれて此方を顧みれば出たともく無數の原告總代人コリヤ記者よ貴様は曾て華族を遊惰なりと申したではない歟士族を無分別者と扱かしたではない歟漢學の大先生達を腐れた儒者と罵しり洋學先生をば洋僻とて西洋の僻物と明言致したぞ御百姓の事を土百姓と云ひ商人のことを素町人と稱し日本の商人は無學にして外國貿易の主義を知らずなど、漫語放言至らざる所なしマダ其上にも彼の結構なる賣藥の事杯も何とか申したる由ちらと承はりたることもあるぞ如何に筆が達者にして口が豆なりとて用捨致せば際限ある可らず原告總代に於て一々總代人を立て、營業の毀損を回復せんと存すれども其詞訴幾百件なるを知る可らざれば今回總代の總代を選擧し新聞記者が曾て日本の文明は尙幼稚にして國民無氣力なりとて我日本人民を腰抜けと申したる一言を取て押へ全國三千五百萬人の總代として營業毀損の回復を訴するに付答辨の道に窮したらば其次第を汝の發兌する新聞紙面に三千五百萬年の其間毎日廣告可致もの也(明治十六年二月八日)

註 賣藥商の營業毀損回復の訴訟に付。(編者)

又も喧嘩の買出しに來たり

無盡藏の小蔭に設立して堂々たる歟卑苦々々たる歟常に卑屈にして其僻よく人の噂する明治日報とか云ふ新聞紙の雜報に「福澤學科の改正」と題を掲げて區々一私立學校と説き出し慶應義塾の事より時事新報の論說に至るまで口を極めて罵詈したり抑も我時事新報は他より犯す者あるに非ざれば斷じて此方より喧嘩を挑みたることなし況や人の姓

新聞記者の敗北 又も喧嘩の買出しに來たり

名を掲げ又は他の社中の名を記して無禮なる語法を用るに於てをや我社の堅く禁する所なるに彼の明治日報は我々に對して如何なる宿怨あれば斯くまでに無禮妄漫なるや我々は止むを得ず彼れに向て糺問せざるを得ず言、或は苛深なる欺彼れ自から招くの罪なり恕す可らざるなり

第一福澤學とは如何なる意味歟、天文を測量する之を天文學と云ふ地理を吟味する之を地理學と云ふ或は人身學と云へば人身の常態變常態を推究し又は之を解剖して體質生力の働を説明することなれば福澤學とは福澤を測量し吟味し或は同人を解剖して其體質生力の働を推究説明するの學問ならん歟隨分新奇の學科なれども生きた福澤君は少々迷惑ならん

第二慶應義塾出身の人々が事業に就くに其地位の有無とて明治日報は之を憂る者の如くなれども是れは學塾に向て云ふ可き言に非ず義塾は本是れ人を教ふるの塾なり人を賣るの店に非ず明治日報記者が保護新聞を渡世にする傍に小役人の口入を内職にするものとは少しく趣を異にする所あり慶應義塾をして記者の内職を學ばしめんとするの意歟失敬千萬ならずや

第三過般時事新報に「學問と政治と分離す可し」と數日の社説に之を論じたるに明治日報記者は之を評して表向は綺麗にして其實は私意に出るものなりと云へり記者若し眞實に時事新報の論説に就て異見あらば公然これを論駁して可なり迎も叶はぬ事ならば黙して可なり議論は出來ず去りとて焼餅は焼ける、及ばずながらも腹癒はらひやに一言の惡口果して何の爲にする了管なるや

第四明治日報記者は慶應義塾にて學科を改正して政治書を廢したりと明言せり記者は何故に斯る偽を申すや詐偽は人間の不徳なるぞ過て詐偽に陥る尙且許す可らず況や人を罵詈訾し人を傷けんとして有心故造以て偽を申立るに於てをや若し或は他人の斯くと報する者あらば何故に慶應義塾に來て之を質さざるや義塾に於ては近來學科を變じて政治書を廢したることなし畢竟記者に學問の心掛けなくして世の學事を輕々看過して眞の暗中に彷徨する其中に取留もなき云の言に至ては事の條理も筋道もなき下郎の雜言と申すより外に評も下だし難し改進黨は政黨なり慶應義塾は學塾なり此學塾が何となれば彼の政黨が何となる可きや毫も由縁なきことなり下郎小人の卑劣根性を以て學塾を評する勿れ或は此學塾より出たる人物が改進黨中に在るの故を以て此語を爲す乎然ば則ち今の政府中にも義塾より出たる者甚だ多し或は低聲黨中にも多分に在らん義塾變革せば政府を如何せん低聲黨を如何せん千笑に堪えざるなり（明治十六年二月十三日）

朝鮮來狀

未だ拜晤之機を得ず候處一書拜呈仕候唐突之儀申上恐縮に不堪候得共爰に御相談申上度一事は他にあらす弊邦之儀も近年開國以來兎角物論穩ならず動もすれば守舊頑固の輩宇内の形勢を知らずして往々奇々怪々なる説を申觸らし中華の黃帝は始めて車を作たれ共蒸氣車に乗らず徳の流行置郵より速なれば電信郵便の法も取るに足らず杯喋々すれば幾千萬の愚民は素より數百年の舊慣中に生々したるものにて時事の得失を辨するの明なく滔々たる天下の勢これを如何ともす可らざるの有様に有之候畢竟するに弊邦建國以來文物を隣國の支那に取り周公孔子の道を以て經世の基本に

定め候より今日の此困難に陥り候儀今更當惑至極の次第就て相伺候は貴國に於ては夙に西洋の文明主義を御採用相成目今は文物既に洽なくして或は西洋學者流の中にも些と西風に過ぎて御困りの事情も有之近時は専ら支那流にて御改革有之哉に承り候得ば此時こそ幸なれ其御不用の洋學者五六百名拜借之儀は相叶間敷哉尤兼て御承知も御座候通り弊邦も近來非常に財政の困難を致し迎も十分の俸祿を給する場合に無之候間爰の所は無有相通じ過不及相足すの貿易主義に基き右拜借の洋學師に易るには弊邦の宿儒輩を慰斗付にて呈上可致先づ差向の處にて白樂寬と申者有之右は略御承知も可有之哉三代の儒家にして徳教の奥蘊を窮め貴國にて云へば皇學と漢學と當分に調査して其中を得たりとも可申者にて少年の時より戸外に出でず四書五經は毎日一度づゝ暗誦二十一史も月に七度は繰返して復讀致し經史既に明にして始めて世に現はれ先づ國王殿下に鐵砲玉の如き書を上つりて出來内相談を吹掛け一死を決して大天狗を氣取り去年貴國の公使館云々の節も中々盡力致候人物に候得ば不取敢此者を魁と爲し其餘に同志輩を募集すれば忽ち三五百名の老儒は揃ひ可申或は貴國小學の教員等に御入用ならば其以下に幾萬人にても差支無之御差圖次第に輸出可仕此輩時事にこそ不案内なれども徳育の一點に至ては凡そ五大洲中に後れは取り中間敷候得ば貴國の少年子弟を訓導して徳の門に入るゝは更に疑ふ可きに非ず急度御注文通りに引受可申且又前申上候通り最初より慰斗付にて進呈致候上は決して御返却に及不申百と一との割合にても不苦候間御不用之洋學士と御取替被下候得ば幸之至に奉存候此段御相談まで申置候間何卒至急御回答奉願候也(明治十六年二月十五日)

頃日上京したる某縣會議員の話を開き聊感ずる所あるを以て爲に一篇の文を草して江湖の一曝を博せんとす其

事戯謔に近しと雖も亦以て府縣會進歩の一斑を知るに足れり

府縣會の小歴史

黙々 默人

府縣會の開場に際し府知事縣令より議員を饗應するは一般の例となりたるが如く關西某縣に於ても明治十二年第一回の時に開場式を終りたる後某樓に於て酒肴を賜ふと縣令よりの達ありければ議員は謹で御達の趣を拜承し其席に罷出でける殊に在郷のチョン鬚議員は扱も〳〵難有仕合かな議員に撰ばれたればこそ縣令様の御馳走に預り御同席にて御盃を頂戴するは實に老後の名譽にして歸郷の土産となるのみならず子孫に傳へて光あることと申すべしと歡喜に堪へざる有様なりし此時心ある人は縣廳の達書に奇異の想をなし田舎議員の有様を見て心密かに笑ひ合ひたる事なるが明治十三年第二回の時に及んでは流石は縣官其人ありと見え酒肴を賜ふとの御達書は廢止となりしが矢張一席の饗應は例によりて行はれたり然るに議員中發議するものあり縣令の馳走なればとて徒らに只喰ひもなるまじ此方よりも返禮せざれば同等の權利にも差響くと云ふにより議員一同奮發して主人となり各出金して縣令及び縣官を饗應せり此時田舎議員は縣令を饗應するは勿體なきことなりと心配したるもありし扱又明治十四年第三回に及んでは最初縣令の饗應は例の如くにして殊に追々議論も激烈になるものから馳走も一入鄭重となり隨て其費用も少々にては濟まざることとなれり此時或議員の發言にて當年は此宴會も一度にて事済となし再度の開宴は見合にする方可然抑此宴會は客が亭主か亭主が客か判然せざれば此一席にて双方よりの饗應としても不當なることなかるべし何となれば此宴會の費用は少く積りて縣令一ヶ月の給料にも當り之を自己の懐中より出すことはよもあるまじ必らず舊縣稅の殘餘金とか別途金

とか何かの支拂に屬することならんされば精細に其出所を調査したらんには縣令の饗應にあらずして或は我々が縣令を饗應することになるかも知れられず今我々は其等の詮議を暫く措き更に我々自己の囊中より二三圓を投じて再び返禮するは誠に無用の事に存するなりと述べければ一座忽ち同意を表したりと此一話以て府縣會の小歴史に充つべし(明治十六年二月十七日)

儒教の主義は私の著書に及ばず

文化老人

頃日或る大きな學校で其お頭殿が何とか云ふ新らしい説の書物を著述した處が其次席か子分の先生がお頭の説は間違だ新らしくも面白くも何ともねへと書立たるにお頭殿も眞赤に成て怒り相手の先生も中々過まらず夫れ是れする中に彌治馬が出て来て上を下へやつさもつさの騒動なりと云ふ老人は文化年代の老朽にて此有様を傳聞すれば驚駭に堪へず次席の先生は先生ならんと雖どもお頭殿に對すれば平役人の役頭に於けるが如く新參の故參に於けるが如し苟も其役頭故參の衆が著述したる書物を假令説が悪からうとも之を撃つとは餘り無鐵砲ならずや論語に曰く孝悌にして上を犯すを好む者は鮮し上を犯すを好まずして亂を作すを好む者は未だ之れ有らずとあり是れ是ち儒教の極意なり然るに今日は白晝に人の著述書を彼れ是れと評論するのみならず上役の説を下役が駁撃するとは明教地を拂ふものと云ふ可し老人が壯年舊昌平館に寄宿の折など書生又教授職の者などが苟も儒官の説に喙を容るゝ者あれば即日即時に放逐は當然の例なりき今や彼の大きな學校にても論語大學の主義は大造流行の由なれば或は今度の一條より免の字の天降ることはあるまじきや假令お頭殿は大人しくするも或は疝氣の筋より電氣の通するなきを期す可らず誠に危きことにこそ

併し又退て考れば昔の儒官は書を著述して錢に賣りたることなかりしが右のお頭殿は西洋の本を翻譯して板にして賣て錢にしたりとのことなれば固より役柄にてした事には非ずして唯の著述家と云ふ可き者なり既に著述家とあれば上役も下役も用捨はある可らず何と云はるゝも是非なき次第なり依て爰に判斷するに右の著書御役柄にて相認め候者に候得ば下役の者共決して非難可致に非ず儒教の主義犯上の罪に問ひ免の罰可申付候得共私の著書の儀に付き彼れ是れ爭論致候共儒教の及ぶ可き限に非ざるを以て双方共無構ものなり(明治十六年三月二十七日)

註 當時東京大學總理たりし加藤弘之の著書「人權新説」を同大學教授外山正一が批評し兩人の間に論戰が行はれたとき。(編者)

御儀式の生捕

舊幕府に加役と云ふものあり御先手頭は千五百石高にして出陣の時に先手を勤る武官なれども平時その中より二名ばかり撰擧して盜賊火付改と云ふ役を命ず即ち御先手の本職に加へたる役目なるが故に通俗には單に加役とのみ唱へたるものなり此加役には與力同心下役共も附屬し又其筋に所謂隱密探索岡引等も甚だ多くして風俗宜しからず往々江戸市中の保護は扱置き引合掛合とて盜難に罹りし者を泥坊の相手に引き出し本人は物を盜まれたる上に雜用を費し賄賂を遣ふて辛ふじて免かるれば難有き仕合なりと悦ばざる者なし例へば下駄を片足盜まれても掛合となれば御差紙到來數日の呼出しに數圓の金を費し果は以來戸締に念入れ大事に致せと大聲一喝の御叱を蒙り恐入て其場を下る有様は孰れが泥坊にして孰れが泥坊されたる者か少しも分らず奇觀と云ふ可し又其奇中の最も奇なるは正月の初に初捕と云

儒教の主義は私の著書に及ばず

御儀式の生捕

ふ内規あり是れは年始の吉例に必ず罪人を捕るの儀式にして消防火夫の出初に異ならず火夫の出初には火事なくして可なりと雖ども初捕には罪人なる可らず故に其日には下役岡引共が一入勉強して罪人を探索し晴雨に拘はらず必ず三五名を生捕らざることなし若し不幸にして正銘の罪人に逢はざれば市中の往來群集の中に少しく人相のあしくして例へば眼の光が變へんにして衣服が妙なりとか、顔色つらがにくらしくして歩行振ふるが怪しいとか認定すれば御上意の聲と共に先づ縛り上げて役所に連れ行き何か言種いごを付けて罪を作り以て當年も不相替の御儀式を終り愈無罪にして止むを得ざる者は窃に放免するの例なり、如何に封建の時代とは云ひながら吉例の儀式に罪人を作るとは人間世界の奇事ならずや讀者諸君に於ても或は信用せられざる程のことなれども又退て考れば浮世は人情の支配する所にして理窟の行はるるは存外に少なきものなり火事を見物する者は火の盛ならんことを祈り雪景を眺むる者は雪の止まんことを惜む況や當局の事に於てをや軍人は和睦と聞て落膽し、捕亡の吏員は罪人なきに苦しむ、其苦しむの餘りには世に犯罪人の多からんことを願ひ遂には様々の工風して罪人の有無を探ること遠矢を射て敵の動靜を伺ふが如き略を運らす者なきに非ず職分に熱するの心情なれば當局者に向ては深く咎るに足らずと雖ども世の爲には随分憂ふ可き事なり故に捕手の役人も成る丈け此邊に心を用ひて御祝儀に人を生捕るが如き功名立は之を見合せたく、又一方に世の中の人も同じく用心して疑はしき風體を示すことなく、天性の眼光顔色は致し方もなきことなれども身のためにも人のためにも役にたゝぬ事を饒舌わさり又態わざと怪あやしき素振そぶして加役の吉例に身を供するが如きは損亡の甚しきものと云ふ可きものなり(明治十六年四月七日)

註 當時政府の或向では、探偵を放つて漫に嫌疑者を捕ふること少なからず、又民間の有志者などの殊更に奇矯の言動して禍を招

くの風あるを諷したものである。(編者)

ソリヤ又來たぞ

時事新報記者が本月四日より六日までの社説に全國兵は字義の如く全國なるべしとの題を掲て國中に徴兵を免かるる者多きの弊害を擧げ此弊害を除て國民の志氣を振興するの法は如何して可ならん、結局全國の男子をして悉皆護國の義務を負はしむるの外に方便ある可らず、若し現役を免かれんと欲する者あらば其免役の爲に兵役税と名けて若干の金圓を出さしむることに定め、其金圓を以て現役者満期の給與金と爲さば好で現役の徴に應ずる者もあらん、左れども斯く金圓を出して役を免かるゝときは國中の男子に勇武の氣を養ふの方便なくして全國兵の旨に背き即ち事の大眼目を失ふことなれば更に法を設けて假令ひ金を拂ふて免役する者にても其日數を減じて必ず入營を命じ數月の間は兵事に慣れしむること要用なり即ち常備兵役を免するも從軍の義務を解くに非ず以て士氣を振興するに足る可し云々と論じたりしかば朝野新聞の雜錄に時事新報の兵法に惑ふと題し吃驚子の名を以て漫語放言以て痛く新報の議論を罵詈せられたり抑も他人の論に就て異議ある時は其異なる次第を述べて之を駁するは可なり即ち他の説は斯の如くなれども此方の所見は斯の如しと恰も双方の説を並べ之を世間の人情と道理とに訴へて其孰れが情に適し理に戻らざるかを試ることなり之を論駁と云ふ然るに今吃驚子の所言を見れば自家の説とては一言半句もなく數百文字を並べて不平を洩らしたるまでにして其有様を形容すれば事理を聴くの耳なく又これを辯ずるの口もなき下郎輩が飽棒べらぼう呼ばりに猛たけり廻まはる者の如し吾々は之を駁論と云はずして寧ろ罵詈の評を下ださざるを得ず固より雜錄欄内のことなれば其

行文の波瀾に諧謔を交るも之を咎るに非ず又其議論の不筋にしてたわいなきも兼て覺悟のことなれば敢て驚くに足らずと雖ども假令ひ不筋は不筋ながらも何とか自家の一説を絞り出す譯けには參らぬか筋もなく、骨もなくノツペラボ一の笥棒呼ばりには誠に閉口致すなり但し例の如く理非に論なく唯御閑暇に任せ時事新報を喚起して喧嘩の買出しに御出陣か去りとは尙々閉口の次第に奉存也（明治十六年四月十一日）

探訪通信も亦難い哉

新聞紙發賣の事業決して容易ならざるは世人も御推察あらんと存するが就中困難なるは探訪通信の實否を審査するに在り新聞社も保護を蒙りて金を貰ふ者に非らざるより以外は中々貧乏なるものにて當社時事新報の如きも工面甚だ宜しからず隨ては錢を費すこと少きが故に探訪通信者として良き新聞を報道するは甚だ稀なり昔に良新聞なきのみならず往々世間の實際にありもせぬ事を物々しく注進致し云く今朝日本橋の市に雞卵の角なるものを見たり、云く昨夜は兩國橋上より男子兩人手に手を取りてザンブリ情死致したり、云く昨日の晴天微雨の折しも狐が馬に乗り淺草田圃に於て結婚の式を執行したりなど千差萬別際限ある可らず是等の報道は編輯者も心して之を聞流し敢て紙上に掲載することなしと雖ども少しく上等に進んで誠らしきものあり何々銀行は今日閉店して其支配人何某は夜前既に逃亡したりと云ひ何々殿は何々の事件に切迫して遂に割腹、表向病死の體に取成して今日午後一時出棺にて谷中天王寺へ埋葬、其變死の證據には葬式も質素靜謐にして送葬の人も何となく愁傷を催ほし高聲放歌などする者とは一名も見ざりしと云ひ一報、報じりて又一報これを筆記する際に地方より別配達至急の郵書到來、急ぎ開封して之れを見れば則ち

云く當地方の情況は過般電報を以て申上候通り彌以て何々黨の陰謀露顯に及び共黨衆は三萬三千三百三十三名縣官にても非常の盡力にて既に縛に就たる者無慮一千餘名、物情恟々四方に喧しく人民其業を安ぜざるの次第、實に今回の事件は當縣下に止まらず各地に連絡して黨與甚だ多き由、私に案するに昨年來都下の辯士等が巡廻して頻りに政談演説を催ふし又は何學士何社員など稱して陽に陰に遊説の様子なりしが果して然り今日この事變を見るは決して偶然に非ずと存候云々とあり編輯者も此文を一讀しては少しく心を動かさざるを得ず直に執筆明日の新報紙上に掲載とは思ひしなれども先々念には念を入れよと下手念に用心して不取敢電信を以て同地の或る友人の方へ問合すれば豈計らんや其回答は至極淡泊なるものにて當地に變亂とては頓と承はり不申尤も兩三日前青年の書生輩七八名何々樓に飲み、深更騒はがしきに付き警官の間ふ所と爲りしかば其混雜の際に一名が何か書付を取落し其書付に水滸傳の拔萃と忠臣藏夜討の段を片假名にて記したるもの有之との義仄に傳聞致し候のみ夫れとても信僞は固より詳ならず其外當地方の騷擾と申すは時下次第に溫暖市中の犬に春氣を催ふして晝夜の別なく猜々たるの一事に御座候とあり編輯者は右の回答を得て一度は呆れ一度は安心したり若しも前度の報道を其まゝに紙上に載せたらば世上の讀者を誤るのみならず必ず其筋よりも取消を命ぜられて當社の面目を損じたることならん然るに今第二報を聞けば實に河伯の尻にして吾々が下手念の中りたるを喜ばざるを得ず探訪通信を審査するの難きこと益以て知る可し嗚呼吾々は唯一小新聞社、假令ひ之を間違るも高の知れたることなれども世間或は新聞社よりも大切なる處に探訪通信を要し其次第に由て新聞社よりも大切なる大事を決する者もあらん而して其處には新聞社より金も多く人も澤山なるものあらんれば吾々の願ふ所は可相成丈け上等の探訪通信者を使ふて狐狸馬上の風説に惑はさるゝなきの一事のみ（明治十六年四月十六日）

パークス公使北京に往かんとす

時事新報記者足下五月十四日の時事新報を一讀致し候に當時東京在留の英國公使ハリ、スミス、パークス氏はトーマス、ウエード氏の後任として今度清國北京駐在公使に任ぜられたるよし元來支那は我日本に比すれば土地も廣く人民衆く東洋第一の大國にして隨て利害の關する所も甚だ大なるを以て英國が支那の交際を重んずるは勿論のことにして其駐在の公使は東洋諸國中の第一位を占め其俸給の如きも東京の公使は年俸二萬銀圓北京の公使は三萬銀圓の差異ある程なればパークス氏が今度の轉任は本國政府が氏を信用することの厚きを示すものにして仕官する身に取ては此上なき光榮なるべし然れども退てパークス氏一身の私を慮るに氏も既に耳順の老人にして二十年前のパークスにあらず慶應以來二十年間多事の日本に在留し功成り名遂げて内外人民に敬愛せられ盈ちて未だ虧けざるの時に及んで退て風月を樂しむも亦將に遠きにあらざらんとするの折なり殊に一昨年は信愛する所の内助に永別し老境の悲哀推察するに堪へたり幸にして令嬢姉妹慈母に代て心を盡し孝養至らざる所なきを以て幾分か氏の憂を解くなるべしと雖ども親として子の行末を案すれば追々年頃にもなる縹緞娘を空しく東洋の邊境に成人せしめんも本意ならずと日夜心苦しき事多かるべし拙者の心を以て人を忖度し尙かにパークス氏の衷情を察するに時に歸英の情止み難きものあるや明かなり人の一身には公私の區別あり徒らに其公身の榮譽を賀して私身の衷苦を察せざるは浮世の人と云ふべからざるなり

拙者はパークス氏の私の爲めに謀て其榮轉を弔するの傍に又た首を回らし此一事より英國政府の東洋政略を觀察し

來れば大に之を取らざるものあり英國政府は千八百六十年代と八十年代と比較して歐洲の社會に前後莫大の相違あるを知るなるべし獨り歐洲のみ然るにあらず東洋社會に於ても亦甚だ然るなりウエード氏が北京に駐在したるも隨分長き日月なりしが其後任を撰拔するに當り支那に二十年日本に二十年合して四十年在勤して東洋政略上の古老と稱せらるるパークス氏を指名したるを見れば英國政府の意の在る所大抵は推察し得べし東印度商社以來の古筆法を墨守して一以貫之の政略を持続するの意なるが如く然るなり我日本の如きは世界日新の文明に後れざらんと欲して上下銳意改進に従事し過ちと知れば朝令暮改も苦しからじと覺悟して居る其傍に眼を開いて東洋社會を視察し舊を改めて新に就くこと能はず日夜唯愛爾蘭破壞黨の撲滅法をのみ工夫して一寸の餘裕もなきは實に愍笑に堪えずと存候頓首再拜

明治十六年五月十六日

扶桑翁

(明治十六年五月十八日)

買物に法あり

賣物買物金さへ出せば相手を嫌はず入ラッシュナイの一聲と共に望の品を陳列して賣付けるこそ商家の通常なる可きに世の中は左様に參らぬ場合あり盲縞めくらの股引腹掛に向八卷、臀端危き邊に三尺帶低く、胸毛深き處むしげに刺繡鮮いねぼろなり、八公一杯やかすべし御免なせいと巻舌にて八百善の表口よりうなり込まんとすれば主人は客に錢の有無を問はず今日は誠にお生憎あはれさまながら或る華族様方御大勢の御集會何分手廻はり兼まするで御斷りと云ふことならん舊〇〇は新〇〇即ち吾々同胞の兄弟なれどもデイ／＼の籠を携へて祖先傳來の三度笠を深く冠り、大和錦の帶地を一見せんとて三

パークス公使北京に往かんとす 買物に法あり

五二七

井大丸の店頭に闖入したらば店の者は不取敢品切れなりと謝絶することならん況や都下の事情にも不案内なる田舎漢が髪結床に行て有平を買はんとし紙鳶の看板を見て蛸のぬたを喰はんとするが如きは毎度の事にして八里半薩摩芋の行燈に○を印したるは泥鰌の丸焼かと誤まれ、目薬の看板に目ばかり書いて鼻なきは梅毒の薬かと認めらる、何れも皆門違ひの買物にして御断り申すの外ある可らざる也

我時事新報は如何なる前世の宿業にや過去の生に他人と頻りに口論したる報ひにてもあるか發兌以來謹で我れより口も手も出さず唯我が心に思ふ所のものを我が筆を以て我が紙に記し一切世の論客の誰れ彼れに取合ふたることなきにも拘はらず折節攻撃を蒙ることあり一と仕切りは官權黨ならんとて横濱あたりの新聞屋に叱られる中に又一方よりは彼れは過激の民權黨ならんとて高い處から苦しめられ又或は其高處の提燈持に窘められたることもあり是れも近來は少しく樂に爲るかと思へば入替はりて今度は自由黨の先生達が難題を吹掛け新報よ其方は開進黨に遠縁ある者ぞよ（遠の字丈は格別の御憐愍ならんと云へども何に御遠慮なく近親と御意遊ばしても、ドレシ若殿様の御事なれば異返は申上げません）三菱社など、同穴狐狸ならんとの御叱り誠に恐怖に堪へず併し時事新報の義は兼て申上候通り政黨にも非ず商黨にも非ず強ひて黨の字が無くてお氣に濟まぬことならば時事新報黨とでも御下命被下度又新報が政黨にあらずとて他の政黨を惡し様に申すにもあらず商賣人を惡むにもあらず政黨の諸君達がまめしく周旋奔走せらるゝは御苦勞の事なり何卒永く御説の變はらぬ様にと祈る心は何政黨を見るも輕重あることなし、商賣人に向ては何卒金力を積みに積で日本國中の豪商と爲り他日外國商に向て後れを取る勿れ決して焼餅は焼かぬぞよと云ふ精神は何商社何商人に對しても厚薄あることなし、理の甚だ賭易き者にして世の論客にも是れ位の事は分る可き筈なるに或は

往々分らぬものあるが如きは畢竟するに我新報社に闖入して唯喧嘩の買出しにはあらずやと失敬ながら邪推致すなり去りとはお生憎さまながら社中、他の議論に忙はしくして差支なり、お氣の毒さまながら御注文の喧嘩は品切れなり、イヤお門違ひには無之や時事新報を時事新報黨と名乗るは髪結床の看板に有平卷の棒、紙鳶店頭の軒に蛸の張拔、薩摩芋の行燈に○の如し世情御不案内とは申しながら看板を目印にお這入被成度人目もあるものなれば些とお氣を付けさせらるゝ様餘所ながら御注意申上今後の御攻撃御断念相成候方御爲筋と存候手前の方よりは不相替手出し不仕覺悟に御座候也（明治十六年五月二十一日）

變はるに困る

文化老人

拙者は文化年代の一老人で御座る家を保つての法唯一片の節儉主義にして常に家内婦女子に警め漫に時の流行に走る勿れと申し聞かすれども老人の言は當世に行はれず夫れ水色の鼈甲が流行と云へば早速小間物へ注文し、ヤレ細手の簪が當世と云へば直に之を打直し、珊瑚珠が貴き中に孔雀石も亦面白く爲り舊を棄て、新に移り舊物は所謂二足三文に見倒さるゝこと實に無慚に堪へず依て老人は徐々に孫子へ談判に及び若氣の盛り流行に走るも致方なき次第なれば吾れも之に降参して強ひて之を差留めはせぬが、セメテ其舊きものをば無下に投棄せずして篋子の引出の隅にでも貯置く様に致し度物換り星移る其間には流行再々來して必ず舊物が世に出ることもあらん其證據には今の其方達の珍重する其簪の風は文政の初年今の婆サマの若盛に流行して其後も度々變化模様替りと爲り世に出たることもあり又引込みたることもあり遂に今日は當世の通物と爲りて再現したではないか必ず舊き物とて之を龜末にするなど懇々説諭

すれども蛙面水、馬耳風會て之を聞入れぬは誠に堪へ難き事共なり唯婦女子のみに非ず男の子を小學に遣すにも最初の考には兄の讀んだ本を弟に譲り二男三男次第に相傳る積りなりしが何がはや兄一代の中に幾度か其讀本が替り二男も同様三男も亦同じ實に讀本の仕送りに困り果るのみならず末の孫娘を女學校に入れて袴が入用と聞き是れは飛だ事だと存じながら是れも例の流行なれば致方なしと往生して身分相應の袴一具新調して先づ一安心と思ふ間もなく又近日は其袴も流行外れ不用と爲り娘の子は娘らしく出来ることなれば振袖の方然る可しとのことなり是れも止むを得ざる譯けなれども何卒彼の讀本も袴も葛籠の中に仕舞込み又もや世に出ることもあらんと是れ文けは老人の一手に引受て始末致し置きたるが世の中に同感の人々も多からん可相成丈舊物は投棄せぬ様御心掛け被成度老人の實驗上には間違は無之廻はり持ちの後世棄たり切りと申は無きものに候老餘の婆心記して之を時事新報に寄す(明治十六年五月二十八日)

誠に目出度し

去年十一月の頃より福島縣下に謀反人が出現したりとの評判にして彈正原に幾萬の黨類が馳せ集りたりと云ひ何々山に幾千の篝火を耀かすと云ひ或は云く出兇徒共は海陸より我東京に押寄する目論見なんぞと我々如き小膽なる男は此風聞を聞いて恐怖に堪へず嗚呼明治十年には薩摩の國より西郷隆盛てふ大將が大きな謀反して後世これを明治西南の騷擾と名けたるが今度は其西南が東北に吹廻はして明治十五六年東北の騷亂にも及ぶことならんか去逆は情けなき次第なり我々こそは蟲も殺さぬ其蟲に等しき無智の良民なるに何とて貪慾飽くことを知らざる福島縣下の者共は大膽

不敵にも第二の西郷氣取りで我々を窘めんとするや上天若し靈あらば我々小民を助け給へ桑原く萬歳樂と只管祈願の外なかりしに流石は大政府にて別段に御注意被爲在八方に手を配りて水も洩らさぬ厳しき御論議に悪人共は速に縛に就き其地方に處分せられたる者もあり又少しく念の入りたる者共は東京に護送せられて辱なくも高等法院の御調と爲る様子なれば我々も是に於てか先づ一呼吸の閑を偷みて謂らく悪人悪なり又暴なるも最早籠中の鳥なり何ぞ恐るゝに足らんや桑原くとも何とも云はぬぞと俄に力身返りて唯其裁判の結果如何なることならん、或は幾千幾百の罪人が出来ることならん、人を騒がせたる仇打に氣味もよし去逆國の爲には又厄介なりと一度びは悦び一度びは入らざることに苦勞して待設けたる處、近日に至ては高等法院より追々無罪放免に爲る者多し就ては先に地方にて一旦罪に歸したるものも何か上告して免かるゝとの事、過般以來時事新報の公判欄内に記したる如く(五月二十八日二十九日六月一日時事新報)坂内代五郎殿は七年の輕懲役が丸で無罪と爲り菅井千代吉殿は四年六ヶ月の重禁鋼坂内米太郎殿は三年六ヶ月の重禁鋼が是亦同斷無罪放免となりたるは本人の爲に目出度きのみならず我々に於て去年來様々に恐怖し又苦勞したる一大事件も首は大にして尾は至て細く我々の想像も幽靈の裾の如く殆ど立消に爲りたるは何と驚入る程に目出度からずや加之今一つの御目出度は文明國たる我日本に肉刑の法を用ひざることなり若し萬一も日本に肉刑の法が行はれて御覽じろ今の七年の懲役は耳を切るに當り四年の禁鋼は足を切るに當り三年の禁鋼は鼻をそぐに當るとかにて坂内殿は既に無耳無鼻の坂内殿にして菅井殿は既に足なしの菅井殿なり假令ひ再度の裁判にて無罪に爲るも切た耳とそいだ鼻とを如何す可きや誠に危き事と申す可し今や則ち然らずして耳も鼻も満足なるは之を文明國の功德と云はずして可ならんや目出度く爰に坂内殿達の無疵を祝して我々の苦勞と狼狽が無益なりしを悦ぶものなり(明治十

六年六月十二日

敵の勝つべきを恃まず

曇床 頓子

人間は譯もなきことに驚くものなり風聲鶴唳を聞いて敵の追手と思ひ息を限りに逃げしも可笑しく水鳥の起つ羽音を聞いて敵兵の襲ひ來ると思ひ跡をも見ずして逃歸りしも亦甚だ可笑し夜干しの浴衣の幽靈にキヤツといひて肝を潰し石地藏の大入道に太刀抜きかざしてカチと切付るなど世には可笑しき事の數々あるなり斯る可笑しき眞似する人を稱して世これを臆病者といふ臆病者は世人皆これと齒するを愧づるなり頓子元と武士の子孫三十年前臍の緒を切りて以來弓矢八幡譯もなきことには驚かじと誓ひしもの、近日世界の狀態を察するに付けて何となく臆病風を引きたるかと人に疑はるゝは惜も、殘念至極のことなりと極内々に弱はり居るなり昨夜の夢に今度支那にては佛國と開戦の用意頻りなりと見て先づ胸騒がしくア、かカウかと夢中思案の央支那佛國の談判は遂に和議に決し催促したる支那兵も遣り所なきに大困りの様子なりと見て折よく夢は覺めたれども胸の動悸は収まらず今朝早く起て有りし次第を細君に語るに細君は笑を含み支那と佛國との和睦が左程にまで氣掛りならんには若し明朝の新聞紙に「昨日支那軍艦某々號の二艘横濱に入港したり」と記し其次の項に「在東京の支那公使は近々歸國するやの噂あり」と記し又其次の項に「沖繩縣那覇港に黃龍の旗章を翻せし軍艦五艘來泊人心洶々たりとの電報あり」と記したらんには良人はこれを見て可惜肝を潰しめさるべしと云ひ掛けて坐を立ち去りたり察するに細君の心中には頓子の眼に照らせば器粟の頭も大入道と見ゆるならんと疑にて斯く頓子を困らせしならんか然れども頓子とて元とは兩刀武士の一人なり何ぞ風聲鶴唳

を恐れん何ぞ石地藏の大入道を恐れん世の臆病者は己れの一身に恃む所なくして只管他人の無毒柔順なるを希ひ晏然年月を渡るの後一旦事に臨みて錯愕措く所を知らざるを常とすれども既に百七十餘艘の鐵艦に各五六十噸乃至百噸のクルツ砲を裝置したる艦隊の在るあり五十餘所の港灣には無數の水雷火を沈めたるあり常備の陸兵三十萬戰時はこれを八十萬にするの用意あり良將は敵の勝つべきを恃まずして味方の敗るべからざるを恃む頓子既にこの恃むべき軍備の十分なるあり争で譯もなきことに驚く者ならんや細君の一言甚だ以て其意を得ざるなり(明治十六年六月廿一日)

腰の物検査

文政 老士

今は昔し弘化の頃なりし老生の仕へ居たる或る藩の其又隣りの某藩にて近來異國船近海に出沒するに付ては従前の如く能誦茶の湯などに武士の魂を奪はれ居てはスハ鎌倉といふ時に赤恥を晒らすは鏡に照すが如し早く一藩の士氣を勵まし勇武の風を起さざるべからずとて擊劍柔術弓鐵砲の稽古等に關する種々の布令ありし中にも極めて丁寧なる一令と申すは

此度武藝勉強之義被仰出候に付ては各厚く御趣意を奉じ武具馬具の手入れ致候は申す迄も無之候處自然等閑に相成り大小腰の物に錆を生じ置き候様之義有之候ては以ての外に候依て來る七月以後毎月五、十日日腰の物検査致候に付馬廻り三百石以上の面々は當日朝六時半時より平日佩用の大小に差添一腰相添へ大廣間に出頭検査を受け可申此段及口達候也

追て中士以下の面々は當分腰の物検査無之事

敵の勝つべきを恃まず 腰の物検査

と申す事なりしが此藩の面々は右の口達を左まで怪しみもせず至極肺肝に銘するなど取沙汰する位なりしに老生の同藩中にては之を聞傳へて隣家の疝氣ながら此方の頭痛に疾み腰の物は武士の魂なり三度の飯は喰はぬでも一腰の大小は研かざる可らず即ち武家當然の義務なり殊に三百石馬廻り以上の侍に向て腰の物拜見請の有無を検査とは取りも直さず士魂の明曇を吟味して傍より當然の義務を促がさるゝに異ならず如何に末世の今日なりとて日本武士の魂は左までに曇りはすまじきものを斯る口達の出現したりとは隣藩ながら最と氣の毒なる話なり此令を達したる家老執政の婆心は兎も角もなれども布達されたる藩士の身に取りては實に痛入りて慚死も嘗ならざる次第なりとて當分は我一家中物語りの柄となりたることありき此物語りと全く事柄は違へども近日諸新聞紙にて拜見致すに近日出版になる官報とか申す者には政府の布告布達類は勿論官邊の事は一切網羅して遺さず大事の御記録にして官吏必携の新聞なるよしなれば月俸の多少位階の高下を問はず苟も身を官途の間に置く人ならんには未々に至るまで假令ひ朝飯は喰はずとも毎朝發兌の官報をば捧讀すること勿論にして假りにも之を怠る者は官吏にして官吏の心掛けに乏しく所謂官魂の曇りたるものと云ふ可し況や奏任以上歴々の諸公に於てをや官魂の明々日月を懸けたるが如くにして何ぞ之を讀むに怠たる者あらんや尙況や其價の如き百編僅かに三圓に出でず風前の塵のみ何ぞ錢を愛しむものあらんや然るも尙此諸公には官報購讀の義務ありと申して其以前官録税を納めたると同一様の成規には非らざるも七等以上とやらの面々は必携の官報を必求して之を必讀す可しと申達しられたるよし政府の御注意深しと云ふ可し又御丁寧なりと云ふ可し諸公の平生其官更魂の明にして一點の錆なきは封建武士の腰の物に異ならずと雖ども政府に於ては尙不安心にも思召さるるにや手を取て導くが如く物を嚙で含めるが如く必携を必讀せよとの御諭しは誠に以て難有仕合ならずや偶ま四十年

の昔を思出して一言斯の如し（明治十六年七月二日）

註 政府が初めて「官報」を發行したるとき官吏に購讀の義務あることを規定した。（編者）

原被連帶片造の詞訟

右の手に小刀を持って左の手を疵付け左手が大に憤怒して之を法庭に訴へたらば如何せん何分にも兇器を以て疵付けたることなれば之を禁獄に處せん歟或は過失より生じたることなれば舊幕府の時代にては先づ手錠申付ることならん然るに手錠は左右の手を一處に繋ぎ合するの法にして原告の左手も亦被告の右手と共に苦痛を見ることなれば至極不都合なり然ば則ち之を放免せん歟被告は之に慣れて再び罪を犯し疊に左手を害するのみならず或は利腕に任せて腦天を打擲し響邊を爪捻る等何様の亂暴を働くやも計る可らず、之を罪す可らず之を放免す可らず誠に困るなり之を原被連帶片造の詞訟と云ふ我時事新報は過般何かの序に賣藥の事を記して無害無功と申したれば賣藥屋共は大に憤怒し抑も日本國中の賣藥なるものは官の許可を受け官の調査を経て發賣するものなるぞ政府豈無功藥の發賣を許さんやと恐ろしき劍幕にて新報の記者も自から無學を耻ぢ只管恐入るばかりなりし其折柄頃日「ピットル」と云ふ賣藥の廣告を見れば廣告者云く抑も世の賣藥を見るに金銀を粧ひ龍驤を薫らして以て俗眼を眩惑するもの十の八九にして其實は功も無く又害も無きに過ぎざるのみ云々とあり左れば廣告者殿の教に従へば日本國中に賣藥の數は夥多あれども何々丹とて金箔や銀箔をなすり付け何々散とて龍腦麝香などをブンと薫らして凡庸俗世界の眼を眩まし惑はすもの計りにて先づ數を以て云へば十品の内に八九品までは何の功能もなく之を服すればとて病に利く可きものに非ず去りとて左ま

で人の身體に害を爲す程のものにも非ずとの御趣意なるが如し如何にも學者風の御説にして敬服の外なしと雖ども又魂消た話と申すは最前新報の記者が此廣告と恰も符節を合するが如き事を饒舌りたるを以て賣藥屋共（即ち廣告者の仲間）に咎められたる處を見れば此廣告も亦被告がものはある可しと評價せざるを得ず扱被告の價ありとして之を訴る者は誰れならん原告殿は何處に御座る江湖の諸君子御見當りもあらば御報知奉願候也（明治十六年七月六日）

百に三升賀す可きや弔す可きや

日本の眞中なる東京の眞中で米の價が一石四圓臺に下り此様子にて次第に下落したらば一石三圓になるは近日のことなる可し東京が三圓になれば岩代の石ノ巻越中の伏木越後の新潟等は一圓違ひにて二圓なる可し地方の海岸運送の至便なる場所にて二圓なれば海岸を去て少しく内地に入り山谷險阻の路を二十里も隔たる奥田舎にては米の相場如何なる可きやと尋るに一石の米を馬の脊にして十五里の山路を越るには小荷駄二疋馬子二人にて往くに二日、返るに二日、往來四日の貨錢は馬と人と一日を十錢づゝとして一四が四十錢なり之を四日合すれば四四の一圓六十錢とす扱其米を海岸まで持出したる所で二圓と爲り其二圓の内より駄賃の一圓六十錢を引き残して正味四十錢なり即ち玄米一石の本價とす、百に三升の米とは吾々之を太平の童話に聞きたるのみにて生來會て其實況を見ざりしが明治十六年こそ此童話を實際に現はしたるものなれ一石四十錢なり一斗四錢なり一升が四厘にして三升が則ち一錢二厘なり何と太平至極ならずや日本國中の人民は米の飯を腹一杯喰ふて唯當さに安眠す可きのみ文明開化の多事は睡眠の間に頭上を過ぎ去りて他國の華と爲り其騷擾に目を醒まして狼狽するも跡の祭と爲る可きのみ百に三升賀す可きや弔す可きや（明

治十六年十月十五日）

一舉して日本の商權を握るの傳授

昨今我國の米價は次第に下落して百に三升の太平たる可きは過般一寸一言したり讀漫言の諸君は成る程と了解せられたることならん今又此緒に續き諸君の爲に一舉日本の商權を握るの工風を御傳授申さん造作もなきことなり今我國より米の輸出に著手して諸港より五十萬石乃至百萬石も積出すときは内國の米價は忽ち立直りて一石四圓のものは五圓にも六圓にも爲りて隨て諸色の直段も稍々上向きに走り商況回復の一端とも爲る可しとは經濟家の卓論にして疑ある可らず或は實際其石數に至らざるも港に船の用意して僅に二三十萬石を出だすとの評判計りにも必ず米價に差響く可しとは投機者の見込にして是亦尤なる考なり左れば日本國の米價は二三十萬石の出入を以て全國一般に上下す可し尙これを慥にすれば一百万石にして大丈夫ならん是即ち傳授の種なり今諸君が爰に千五百萬圓の資本を用意し其内五百萬圓を以て西貢と東京と兩所に米商店を構へて扱其商法は如何と尋るに日本國內米の多少を視察し品物の有餘不足相補ふの主義を逆にして餘るときはますく之に足し不足するときはいよく之を少なくするの工風を運らして常に百萬石の米を東西に運轉するの備を爲し日本に凶作と聞けば其米を輸出して西貢支店の倉庫に積み之に反して豊作なれば頻りに東京の米商會社に賣込み兼て支店に用意したる一百万石の實物を續々横濱に輸入す可し本年の如きは即ち其機會にして今日この米價の安き所へ百萬石の西貢米に攻められ又嚇されたらば如何ん百に三升ならで三斗にも下落す可し米價下落すれば諸色これに準じ炭も薪も綿も生絲も一切下落して殊に地面の如きは最も價を失ふことならん

百に三升賀す可きや弔す可きや

一舉して日本の商權を握るの傳授

底で残りの資金一千萬圓を以て内國の綿も買ひ生絲も買ひ又地面も買縮め一切所有權を握りたる上にて時機を見計ひ今度は米の輸出と出掛けて今日は十萬石、明日は二十萬石、深川の米倉はカラ明きにするぞと云はぬ計りの劍幕に米價は即日立直りて上向となり最前たゞの如く生捕たる諸色地面は米に尾して飛揚る可きや疑ある可らず何と旨い工風ならずや日本の商權は一舉して握る可し唯諸君の不幸にして我人民の幸なるは失敬ながら諸君が貧乏にして一千五百萬圓の金策に窮するの一事のみなれども人間世界の風潮は今日に居て明日を知る可らず明日明後日内外人の中に如何なる怪物が出現して漫言翁の銘案を實施するやも圖られず世界は廣し人民は多し苟も天下の理財を喜憂する者は膽を四斗樽の如くし眼を明鏡の如くして永遠廣大の謀を爲す可きなり(明治十六年十月二十九日)

國債の抵當乏しからず

償却す可き抵當なければ負債は起す可らず吾々書生が一二圓金を借用するにも何か返済の目途あらざるはなし其目途が何様に外るゝも結局著替の袷を打殺せば以て責を免かる可し負債に抵當は金主の促すなきも自から用意せざる可らざるなり吾々は兼てより我國に内外の負債を起して大に鐵道を敷設せんことを主唱せり然るに頃日或る經濟の大家先生より御叱を蒙り其御説に國債とて家賃に異ならず苟も一國に負債を起すときは國民一般にて其償却の責に任ぜざる可らず扱其責に任ずるとして今の日本國民に何の抵當あるや抵當もなくして國債とは以ての外的事なり一身の果報は靜にして待つ可し一國の富貴は徐々に來る可しとて石橋に金槌、爪に燈火の御説法なれども吾々も一身こそ無錢なれ胸中は丸で無算なるに非ず國債に付き様々の遍照金剛は姑く聞き先づ抵當の品を申上げんに日本の耕地に生産力あ

り昔は之を以て國中に三百餘城を築き、江戸に一千餘の藩邸を維持し、四十萬戸の士族は其妻子眷屬をも唯養ふたり然るに今は城なし藩邸なし又士族の祿なし其資本は何方に紛失したるや吾々の考には日本の民力甚だ乏しからず假令ひ耕地を外にするも山林に材木あり河海に漁獵の利あり以て抵當と爲す可しと存すれども是等は一切御差支とある歟然らば則ち爰に無類飛切り會て先生のお氣の付かせられぬものこそあれ鄙陋ながら御免を蒙りて申上げん其は外ならず全國三千六百萬の人糞是れなり一人一年の排泄物果して幾斤にして其内にアンモニヤを含むこと幾許なるやは未だ分析試験せざれども之を肥料に用ひて平均凡そ半圓の價はある可し即ち三千六百萬を半折して一千八百萬圓の價なり海外諸國にては此排泄物を棄るの風習にして之を利用するものは獨り我日本に限ると云ふ左れば日本國民は他國民に比して毎年一千八百萬圓の肥料を餘計に用ひて其收穫を利する者と云ふ可し故に今此肥料を外國同様棄て、無きものと思へば屈強なる抵當に非ずや吾々固より此肥料を直に抵當にして金主に授けんと云ふには非ず唯其生産力を抵當にすれば困る譯けはなしと云ふまでの事なり借爰に一千八百萬圓の目途あり一割利付の内債なれば一億八千萬圓の利拂を可相勤、六朱利付の外債なれば三億萬圓の利子を拂ふに足る可し豈洪大なる抵當ならずや石橋翁も金槌先生も深く案じ給ふに及ばず一億や二億の國債なれば其償却は急度請合可申尙この外にも抵當の御催促とあらば早速差出す可き品は少なからず候得共差向思付きの一品を試に進呈するなりあなむさしと宣ふて逃げ玉はずは幸甚のみ(明治十六年十月三十日)

大演説

諸君よ諸君東京新橋柳ばし霞町日本橋下谷外神田新富町靈岸嶋八箇所の藝妓兼今度速成の女俳優諸君よ諸君は今度新富座々主守田勘彌に聘せられて伊勢音頭的一幕を演じ其謝禮として金二百圓を得たれども一錢も身に著けずして之を養育院の貧民へ施したる由誠に感心感服の至り感に入て堪へ入る程の次第なり畢竟するに佛法の慈善儒教の博愛主義に出たることならん吾々下界の貧書生には想像の及ばざる程の奮發なりと申す可し然りと雖ども諸君の博愛や其愛する所を愛し盡して終に養育院にまで及びたること歟一寸承はり度存するなり失敬ながら諸君は元と是れ千金の子に非ず又萬金の令嬢に非ず前年何か御不如意の事どもあらせられて不圖した御縁より今日の御營業ならん或は花柳の春色自身には浮かれて面白き事もあらん歟なれども御兩親始め家族方は兼て質素の御暮し表通りに開店の方も少なくして態と横町裏店のお住居餘り面白き事も有之間敷蓋し顔回陋巷の境界一簞の食一瓢の飲、娘の洒落は天外の事と明らかめらるゝ事ならんなれども其娘の身となりては又時として寢醒の苦勞ならずやせめて其一簞一瓢を二簞二瓢にもせられては如何ん諸君果して既に之を二にし又三にして「チャン」や「オツカア」の心を安んじ又この外にも兼てうるさい切れ屋小間物屋の拂ひも拂ひ盡して然る後に今度の一大美舉に及びたること歟極内々に承はり度く存するなり漫辯子に於て窃に心配と申すは諸君も隨分花柳の風に吹かれ其吹く風の中には妙な風を吹き交せて人に物を施すは仁の術なり奇特の事なり斯くありてこそ周公孔子の妹分耶蘇釋迦如來の養女とも申す可しなど取ても付かぬ説法に吹き倒されたる事には非ずや元來浮世の形と申すは様々にて圓きもあり角なるもあり深きもあり浅きもあり方圓深淺遠近曲

直勝手次第にして諸君の境界は云はば圓くして浅きものなり釋迦孔子の説法は角にして遠きものなり世の論客など云ふお饒舌連は動もすれば方圓の門違ひする者多し此輩は釋迦孔子の手下の中にも最もお鹿末連なれば呉々も之に構ふことなく諸君は諸君にて近く浅き處より片付けて兎角浮世を圓く渡らせられんこと冀望に堪へざるなり「ヒヤ〜」

(明治十六年十一月九日)

水の刃を懐にして

と説出したらばそりやこそ刃物三昧人殺しと早合點の御方もあらんが決して左様な譯柄に非ず是れは東京にて或る古道具屋の老爺が近來巡查に佩刀の命もあり諸方には擊劍の流行、何でも日本は元の刀劍の世に爲るに相違なし爰ぞ一番當どころと思案を定め身代振て四五百圓の古刀新刀を數百本買込たるは去年の夏の頃なりしが巡查の佩刀位にては左まで相場に響かぬのみか近來の不景氣物價下落の時に逢ふて刀劍などは見向く者もなく日に人氣を失ふて最初四五百圓の者は品物の數こそ元の通りなれ共其價は減じて三四百圓と爲り又二三百圓と爲り次第々々に消滅する其有様は水を懐にして日に照らさるゝが如しと云ふ話なり成るほど左もあらん氣の毒千萬なる次第なれども今日水を懐にするもの豈唯古道具家のみならんや米を懐にするものあり呉服、唐物、酒、味噌、醬油一切萬物これを懐にして價の消えざるものなし殊に抵當に取りし地券を懐にする者の如きは利子を差引き元金は既に已に消えて跡形なきもの多からん斯く諸色下落の世の中なれば通貨を以て之を仕入れては如何と御詰問もあらんか又左様にも參らぬと申すは今の銀貨安しと雖ども尙十錢の差あり故に爰に下落の極度とするも相場が誤て十錢を踏外したら

ば如何せん夫れこそ又大變なり然ば則ち所有品を見切りて通貨に乗替へ紙幣を懐にして物價今一層の下落を待てば如何とお尋あるも是亦不用心なり今の紙幣其位高しと雖ども高いにも低いにも全體が不換と申す性質にして其尻甚だ軽く腰甚弱く明日にも何かに押へらるゝときは忽ち正銀に降参して席を避け銀貨は諸色と共に雲上に飛揚るなきを期すべからず前年の八十錢身に染みて忘れ難し左れば諸商人は進むに進まれず退くに退かれず又止まることも出来ず過去の商賣皆懐中の氷にして將來又これを懐にするの恐あり苟も資金ある者は金を出したるが爲に斃れ苟も才智ある者は智恵を出したるが爲に敗れ金力智力は身に禍するの媒介にして商賣世界に意氣揚々として氣樂なる者は唯馬鹿と貧乏人あるのみ聖人の教に云く君子は愚を守ると蓋し今の商人等の警ならん歟（明治十六年十一月十七日）

武家奉公御構ひ

文化老人

むかし徳川時代に侍が主家に對して曲事あれば忽ち家祿を没入して永の暇を遣はし尙其罪の重き者へは尙後武家奉公御構ひとて己が家に暇を取らせた其舊臣の行く所を極め他家に奉公する事までも禁じたることあり随分本人の身に取っては難儀なる扱と申す可し抑徳川の治世は日本の儒學極盛の時なり儒學の本尊孔子様は魯を去り衛を去り曹を去り宋を去り鄭を去り陳を去り蔡を去り又楚を去り到的處に奉公して御構ひの沙汰ありしを聞かず如何に封建武斷の時代なればとて自家の奉信する儒教の本尊に對しても武家奉公御構ひなどいふ氣儘の扱を定むることは聊か遠慮して然るべきことなるべし假りにこの奉公御構ひの精神を譬へて申せば爰に一つの小兒科の病院あらんに或る時其病兒等が徒黨がましく仲間を結で一夜暴動に及びたるに病院に於ては大に怒り院の規律を犯して不都合なりとて直に退院申談

じ尙其上にも尙後この者等は公私の別なく開業醫家の治療を受けることはならぬぞよ、身體健康の改良無用なり、生涯病身にて罷在れと添へて申含めたるものに異ならず何と魂消た沙汰ならずや老人は思ひ出して身毛が立つなり併し斯様の話を明治十六年間の少年輩に言ひ聞かせなば如何に封建時代とて左様な無理が通るものかとて老人の言を信する者はあるまじけれども老人決して虚言を申さず文化以來老人が見聞したるものゝみにても武家奉公御構ひの嚴命を蒙りたる人の數は百人よりも多かりしと記憶するなり今の二十歳前後の少年達と兩方の耳の穴を掃除して篤と老人の昔し語りを聴け（明治十六年十一月二十六日）

註 政府が狭量にして少しく毛色の變つたものは飽くまでもこれを排斥したことを諷示したもの。（編者）

短氣は損氣なり鐵道は氣長に布設すべし

鐵道の功能の洪大無邊なるは世界古今譬ふるに物なし唯我日本人は曾て經驗したることもなき品物ゆゑ明白に想像も出来ず隨て此大便利物を得んとて熱心する者甚だ少し然るに近來各地切れぬの鐵道も少しづつは其里數を増し神戸よりは天津迄東京よりは新町までの工事を了り昔しの道中なれば二三日もかかる道を二三時間にて旅行する世の中となりたるよりいかな日本人もそろゝ氣が付き此鐵道が東京から大阪まで續いたら其時の便利はどのようだらうと少し奮發する考になりたるがまだゝ其奮發の輕少なる事は失敬ながら言語道斷なるものなり漫言子が横合から口を出し東京大阪間の鐵道を一二年間に聯絡すべし序でに大阪より下の關迄延ばし更に又鹿兒島まで延ばすべし何も左程手間の取れる大仕事にてはあらじといへば聞く者皆肝を潰し是れ談天の論なりなどいふて狂氣の沙汰と思へり扱其

武家奉公御構ひ

短氣は損氣なり鐵道は氣長に布設すべし

人々の注文を聞けば東京大阪間の鐵道聯絡は今より十年の後を期して十分なり否な十年尙早し二十年の後にて十分なり況や下の關鹿兒島をや五十年を期するも可なりなど、其氣の長きは鼻の下の長きに均しく其肝玉の小さきは肝門の穴の小さきに似たり如何にも此人々の考案の如く毎年三五萬圓の金を集め三五里づゝの鐵道を布設すれば跋鼈千里に達すとやらにて何時か一度は大阪までの鐵道も出來上り追ては下の關鹿兒島までも届くことあらんといへども斯くては肝心の鐵道を利用する時節は今より二三乃至五六十年の後を期せざるべからず漫言子などは今年四十一歳の若盛り人生七十古來稀なる長壽を得るとしても短い生涯の中に鐵道で鹿兒島まで行くことは六ヶ敷からん況や來年は大厄年若し萬一の事にて病死でもすれば大阪までの鐵道も知らずして地獄極樂へ旅立せねばならず扱／＼氣の急かれる事ではあるなり自分が生涯の中に乗用する鐵道なればこそ斯くも氣急ぎに堪えざれども愈々閻魔の廳に轉宅し淨玻璃の鏡に寫して見る鐵道と極りたる以上は漫言子も人々に同意して二三十年乃至五六十年の遲速を争ふて彼是と理屈は申さぬなり就ては漫言子に一妙案あり唯今當金十萬圓を出し召さらば西南九州薩摩湯より東北蝦夷地の北見まで縦なり横なり自由自在の蜘蛛の巢の如くに鐵道を布設して參らすべし其妙案とは他にあらず此十萬圓を以て高利貸商賣を始めさつしやれ利足の割合は五兩一分即ち五朱の月縛りとしてやたらに貸付けやたらに取立てジツト辛抱して二十年の後に至れば前の十萬圓は子に子を産で百二十一億七千九百九十三萬圓餘となるべく今少し辛抱して五十年の後に至れば更に又大ぶとりにふとりて五十一京六千八百九十一兆六千六百六十六億六千六百六十六萬圓餘となるべし此金を以て鐵道を布けば千里や萬里は造作のなき事序でに港も築いて進せん海底隧道も穿て進せん何と旨い工風ならずや漫言子は飽くまで諸君に忠告す死後の鐵道氣急ぎは誠に無用なり十年二十年の後を期せんなど、損氣な短氣を出し玉はずズント

奮發して今五六十年辛抱し玉へ諸君冢上の柏大なる時節には我日本國は世界第一の鐵道國たるべし何と妙案中の妙案ならずや（明治十六年十二月二十七日）

時運逆行株式取引所の衰盛

昔／＼東照神君關東御入國に相成り萬事萬端創業の折柄、或る日江戸の市中御見廻りのとき往來の傍に露店ほしやの如きものを設けて金銀貨幣鳥目など取扱ふものありければ忽ち君の御目に留り其方共は何方の者にて何事を致すやとの御尋に一同ハツト平伏し私共は生國伊勢の町人に候處此度難有くも關東御入國、隨て御當地諸商人等も家業忙はしく渡世仕候に付ては商賣便利の爲めに金銀と鳥目と取替へ又鳥目と金銀と取替へ双方差支なき様其仲立致候思付を以て斯くは賤しき小屋を取立て罷在候也との言上に神君も御感斜ならず成る程諸色賣買便利の爲に町人共が兩方から有合の金錢を持參致して取替る仲立とな即ち其方共も此仲立を以て今日の渡世と致すからには此渡世の事を今より兩替と名付けて宜しからんとの上意に由り日本に兩替の名義は此時より始りしとかや、ケ様に目出度き發端にて爾後徳川殿の治世は萬々歳大江戸の繁昌と共に彼の兩替りかひの露店も次第に盛大を致し小屋は變じて大通りの表店と爲り又土藏作りの大家と爲り儼然たる大都府の豪商所謂十人兩替衆は其末流にて末廣の全盛は舊幕の末葉に至るまで皆人の知る所なり

移り替はるは世の習、王政維新の變革に十人兩替衆も其跡を見ず世は如何ならんと思ひの外明治の盛運駁々として内に百工技藝の進歩、外に貿易商賣の繁榮、舊套の兩替屋杯は迎も文明の間に合はずとて新に開く東京横濱の株式取

引所は千古未曾有の一大盛舉、就中横濱は外國貿易の咽喉にて其商賣取引の活潑なるは固より舊大江戸の比類に非ざれば取引所にて洋銀々貨の賣買は日に幾十百萬圓なるを知る可らず賣て益する者あり買て損する者あり損益は商人の常なれば木の葉投機商の成敗出沒は姑く棚に上げて論ぜず正真正銘の商人輩が銀貨の昂低に注意して厘毛の掛引を方寸の中に運らすを得るは實に此取引所を目的としたりしことなるに如何なる風の吹廻はしにや本年の春以來は木の葉投機者共が取引所より吹飛ばされたるのみならず京濱十方世界の商人等も一切取引所に近付かず、所の門前寂として雀羅を設く可し去りとて貿易咽喉の横濱に銀貨の賣買なくて叶ふ可くもあらざれば自から又賣る者あり買ふ者あり然り而して其賣買の處はどこだと尋るに之を知る者なし蓋し青天の覆ふ所、白日の照らす所、小屋露店さへあらざれば東照神君の御目にも留まらざる所ならん左れば目今横濱銀貨の相場を十錢に昂りたりと云ひ五錢に飛下りたりと云ひ京濱の大銀行は無論日本國中の商賣社會に於て頼て以て標準とする所のものは無邊空漠の際より生ずる所の時價なりと云はざるを得ず嗚呼むかしは伊勢の國の町人が小屋の戯より遂に土藏作りの兩替業に立身し私より變じて公と爲りたるものが今は昔に事替はり巍々堂々たる株式取引所を空うして商人等の跡を絶ち昔の末廣は變じて今の立消えと爲り全國銀紙の相場は露店ならず小屋ならず虚空無邊青天白日の南方に起りて木の葉天狗の集會所より傳へ來るとは是亦時運逆行の一とも申す可きか(明治十六年十二月四日)

大儲け

漫言子は十月二十九日の漫言を以て日本の商權を一手に占るの名法を看客諸君へ御傳授申したれ共世上今日に至る

まで實施の沙汰を聞かず蓋し前言にも申したる如く諸君の御身代にて即金一千五百萬圓の準備は些と御當惑の場合もあらん依て此度びは外國に關係せず唯日本の内々にて聊かの資本を利用して大儲けの手段をお授け申さん先年亞米利加にて或る一商人が世界中毎年所費の鐵の量と毎年諸方の鑛山より掘出す高とを精密に計算して歐米二洲は勿論亞細亞洲にまで手を廻はして市上にある鐵地金をば悉く買占め尙鐵鑛の山元にも渡りを付けて掘探の鐵は一切引受けと約條し五大洲の鐵權を一手に掌握して價の高下は勝手次第人間一日も缺く可らざるの需要品、如何で價の騰貴せざるあらんや此一大舉動を以て彼の商人は大利を得たるや否は漫言子に文通もあらざれば之を知らずと雖ども外國人の事なれば姑く之れを不問に附し唯今日は此商人の故智に倣ふて之を日本國の市上に施すの術を御傳授申すのみ其は他にあらす全國の清酒を買占ることなり我日本國にて酒造の場所は攝州池田伊丹西ノ宮を始として尾州知多郡等其他各地方を合して造石の高五百萬石に過ぎず本年などは米價も殊の外下落したれば酒の價も上中下平均して一石の原價五圓内外なる可し即ち五百萬石にして五五二千五百萬圓これを全國酒價の惣計とす依て今爰に五百萬圓の資本金を用意して國中の酒造元に人を派出し元價二割の手金を渡して買取を約條するときは日本國中の新酒は一滴も漏らさず我手中のものたるべし底で來年二三月の頃古酒は飲盡して將さに新に移らんとする其時に當て酒屋はドコダ唯我獨權なり原價五圓のものを十圓に買はんと云ふ者あるも賣らず、十五圓に付けても相手にならず、漸く二十圓以上に至てソロソロ賣出し上酒の如きは一石三十圓と云ふも買手は平身低頭して之を引取るや必然なり商賣の終局來年の今の頃に至て計算すれば五百萬石の清酒一石の利益を平均十五圓とするも七千五百萬圓に下らず此内より前の資本金五百萬圓一ヶ年の利子一割五十萬圓を諸雜費として凡そ百萬圓を引去るも尙七千三百五十萬圓の純益にして我政府十六年度の歳入七

千五百六十萬圓に比して少々計り足らざるのみ何んと大造なる金儲けならずや諸君若し此名案を實施せんとならば漫言子へは傳授料として純益豫算の高百分の五即ち三百六十萬圓を前金にて當社へ送附せられんことを乞ふ（明治十六年十二月十日）

挽いて轉ぶも彈いて轉ぶ勿れ

とは何事とお尋あるは隣の親爺は五十の坂を越えて二つ三つ、三人の子供に妻と吾れ五人暮しに細き烟を立て、毎日人力を挽き生來がまん強き男なれども叶はぬものは老の年にて雨の夜雪の朝には折節車を挽いて轉ぶこともありければ妻は痛く心配して何卒人力の渡世は止めにせんことを祈り悴も亦當年は二十四歳まだ獨身の辛抱ものにてつまらぬ家業ながら二人前を一人して働くべければ老人の車挽きは思ひ止り給へと頻りに諫むれども親爺はなか／＼に聞入す不相替挽いて轉ぶこと舊の如しと云ふ蓋し此老人は不學ながらも人生獨立の趣旨を辨へて假令ひ五十になるも六十になるも世に存へて衣食すれば病氣の外は人の厄介にならぬと自主獨立の節義ならん身は轉んでも心は立つ者と申すべしこれに引替へ向の娘はことし二八の花ざかりにして容色さへ二九からず其家柄はむかし或る藩中のれき／＼にて世が世ならば兩親掌中の珠玉、蝶や花やと育てらるべきに士族一般の不幸に又も重ねる大不幸は父某が商法に失敗して母の病身に兄の不身持家計切迫の餘り遂に藝妓の鑑札を受けたるは最と氣の毒なる次第なれ共其本人もまた血に交はれば赤くなるの喩に違はず漸く花柳の風に靡きて藝妓の本色三絃を弾きながら折節は内々轉ぶこともあるよし抑も此娘が最前家の不仕合を見兼て斯くせねば孝行の道が立たぬとの一心に身を藝妓の不良世界に下したるは却て家族油

斷の媒介となり今は娘ひとりの働をもて父母兄弟を養ふことゝ成行き一家内は娘の肉を喰ふて安閑たるものなり左れば彼の親爺は自主の道を立てんとして轉ぶこの娘は孝行の道を立てんとして轉ぶ者と云ふべし轉ぶの方法一様ならず其得失をお尋とあれば漫言子の審判に云く寧ろ車を挽いて轉ぶ親爺たるも三絃を弾いて轉ぶ娘となる勿れと（明治十六年十二月二十五日）

明治十七年篇

本篇の概説 明治十五年政府は日本の海運業を助成するためと稱して共同運輸會社なる保護會社を設立し三菱會社と對立競争せしめた結果、兩者の競争激甚を極めて殆ど底止するところなき有様であつた。「時事新報」の「蒸氣機關の事を記して併せて三菱共同運輸兩會社に論及す」との長篇の社説は局外獨立の地位より冷靜に其事を批判したものである。○海外移住の必要は先生の宿論であつて此年以來の「時事新報」に於ては特に熱心にこれを奨励し青年學生の米國移住を勸説せられた。○條約改正は明治維新以來官民識者の夙に關心するところの問題であつた。「時事新報」は此年「條約改正論」と題する數篇の社説を掲げて條約改正の必要なる次第を論述し、先生は更に其趣旨を一般國民に徹底せしめるため「通俗外交論」數篇を草して此問題を詳説せられた。「通俗外交論」は「福澤全集」第五卷に載せてある。○昨年來安南事件に關する佛清兩國間の交渉は此夏遂に破裂して開戦を見るに至つた。○十二月朝鮮京城に於て獨立黨なる金玉均朴泳孝の一派が政變を企て一旦成功したるも支那兵の襲撃に遭ふて失敗し、又京城駐屯の日本兵も支那兵と衝突し我官民は支那兵のために害を被つた。政府は其事件談判のため差向き井上馨を全權大使として朝鮮に派遣した。○此年政府は華族令を公布し公侯伯子男の爵位を設けた。

政治外交

佛國は支那の恩人なり

支那は世界に於て最大國の一なり人口の繁き地面の廣き水利河海の多き地利沃野の大なる其他礦山あり森林あり天與の物産は甚だ豊かにして位地季候の點に於けるも亦申分あることなく其國の幼稚なる人民に較べては實に過分の樂土なれども爰に支那國の爲に一の大缺點とも稱すべきは元來其人民の性質として横柄自大、國を鎖して獨り安んじ絶て萬國の時勢を辨へざる事なり數千年の今も古へも唯固有なる自流的文明の外には一步も進行する所なく四億餘萬の人民夜寝ね晝寤て偶然生れ來り又死し去るあるのみ左れば支那が西洋の諸國と交通して以來星霜多からざるに非ず應接繁げからざるに非ざるも如何せん舉國舊套に閉ざられて年々歳々老て物變らず依然たる中華の古帝國なるを、夫れ十九世紀の今日は電氣蒸氣の世の中にて若し之を利用するを知らずんば如何に過分の樂土を有すと雖ども到底何の用を爲すこと無く却て電氣蒸氣を利用する者の爲に其過分の樂土をも利用せられんは數理の明白なる者と云ふべし故に支那國の人民は今に猶幼稚未開の者なるにもせよ又横柄自大にもせよ唯西洋文明の利器をさへ利用すれば以て自國の富源を開て且つ其獨立を持續するに足るべし軍艦火輪の堅固神速なる大小砲銃の猛銳なる地水雷火の激烈なる砲臺壘壁の堅牢なる攻防戰略の鋭敏なる其之を發明利用する者は如何に蠻夷戎狄の下國なるにもせよ唯その銳利激烈に畏れて坐ろに之を採用するの念慮を生じ愈々採用して實際に接すれば其銳利激烈も思はざりし惟力を有するにぞ急に發心

敬服して中華の夢を覺まし漸く西洋の新事物に注意して次第に其妙理を悟り是に於て始めて十九世紀の文明に入門せんこと若し支那人が人並の分別あらば必ず此に思附かざるを得ざるべし蓋し今日の支那國にては到底文明の學問を看破て奮然之を採用するの決斷あらんとも思はれず責ては蠻夷戎狄なる西洋諸國の邪器邪物の實際に衝當て自家の肝膽を冷やし始めて頓悟して電氣蒸氣を用ふるに至る迄は別に支那國の痼疾を癒すべき良藥これなかる可し左れば何人にも支那人の肝膽を冷やかしかし彼れが四千年來の惰眠を攪破する者は實に支那國の大恩人ならんのみ

回顧するに當時歐洲の一強土なる佛蘭西共和國は右の支那國と安南事件の交渉を引起し紛議の始めは十餘年前のことなる由なるが愈々葛藤となりたるは昨年五月以來の新事變にて將に戰爭の破裂に立至らんとせしことも度々なりしが昨今の景狀に據れば降りみ降らずみ只管秋天の陰雲に似て雨晴孰れとも決せず佛國にては頻に援軍を東京に向くるが如くなれども其國は未だ一方に歸著せずして左顧右眄働き常に自由ならず然るに支那國に於ては在廷の諸官は勿論人民一般に慷慨激昂して夷賊の佛蘭西を罵ると雖ども其心裡に戰勝の策を講ずるに於ては先づ中國の兵師戰艦砲銃の精銳を察して次に敵國の軍勢戰器をも考へざる可らず又進んでは其國一般の時事民情に注意し海陸軍の精銳は如何の戦費糧食の供給は如何、國の富み民の智は此の如く政府人民の状態は彼の如しと急に其國狀を視察せざる可らざるの必要に切迫し或は通常の人民は徒に敵愾の血氣に冒されて唯佛夷佛賊と叫呼する者も多數ならんと雖ども在朝在野の人にて聊かの智見あらん限りの者は此事件の爲に大に外國の事情に通達するの機を得、又葛藤の當局者も愈々開戦と覺悟する上は軍艦無かる可らず砲銃無かる可らず水地雷火も備ふ可く陸戰海戰も練るべく一步進んでは信息を通ずる爲に早飛脚の不便を感じて電信の必要を知り二歩進んでは兵師の運送に歩行の遅々たるを知て海に汽船陸に鐵道の已

み難きを詳にし更に斯くなる上は三步進んで西洋文明の門に入るも亦近きに在りと云ふべし先年上海吳淞の間に鐵道を敷設したりしとき何かの故障にて折角に取設けたる文明の器具を再び取毀ちたりとの奇談ありしに昨秋李鴻章左宗棠等の諸顯官が交々上海に在留せしとき北京政府との問答往復に星使夜馳す杯の緩慢手段にては到底機變に應ずるに足らずとのことよりして上海より天津までの電線も更に北京まで増設の議起り佛國との交戦は將に今夕にも在らんかと思はるゝ切迫の最中に其工事を取急ぎ又別に廣東地方にも電線を設くるとのことは當時我輩の耳聞せし所なりき右の電線は果して若干の里數にて又如何なる現狀なるや之を知るに由なければども兎に角に先年太平の時にすら鐵道を取毀ちたる同一の支那人が非常切迫の時に惶遽しく電線を架設するを見れば亦以て支那人が其肝膽を冷やして多少の舊夢を覺ましたるを知るべし其他甲鐵艦水雷火船若くは大砲小銃を外國に注文し又は外國より諸般の技手士官を召聘し又は内國に於て郷勇水兵を召募團練する等、戰爭未發の瞬間にあつて大に此事に盡力せる支那國人の手際てきざしの活潑にして平生の緩慢に似ざるは實に外人をして殆ど喫驚せしめたり又之を外にしては歐洲在留の支那欽差大臣が佛國に英國に往來奔走して安南事件を談判し其報道と風聞とは本國に返響して普く支那人の耳に達し之と同時に歐洲の時勢をも窺ひ知る等の影響を枚舉せば實に際なきことにして孰れも支那國の固陋を打破する者なり斯る理由なれば支那人は依然として中華の外に人國を見ざるも其夷狄の時事形勢を知るは則ち西洋文明の學を知るの階梯にして蠻國の利器を模するは亦文明の利器を用ふる初段なりと云はざる可らず願ふに目下佛支の葛藤が如何に立行くべきかは容易に定め難けれども支那は遂に東京の主權を棄て、雙方相引きに引く歟或は支那より若干の償金を出し他國の仲裁にて和睦する歟今日の處にては急に交戦のあらんとも思はれず兎に角に昨年五月の交渉より既に十月を閲たりと雖ども未だ